
スリーピース

双色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スリーピース

【Nコード】

N83900

【作者名】

双色

【あらすじ】

世界は式で出来ている——らしい。ちなみに今でも意味がわからない。そんなファンタジーな頭の持ち主である俺の幼馴染みがまたやらかしてくれたのだ。今回は何でもバンドを立ち上げるつもりらしく……。しかしやはりそんな思い付きが罷り通る世の中でもない。式という壁で囲った箱庭で、一人孤立する少女を巻き込んだ、これはそんな騒動の顛末である。生徒会長、バンド、恋人作り——三つの変数が織り成す、そんな式が紡ぐ物語。

/ Prologue

/ 0

例えばこの世界が式で溢れ返っているとして、そんな式を溺愛する少女がいるでしょう。

その少女はあたかも世界の真理を読み取り、神のお告げを聞いてシャルル七世を救った聖処女ジャンヌのごとく悟りを開いているつもりなのかもしれない。兎にも角にも、そいつが信じているのは自分だけであり、その自分さえも式の中の記号の一つと認識しているのだ。

ようは、存在を成立させている構造、論理みたいなものが式なのだ。

案外自分を解体してみるとそこには内臓や骨なんかではなく、xやyなんてものが蠢いているのかもしれない。本気で言っている訳じゃないのだが。しかしそれをほとんど本気で信仰しているのがそいつなのである。馬鹿も休み休み言えと言いたくなるが、残念ながら昔から式式言ってる癖に学期末には数学だけじゃなく全教科で最高評定を記録しやがるから驚きだったりする。

世はなべて事もなし。

そこにあるのは式だけだ。

創造心理とか、存在意義とか、発現理念とか、まあ、先人達が組み上げてきた全ての理論を片付ける魔法の言葉が『式』なのである。いやはや、どうなのだろう。ちよつとそう考えると世界は単純過ぎやしないか。

…

こんな結果になるとは思っていなかった。

そんな風に思つて、それが後悔だと気付いたときに急に未練が湧いてきたりすることはないだろうか。俺は人生で一度だけ、それを体感したことがある。人生において不安定な時期と語られる、かの悪名高き中学生時代（恥ずかしい言い方をすれば思春期とか云々かんぬん）の出来事だった。

今から思えば俺も少し荒れていたのかもしれない。

別に喫煙や飲酒をやらかしたり、法やモラルに触れることをしでかしていたわけではないのだ。ただ少しだけ、心の中が引つ繰り返つてはつちやけていただけ。後にある式少女がその多感な時期についての自論を俺に語る機会が訪れ、奴は、高説高々次のように述べた。

「子供つて散らかすだけで片付けることを知らないでしょ？ だからね、生まれてから十二、三年までに心の中のものを散らかし続けるのよ、人間つて。生きてきた証は記憶と経験だから、それをしっかりと保管するでも保存するでもなく、徹底的に散らかし続ける。当然部屋は滅茶苦茶になるわよね。そんな部屋を整理する為に、散らかつてるアレコレに名前を付けて、然るべき場所に収める為の期間がちよとそころな訳。多感とか、不安定とか、つまりそういうこと。自分で自分がわかつてないんだから、荒れて当然よね。…え？ あたし？ なにバカなこと言つてるのよ。あたしにそんな時期、あるはずないじゃない」

ちなみに以上はダイジェストなので、もしもこの一場面が映像化し音声が付くとしたらここは俺の脳内再生として、本人の声ではなく俺の声で流されるだろう。いやいや。昨今の技術なら上手く回想も付けてくれるのか。どうでもいい。

こんなことを言っている式っ娘だが、最後の発言には断固とした

虚実が含まれている。

不安定な、多感な時期がなかっただと。

馬鹿言うな。本当にそうだったなら俺はわざわざこんなことを語らなくても済んだのだ。

中学時代、色々あって世界中から孤立している少女がいた。彼女風に例えるなら、散らかしたあれこれを鎖で繋いでわっかを作って、高い高い壁で自分を囲ったのだ。そうして出来た箱庭の中で神様を気取っていた。自分本位の自分主義。だから寄ってくる者は拒絶して、触れようとすることは跳ね除けた。

壮絶な暗黒時代——この時期は人間によって栄光と暗闇のどちらかに区分される両極端だ——を経て、しかしそれでも今ここにあるのは日常と言える。それは様々な紆余曲折と周旋奔走の末に得た奇跡と言って……は、さすがに大袈裟かもしれない。

我が人生十七年間を振り返って本気でなかったこと、やり直したいこと、後悔の権化にして象徴たる事件はまあ何とか大団円に限りなく近い結末を見たのだが。あえてもう一度言う。それは本当に忘れ去りたい日々の思い出だ。

まあ、その事件についてはいずれまた機会があったら語ることにしよう。

特に語られるべき逸話ではないのだ。国語辞典を朗読する方が有益だ。

だから少し別の話をしよう。

それは、式少女が式少女として世界に帰還した後の物語。

俺と——俺の幼馴染みが巻き起こした人騒がせな話の顛末である。

しかし色々と言ってきたが、これらが全て無駄に終わることはない。

これまでのあらましとして、せめて頭の隅っこに断片的にでも残しておいてもらえれば幸いである。

だってそれこそが、前書きとかプロローグとか呼ばれる序章が、

ただのページ数稼ぎにならない為の存在意義——存在式なのだから。

1 / 式っ娘の気紛れ（前書き）

/

目覚ましの音で目を覚ます
生憎の雨が欠伸を溜息に換えた

白いスニーカーで水溜りを蹴った
はしゃいでいるつもりはないけれど
ただ泣いてる空に負けたくなくて

そう いつか

遠くの空へ駆け抜けて
青く青く果てない色の夢に声よ届け
キミの歩む道
その道標になる歌だけを胸に響かせて

昨日にb y e - b y e

私が空より早く泣き止むんだ

1 / 式っ娘の気紛れ

/ 1

世界は論理式で出来ている。——彼女はそう言った。

しかしながらこれ十年以上も幼馴染みをやっている俺でさえ、彼女の言うところである『論理式』とやらが何であるのかを知らない。昔一度尋ねてみたことがある。まあ、若かりし日の、その若気の至りとも言うておこう。

彼女は何でもない風に、人類普遍の心理を子供に語り聞かせるように説明するのだ。

「愛、自由、夢、希望、足元を見れば転がっている些細な幸福から、絶望、失望、怨恨、憎悪、なんかの不幸をそれら全てを成り立たせている世界の共通思念よ。いい？ 世界は概念なの。深層心理の集合なのよ。その意識が導き出す『解』が『現実』で、それら普遍の意識の集合こそ『論理式』なのよ。わかった？」

まるでわからない。苦笑いすら忘れて俺は、退散したのだった。

ちなにみこの彼女、我が幼馴染みの理紗が彼のバンドグループの熱狂的ファンであることは語るまでもない。

そんなこんなで。

頭の中が愉快的な式で満たされている理紗の日常が、勿論までもであるはずはないのだ。主に中心にいる人物が周囲を引っ掻き回していくのでこれはもう自業自得のようなもののだが。結果的に迷惑を被るのが周りの人間だということを少しは理解してほしい。

そして今日もまた、何気ない彼女の一言で世界は急転直下に展開していくのだ。

ある日の昼下がり。いい日小春日和な夕刻の帰り道で、最近購入

したという最新のバンドスコアを眺めながら理紗は何でもない風に呟いた。

「彼氏が欲しいわ」

「——はい？」

俺の世界に流星群が降ってきて、氷河期を迎えた。

「そんな歌詞、あったか？」

手元のスコアに視線を送る。俺も少なからず彼らの曲は聴いているが、はて、そのようなフレーズはなかった気がするのだがどうだろう。無論、理紗はスコアに記された歌詞を読み上げたのではなくて、咄嗟に心情吐露をしていたのだ。

そもその前提として。

「これ、スコアじゃないわよ」

「え、そうなの？ だったら、何読んでるんだ？」

「これはね、バンドスコアを装った『恋の哲学書』よ」

何故装うんだ。

「素晴らしいわよ。あんたも読んでみなさい」

どれどれ。

……………

「愛って素晴らしいわね。性を越えた美しい想いがそこに——」

「あんなのは腐った女子の妄想だよ！」

俺は、なにか大切な物を失った。

おーけー。気にするな。こいつも女の子なんだから、これくらいでもショックだよな。幼馴染みが下校中にボーイスラブな小説を読んでいたら。

ふん、と鼻を鳴らす憤然とした態度。バイブルのごとく抱き締めた見た目ミスター子供たちのバンドスコアを、ぎゅっ、と胸に押し込んだ。どうやら俺の書評が逆鱗に触れたらしい。

「とにかく！ 彼氏を作るのよ、カレシを！」

最後の方は携帯小説みたいな発音だったな。

ちなみにい、語尾を引く言い方で理紗は、じと、と俺を一瞥する。

拳を作って腰に当てた、前屈み上目遣いのじと目が睨み拳げてくる。指先が鼻っ柱に突き刺さった。比喻ではなくてリアルな意味で。ぶす、と刺さったのだ。地味に痛い。

「これ、最終的に一番近くにいた幼馴染みとくっついて終わり。めでたしめでたし。なんてベタな非論理的な展開は決してありえないんだからね。心得ておきなさい」

2 / 『定数項』 Ⅱ 『お約束』

/ 2

翌日の朝だった。俺の部屋に窓から侵入した理紗は、その背にでつかいギターケースを背負っていた。なんのつもりだ、と訊く前に、この不法侵入女は俺の被っていた布団を一息に剥ぎ取る。音を立てて翻る。おい待て、幼馴染みとはいえこの状況は頂けんぞ。

「なにをするバカタレ」

「バカタレ？ 何を以ってあたしをバカとするのかは知らないけど、あんたにだけは言われたくないわね。それに、タレって何よ。どういう意味？ 理解できるように五文字以内で説明してくれる？」

「無理だろ」

「最初の五文字を抜き出さない」

「知らねえよ」

補足までに説明しておく、この会話の中にバタバタとしたコメディー漫画みたいな展開は皆無だった。そりゃそうだろ。だって考えてもみるよ、主人公の部屋に起こしに来るヒロインってさ、ある朝急に妙なもんを目撃して悲鳴を上げたりしないだろ。そんな神経の持ち主はズカズカ部屋に上がってこない。

なので俺は冷静にズボンを履き替え、制服に着替え始めたりもしていた。

「きゃーなにを見せてるのよ、このばかー」

「……おまえが着替えろ、ったんだろ」

そう、全てはこの女の指示の元に行われているのである。ありえねえ。何で朝の六時から俺、登校の準備してるんだ？

文句は口に出さず、だらだらと手を動かしていると、俺の寢床を

我が物顔で略奪した理紗が説明を始めた。指をくるくるさせて、宙に円を描いている。

「これはあれよ、定数項よ」

「なにそれ？」

「『お約束』」

だったらそう言えはい。

「幼馴染みの女の子が、男の家にやってきた場合。この公式に当て嵌まる変数を仮に x と置くわ。そして定数項、つまるところ変動のない『お約束』を今回は『幼馴染みの女の子が悲鳴を上げる』というものを採用したわけ。変数だけじゃ式は成り立たないでしょ。ここにあたしとあんたという絶対値を掛け合わせ、式を解紡かいほうしていくと最終的に導き出される変数 x は」

以下略。

「なわけなのよ！……て、あんた、中盤から聞いてなかったでしょ？」

どうだか。

お約束というなら、これこそが俺にとってのお約束なのだ。理紗特製、世界の真理式。またの名を論理式ともいう。恐ろしいことにこの女は、世界中がこのような式の上に成り立っていると考えているのだ。全ての変数は定数と成り得る。ある式の上で求められた変数は、別の式の上では定数として存在し世界は繋がっている——らしい。

謎の世界観を持った幼馴染みはそして、本日はどうやらその変数に『ギター』を当て嵌めるつもりらしい。俺もこいつとは長い付き合いだ。それくらい解る。朝っぱらから訪ねてきた理由にだって大方の推測は出来るが、あえて訊いてみることにした。

カッターシャツの第二ボタンを留め終えて、

「本題だが、こんな時間から何の用だ？ 学校なら後一時間は寝てられたぞ」

「人の話聞いてなかったの？ 昨日言っただでしょ、あたしの彼氏作

りよ。その計画の第一歩」

「僭越ながら初耳だ」

ふむ、といいつつも。

背中のギターは、そういうことか。夜に口笛を吹くと蛇が来る、という迷信がある。楽器で男を呼ぼうという魂胆ならばそれはつまり、

「バンドを組むのよ」

「一応訊いてやる、何でバンドなんだ？」

「ふふん」不敵に笑って、猫目が勝ち誇る輝きを放つ。「革命とは、武力では起こせないものよ」

答えになってない。おまえに彼氏が出来るとは革命染みた現象なのか。

性格さえ隠蔽すれば、見てくれはいいんだから男の一人や二人は簡単に引つ掛かるだろうよ。

「そんなのわかってるわよ！」

あ、自意識過剰だ。ここまで来ると清々しい。

「あたしの美少女値は2876なんだから」

基準がわかんねえ。

「こほん」

わざとらしい咳払いだ。掛けてもいない眼鏡を上げる素振りをして、

「ねえ、国と国、さらにいうなら、世界と世界を隔てる境界はなんだからわかる？」

「一般には山とか川とかじゃねえの。何よりも人の心が――」

「――夢のない話ねえ。かつこつけた言い回しがキモイ」

悪かったな。つつか最後まで言わせろ。

「言葉よ」

腕組み脚組み。理紗は言った。

「私達は決定的に言葉が異なる。この世に散らばる無数の言葉の中から一つか二つを選んで世界を統一しようなんて、出来るはずがな

い。だから争いが生まれる。言葉が違うから、理解し合えない。武力はその垣根を越えるけれど、解り合えるものじゃないでしょ。だから、音楽なのよ。魂に唄いかける心の叫びは、きっと全世界に届くはずだからね」

空でも飛びたいのかこいつは、両手を左右に大きく広げる。

俺は小さく拍手なんか送ったりしてみろが、心の中ではやっぱりこう思う。なんの話だ。

「だからバンドを組むの」

「『だから』に至る経緯をもっと簡潔に教えてくれ」

「音楽で男の目を惹くのよ」

「わかりやす！」

俗物だな、おい。バンド始める奴は九分九厘その目的とか言われてたこともあった気がする。

俺は口に出さず理紗の言葉を反復した。バンド。バンドって何人くらいでやるもんだっけ。最低でもギター、ベース、ドラム、三人は要るわけだ。メロディの重厚さを考えてギターをもう一人加えることが大半だろう。ヴォーカルをどこかで持つなら、最低三人か四人で組めるということになる。

「で、俺を早朝から叩き起こした理由は」

「決まってるでしょ。朝練だってばよ」

俺、知らない間にメンバーだし。

「……だとしても、パートは決まってるじゃないし、メンバーもいないのにどうするんだよ」

「そっか。じゃあ今日はミーティングにしましょう。ていうか、あんた自分が参加することには文句つけないのね」

今更おまえの決定に逆らっても無駄だって、知ってるからな。

「へえ。まあ、式の通りかな」

窓の外が明るい。昇り始めた陽が世界を照らし始めて、部屋の中にはそれよりも明るい太陽みたいな極上の笑顔があった。

「あんたの返事は、とっくに解いちゃってたんだからっ」

3 / 生徒会長と式っ娘

/ 3

何が、あんたの返事とはつくに解いちゃった、だ。

眠気満開の両目を擦りながら灰色の空に欠伸を一つ吐く。家から近いつて理由で学校を選んだだけに、家から自転車を使って十五分くらいで到着した。なので、現在時刻を説明すると実に、午前六時三十分なのである。

校門開いてねえよ、アホか。

寒空の下で溜息は白く凍り付く。体温の奔流を感じながらマフラ―をきつく巻き直し、冷たい石の壁に凭れる。まだ眠い。どうすんのこれ。目閉じたら死ぬよね、俺さ。

「意識をしつかり持ちなさい。こんなところで寝てたら通行人が何をするか知らないわよ」

反省の色はないのかよ。理紗は開かずの門をげしげし蹴りまくっていた。おまえはそうしてるからそんなに寒くもないんだろうけどいきなり叩き起こされて、真冬の街中に放り出された俺の気持ちも理解してほしい。

「もう六時半でしょ？ そろそろ先生来るんじゃないの。門開くわよ」

生徒の登校は一番早くて七時からしか認められていない。部活の朝練とか、そういう特別な理由で顧問の許可の下に、である。俺たちのような生徒は門が開いたところで果たして中に入ることが出来るのかどうか。まさか放置したりはしないだろうが。

「ったく……だんだん苛々してきたんだけど。なによ、この学校。宿直の教師とかいないの？」

インターホンを連打しながらばやきだした。俺が言うならまだあれだが、おまえだけは誰にも文句を言っではいけない。ていうか、それだけ連打してもしも誰か応答してきたらどうする気だよ。

本格的に寒いわ眠いわのレベルが危機的な状況になってきたので、近くのコンビニで暖を取りに行こうと提案しようとしたときだった。「なにしてるの、あなたたち」

鈴のような声が聞こえた。それが誰の声であるかに考えるよりも先に思い至る。条件反射とかそんなのに似ている。この声にして彼女あり、とでも言おうか。いや、単に発言シーンが記憶の中に多いから声と姿がダイレクトに結びつくのだ。

そういう訳で生徒会長、鈴童静歌の登場である。

「生徒は七時からしか登校できないって知らないの？ ていうか、鼻赤いわよ、その君」

指差しているのは俺だ。そりゃあこれだけ寒い中に長時間じっとしてるだけだったのだからな。今更恥じらう気力さえも失せている。返事に言葉は用さず、ただ鼻を嚙って彼女を見上げていた。そこで俺は、自分が気付かない内に座り込んでいたことに気付く。本格的にやばいんじゃないか。

冷凍保存寸前の俺を横目にして、それだけ。鈴童は真っ直ぐに校門に向かっていき、あっさりと施錠を解いてしまう。しばしその様子に思考が停止する。なんだろう物凄く不自然というか、違和感を感じる。ああそうか、と納得した。問題というか疑問というか、とにかく違和感の正体は一生徒に過ぎない彼女が強固な門を解錠したことにあつた。つまりは何でこいつ鍵持ってたんだ、ってことである。「ちょっと、なんであんた鍵持ってたのよ！」

同じことを思ったらしい理紗が俺の心象を代弁する。何喰わぬ顔をして門を抜けた鈴童が、長い黒髪と赤いコートを翻して面倒臭そうに振り返った。あっけらかんと何でもない風にさらりと、

「生徒会長だから」

きつと俺も理紗も馬鹿みたいな表情を浮かべてばかんとしていた

んだろう。呆れた、なんて目で言われる。肩を竦めた生徒会長様は次のように真相をのたまった。

「姉さんに鍵を借りたのよ。あれでもあの人の、ここの教師だから。家近いし出勤早いから、門の鍵渡されてるのよ」

「姉って……鈴童先生か」

そ、短い肯定の返事。

なるほどといえば、なるほどなんだが。鈴童なんてよくある名前じゃない。家族と言われてしまった方が納得できるというのはその通りだ。なのだが、今までそう思えなかったのは二人があまりに似付かないからだろう。片や酒乱の女教師（噂なんだけど）、片や完全無欠の生徒会長だ。血縁関係なんて自発的に想像できるはずがない。だがしかし、言われてみればとも思わなくはないのだ。少なくとも容姿はどこかしら似かよった風もある。

切れ長の瞳や細い形の綺麗な眉毛。薄い桃色の唇を引き結んだときの凛々しさなんかは確かに似ている。髪の色はあれだろう、天然と言い張っているが先生の茶髪は間違いなく後天的なものだ。落とせば闇より深いこの漆黒になるはずだろう。

「そういうこと。今日は色々仕事があるから早く門開けてって言ったのに、案の定寝坊するだから、困った姉だよ」

「生徒会長って言っても、おまえだって生徒なんだから校内侵入禁止じゃないのか」

「ばれなければいいんです。大丈夫、よくあることだし」

生徒会長はよくルールを破るのか。

「それで、そろそろわたしの質問に答えてくれる？」

「ああ……えーっと……」

答えあぐねる俺の後ろから、

「バンド作るのよ。バンド。バンドよ」

俺に立ち代って門に凭れた理紗が答えた。

なんで繰り返すんだろう。

「バンド？ 軽音楽のことよね。それってなに、部活を作ろうって

こと?」

「練習できる場所は借りたいから、そんな感じね」

あ、という感嘆に驚嘆符を付けた台詞の後に理紗の瞳が爛々と輝き出す。頭上に点灯した電球が八千ワットほどの輝きを放なっていた。あれだ、こいつが何かを思い付いた時に見せる表情だ。

「あんた生徒会長でしょ、だったら手伝ってよ」

理紗は鈴童の手を掴もうとして、ひらりと回避された。

「部活を作るならそれなりにクリアしないといけない条件があるわよ。……はあ。わかったわ。寒いし詳しい説明は生徒会室でどうかしら?」

4 / 得難い条件

/ 4

そのような流れで生徒会室にお邪魔することになった謎の早朝登校二人組は、徐々に暖房の利いてきた部屋で椅子に腰掛けているといった状況だった。なんだこの待遇は。不相応過ぎる。俺の隣でルーズリーフを広げながら何やらをしている式マニア少女は、そんなことなどまったく気にしていないようだ。

無敵の生徒会長、鈴童静歌は一人黙々と書類の山を処理していた。年末の頃、今学期の予算についてまとめを行っているらしい。しかしそういうのは会計委員とかそんなのがやることじゃないのか。そう言つと鈴童は、

「生徒会執行部、ってさ、一応部活みたいなものなのよ。定員数が集まらないことも、まあしばしばって感じなのよね」

肩凝りをほぐすみたいに首を捻りながらあっけらかんと興味無さそうに答えた。

生徒会役員は半年に一度の選挙で選出される。主に立候補によるものであるため、定員割れが起きることもなくはない。その場合立候補期間を延ばしたりするのだが、今年は確か二週間ほどの延長を経て遂に最後まで定員が集まらなかった。

……無理もないかもしれない。前期の役員たちは半数ほど二年だったので、つまりはこの会長様の敏腕さを直に、毎日目にしていたわけだ。思ってしまったのだろう。自分たちのいる意味って、みたいなことを。わからないことはないのだ、そういうのも。

空白の役職には便宜上の幽霊部員が存在しているらしい。続投を拒否した前任の名前をそのまま使っているとか。教師がそんな現状

を黙認しているのも、この会長あつてのことなのだろう。

結局今期の生徒会は定員数を割ったまま幕を開けたのだ。

現在は日々日頃より常時役員募集中らしい。必要ないのだろうけど。

なにせ会長のキャパシティが異常だ。

シャーペンを机に置く音がする。ひたすら業務に打ち込んでいた鈴童が顔を上げた。やり遂げた感もなければ、やってやった感もない。して当然当たり前、みたいな顔だ。本気でそう思っているんだろうな、こいつは。

「お待たせ。思ったより時間掛かつちやったわね、ごめんなさい。で、確か部活の話よね。えーと」

置いたシャーペンを指で弾き、そのまま回転させる。

「まず始めにだけど、部を設立するには最低定員五名が必要よ。それから顧問の教師。この二つには何か当てがあるの？」

五名。ギターとベースとドラムとそれからなんだ？ キーボードとかだろうか。ギターをもう一人加えるとして、ボーカルを別にするのと丁度五人だ。いやいやそんな問題ではない。部員は俺と理紗の二人しかいないのだから、残り三人、それに顧問の教師だって当てが皆無だ。

……もしかしてあるのだろうか。何か、その当てみたいなのが。

この場の対応は理紗に任せることにした。

「ないわよ」

往年のコント番組並みにすつころびそうになった。

「昨日考えたことなんだから、どうしようもないじゃないのよ。今のところ二人だけよ」

胸を張って言いやる。

普段から論理だのなんだのと言っているが、突発的な無計画性は言動と著しく矛盾を起こしているのだ。それだって本人に言わせれば当て嵌まる式が存在しているそうなのだが、どこまで本当なのかなんて考えたくもない。

かしゃん。回転したシャーペンが音を立てる。

「わかりました」

鈴童が短く言う。なにがわかったんだろう。

「それじゃあ後三人、それから顧問の先生を連れて、もう一度来てください。そうしたら総会を開いてから審議に掛けて、予算案を組み直して、それから部室とかの準備を――」

「ちよつと待った」

声を出したのは俺だ。

話を遮ると、途端に鈴童の目付きが変わる。驚いた。いや、ぞつ、とした。さっきまで温和で柔らかな目をしていたのに、今の一瞬見せたそれは氷柱のような切っ先と絶対零度を持ち合わせていて――
「なにかしら？」

彼女の眼差しが眼球に突き刺さる刹那の手前、先の比喻ではないが、今までの鋭さが融解した。今までと変わらない温厚な優等生の瞳がやんわりとこちらを見据えている。

「いや……その、なんだ。聞いている限りだと部の設立までに結構な時間が掛かるみたいじゃないか？」

「ええ、まあね。こちらの事情で悪いけど、今年度の部活会はもう終わってるのよ。今から新しい部を立ち上げるとすると、また初めから全部やり直しになるから、早くても設立は来年になるわね。……申し訳ないけど、少し待ってもらうことになるわ」

「あ、や、構わない。俺は……全然」

気丈な癖にこんな時は心底申し訳なさそうにするのだ。上目遣いで謝られたりしたら、この学校の男子生徒の九割は許してしまうだろう。が、しかし、全男子生徒は許しても俺の隣の女は許さない。思い立ったが吉日を体現したみたいな性格をしているからな。

案の定理紗は机に張り手をお見舞いすると語調を荒げた。

挑むように威嚇する眼光を光らせる。

「それじゃあ困るわよ！ あたしは今、すぐに、バンドを始めたいんだから」

「……そう言ってもねえ。協力はしたいけど、決まりは決まりだし」

「あんた会長なんだから、なんとかしてよ」

「他の部との兼ね合いもあるのよ」

「そんなの、あたしの情熱でどうにかするわよ！」

どうにもならん。

「やめろ。駄々を捏ねてもしょうがないだろ」

黒髪の分け目に手刀を振り下ろす。

対面に乗り出していた小柄な体を引つ張り戻して椅子に座らせようとするが、これがやたらと暴れやがる。ことを遂行するのに顔面へ三発もの拳を貰っちゃった。子供かこいつは。

「なによあんた、どっちの味方なのよ！」

「正義の味方だ」

「最低ね。あんな作り物の笑顔に騙されて。これだから男は」

ばれてんのかよ。そうじゃなくて。

「鈴童が正しい。まずこっちは顧問とか部員とかを揃えるところからだ。話はそれからだろ」

「でも……だつてえ」

噛み殺した声を出す。表情は感情を押し殺すのに必死だ。こいつだって本物の子供じゃない。話せばわかるし、なにが正しいのかもわかってる。……はずだろう。とにかく、引くべきところは知っている。だからこんな顔をするのだ。

やり切れない。負けず嫌いで反抗したいのに、それは自分の言う式に反するから出来ない。せめて強がって見せる。昔から何一つ変わっていないそんなところだけは、本当に、子供のままだ。

机にしがみ付く理紗を引き剥がして、取り合えずは生徒会を出る。これ以上居座るのも迷惑になるだろうからな。

「悪かったな鈴童。取り合えず部員を集めてくるよ。あー……色々世話になったな」

「そんな。わたしは何もしてないわよ。力になれなくて」

眉を顰めて、肩も竦めて、なのはどうしてだろう少女の瞳の色は

寒々しくて、
「本当に、ごめんね」

*

生徒会室の扉がスライドしたのは渋々退室を決めた理紗を引き摺っている時だった。

「おっはよう！ 遅れてごめんね静歌ー！」

朝っぱらの冬空を、灰色から青色に溶かしてしまいそうな声が飛び込んでくる。核融合全開とばかり、縮小版太陽みたいな笑顔がまるで新しい玩具を手にした子供のように澆刺としていた。

誰あろう、鈴童六花教諭である。現職生徒会長の姉であり我が校の数学担当教師な彼女は、本当に鈴童の姉なのかと疑うくらいに無邪気な笑顔を浮かべていた。

実際彼女が高校の制服を着ていたなら間違いなく双子だと思ってしまうだろう。それどころか妹かとさえ考えるかもしれない。童顔なのは実はよく見ると二人ともなのだが纏う空気が違い過ぎる。どちらが大人でどちらが子供かなんてことは正しく一目瞭然だ。

そこにきてしかし、俺は扉を勢いよく開いた際に弾んでいたコートを押し上げる膨らみも見逃していなかった。厚着の上からでもわかるくらいのサイズを誇る双丘が容姿に不釣り合いなところか背徳的ですからある。

もしかして鈴童もそうなのか。

こっそり視線をスライドさせると、額を押さえて俯く生徒会長の姿が目に見え込んだ。

「……おはようございます、鈴童先生」

「やだなあ、もう。自分だって鈴童じゃーん。静歌ちゃんもしかして怒ってるの？」

「怒っていません。……もう、場を弁えてよお姉ちゃん」

鈴童は溜息でこちらを示す。

ぽっかーん、と開いた口が間抜けに見えないのは幼い容姿が浮かべた笑顔のせいだろうか。鈴童先生は啞然とする俺と理紗に気付くと咳払いを挟んで態度を改めた。

「おはようございます。二人とも、朝が早いんですね」

胸ポケットから眼鏡まで取り出したのだ。

「関心ですねー、ところで、今日はどいった用件でここに？ おほほほ」

「先生、キャラが崩壊してます」

見たことのない鈴童先生がそこにいた。

本性を目撃されてパニックになるのはわかるが、そこで普段の振る舞いを見せるのでなく新たなキャラクターで重ね塗りしてくるとは。さすがの俺ももう溜息だった。俺ですらこんな心境なんだから、実妹の鈴童はどんな心中なのか計り知れない。

指摘すると先生の肩が跳ね上がった。ついでにアホ毛が一本ひょろりと出現する。

あー、もう、と零してがりがり頭を掻いた。

「なんなのよ、朝から。そうですよ。どうせあたしはどうしようもない酒乱のシスコンですよーだ」

拗ねるなよ社会人。

「昨日だって飲み過ぎて朝寝坊するし」

だから拗ねるなって成人女性。

「お陰で静歌には怒られるし。朝からブルーなんだもん。ぐすん」
どうやら彼女の中にはまだアルコールが残っているらしかった。

しかし本気で鼻の頭に朱が仄めいているのは酒の影響か、寒さが原因か、本当に泣きそうになっているのか俺にはわからない。専門家に任せるとしよう。

俺はお手上げであることを訴えるように、両手を天秤上にする仕事で生徒会長に助けを求めた。

「はあ……わかったから。おはようお姉ちゃん。別に怒ってないよ。気にしてない」

「ほんとに？」

「本当だから。どうせまだ職員室にも行ってないんでしょ？ 早く荷物置いてきなよ」

「仕事の愚痴とか、お酒飲みながら聞いてくれる？」

「わたしは飲まないけどね」

「また一緒にお風呂入ってくれる？」

「えーと……それは気が向いたら。もういいでしょ、ほら」

「はい。えへへ」

どっちが姉なんだよ。

忘我する俺のブレザーをちよいちよい、と理紗が引つ張ってくる。指先で摘まんだ袖を離さないまま、本気で引き顔をしている理紗がぼそりと呟いた。

「なんなの、あれ」

「気にするな。世の中には色々な人がいるんだよ」

しかしあれはどうだろう。よく教員免許取れたな。

無邪気な笑顔を振り撒いて一人だけ晴れやかに、鈴童先生は去っていった。

対照的に残された三人は各々複雑な表情を浮かべているといった現状だ。鏡がないから確認できないが、俺もおそらく二人と同じ様に特殊な顔をしているんだろう。中でも鈴童は最悪だった。実の姉が晒した醜態に生きる気力を失くしたみたいな目をしている。

不意に理紗の手に力が籠もった。それがわかったのは、こいつがまだブレザーを摘まんでいたからだ。顔を向けるとそこには悪戯を思いついた悪戯鬼の表情をした小娘を発見する。悪巧みだ。今、理紗の頭の中にあるのはきつと悪巧みで間違いない。

鈴童には聞こえないくらいの小声で、理紗は俺を横目で見上げな

がら話しかけてくる。

「ねえ今の、利用できないかしら」

「生徒会を強請る気か」

「人聞きが悪いわね。守秘契約よ。あたしたちは今見たものに対する表現の自由を制限されるの。対価となる報酬は当然頂かないと」

「悪いな、それなら俺は降りる」

家庭の事情で脅してまで、おまえの突発的な思い付きに付き合う義理はない。

俺にだって良心というものはあるのだ。だからそんな汚い真似はしたくない……とか言うほど格好のいい信念があつたわけではないのだが。どうも気乗りがしないのだ。そういうのは。特に鈴童が相手だと。あの本気で落ち込んだ顔をしている様子を見ると余計に。

「なんでよ!」

「俺は正義の味方だからな」

「こんの……脚ね! ああ脚に騙されたのね!」

確かに、鈴童の脚は綺麗だった。雪のように白くて細い。締まった太腿は程よく肉付きしていて——じゃなくてだな、この寒いのにそんな短いスカートで——でもなかった。

「どっちか、つーと……脚より髪かな」

風に乗る長くて艶のある髪が、灰色の世界に靡いていた。遠い目でそれを見ながら冗談交じりに言う、けれど理紗は眉を吊り上げ目を怒らせ、どうやら本気にしている。怒号一声、鉄拳一発とそれから回し蹴りを一打。患部は脛と鳩尾だ。堪らず足元から崩れ落ちた。……冗談じゃねえ、マジ痛い。

「バカ! もう知るか、このヘンタイ!」

理紗は、鈴童先生に遅れること数分後に生徒会室を後にした。結果、残ったのは脛を押さえて転げ回る俺と鈴童静歌の二人だけとなる。

何とも言い難い沈黙が室内に漂い始めた。激痛を堪えながら俺は立ち上がり、何か言おうとして口を開きかける。しかし俺が言葉を

紡ぐ前に鈴童が先手を打った。それは見事なタイミングとっている。相手にも俺が口を噤んだのはわかったはずだが、鈴童は気に留めない。

「ごめんね、みつともないところ見られちゃった」

表情が窺えないのは鈴童が窓の外を見ていたから。

俺に背を向ける形で、冷え切っているだろう硝子窓に手を当てながらぼそりと呟いた。

「ああ……恥ずかしいなあ、もう」

「とりあえず何も見なかったことにしておくからさ、そんな落ち込むなよ」

完全無欠の生徒会長が持つ、それはきっと数少ない、あるいは唯一の欠点なのだろう。

そう言った途端に鈴童の纏う空気が一変する。黒髪を翻して振り返り、その目は無邪気に、例えるならばまるで彼女の姉が見せたように輝いていた。駆け寄ってきて、手を握られる。両手で包み込むように二つの掌が重なった。冷たい窓に触れていたとは思えない、そんな温もりが伝わる。

「ありがとう！ 約束だからね、絶対黙ってねっ！」

「あ、ああ、うん。約束するよ」

うおお……。

こいつ、こんな顔で笑うのか。これはちょっと反則だろ。

につこりと、それもたつぷり十秒以上に亘って触れ合った体温が離れる。

踊るように刻まれた足取りで遠ざかる鈴童から最後に一度、よく聞き取れない言葉が漏れた。

「——ほんと、単純」

彼女が何と言ったのかは、この時俺が知る由もなかったのである。だからこれもまた後に知ることとなる事実なのだ。

そう。この時はまだ、俺は、ともすれば世界中は。

鈴童静歌についての正しい認識を持ち合わせてなどいなかった。

5 / 式の完成に

/ 5

どうやら回復したらしい鈴童先生に呼び止められたのは丁度、俺が食堂へ向かっている途中のことである。四限が数学だったのでそのまま追いかけてきたのか。やや荒い息で駆け寄ってきた鈴童先生はすっかり、いつも通りの表情に戻っていた。

「片瀬くん、ちょっと!」

「はい?」

立ち止まって、振り返る。

瞬間。柔らかい衝撃に意識を蹂躪され、世界が反転した。弾力が……! 弾力が半端じゃねえ……!

背中を襲った衝撃も遠い。それぐらいの威力を備えた体当たりだった。

「あ、ご、ごめん大丈夫?」

「いえいえ。まったく全然これっぽちも問題皆無です」

ノープロブレムだ。むしろ感謝の言葉を送りたい。

などと戯言を思考に並べつつ腰を上げる。このままの視点だと、色々と問題があるのだ。だって先生は女教師の代名詞みたたくタイトスカートを履いていたりするのだから。その癖ストッキングは履いてないし。外気に生脚を晒しているのである。

壁に手を突いて立ち上がり、無事をアピールした。

「それで、どうしたんですか先生?」

「あ、うん。……えっと、今朝はごめんなさい。まず、それを謝りたくて」

むしろ、俺よりも妹に謝るべきではないかと言っ指摘を腹の中に

収めた。

先生は自分の掌を重ねてもじもじとしている。上気した頬に上目遣いの悩殺ポーズ。これは不味い。一定時間以上見ていると石化する。俺は早々に視線を逸らして回避した。

「そつちに関しても気にしないで下さい。もう忘れましたから」

「そう？　ありがとう片瀬くんっ」

手を取られる。……この人もしかして、わざとやってるんじゃないのか。

これでは朝と変わらないじゃないかと思ひ始めたところで、しかしそこからは普段の鈴童先生だった。直ぐにこちらの手を開放すると、あはは、と悪戯っぽく笑ってみせる。緩んだ表情はけれどそこまで。次には咳払い一つで教師然とした雰囲気を取り戻す。

「ところで今度は質問なんだけど、今朝は生徒会室にどういう用があつたの？」

「ああ、それはですね——」

昨日から今朝に至るまでの経緯を細かい事情抜きダイジェストで掻い摘んだ。

傍迷惑な式女が突然に思い立ったことや、それを今朝方破綻させる事実が発覚した——そもそも生徒手帳を見れば当然のように記されていたのだが——ことなど。ついでに先生が心配していたので、理紗とは一限の後にコーヒー牛乳で和解したことも伝えた。

最後まで聞き終えると、先生はふーんと唸るみたいに声を出して腕を組んだ。

目を閉じて何度か頷いた後に、

「なるほど。それで静歌のところに行った訳ね」

「たまたま門のところで偶然鉢合わせて、生徒会室に招かれたただけなんですけどね」

部の設立云々は、そこで出た話だ。

「で、断られちゃったわけだ」

何だかニュアンスが妙だがここは肯定しておく。

「まあ、人数も足りてないし、決まりですから仕方ないですよ」

「うーん……そういう問題じゃないと思うけど」

苦笑いに小首を傾げる。

あれ、なんかやつぱり微妙にずれてないか。

「先生、何の話してるんですか？」

「はい？ 片瀬くん、静歌をバンドに勧誘しようとして、断られたんじゃないの？」

何だそれ。

そんな話がどこから沸いて出てくるんだ。俺の説明だとそのような誤解の余地は発生しないと思うのだが。思うだけで相当下手な説明をしていたという説も否定できない。お互いの間に曖昧な空気が流れる。まずは、ずれた会話の歯車を修正することからだな。

「いや、それは違いますよ。そもそも鈴童と話したのは今朝がはじめのことですし」

というよりも、だから……

「別に、鈴童を勧誘する理由がないんですけど……その、どうしてそんな勘違いを？」

「あ、そうだったの……へえ」

誤解こそ解けたようではあるが。

鈴童先生はそれでも、まだ腑に落ちないことがあるといった風な表情をしていた。

「そっか。でも確かに、だったら片瀬くんが知ってる訳ないわよね」

「何がですか？」

なぜか先生は表情を曇らせ、俺と目を合わせないまま言った。

「静歌ってね、あの子ギター出来るのよ」

鈴童静歌が何故ギターというポピュラーでありながらも現代では保持者の多くないスキルを身につけているのかというと、彼女の姉は次のように解説した。単純に、彼女達の知り合いがやっているラィブハウスに小さい頃から遊びに行っていたからである。

なので鈴童は幼い頃からギターに触れていたという経歴を持っている。先生の話では十年くらい前から弦に触っていたらしい。現生徒会長が何から何まで平均以上にこなすユーティリティプレイヤーだということは、この学校の生徒で知らない者はいない。そこへ来て十年分の経験があるならば実力は折り紙付きである。即戦力間違いなしだ。

けれど、と鈴童先生は最後に付け加える。――静歌を勧誘するのは無理だと思うよ、と。そりゃまた何でかと訊いてみるとしかし彼女はこれまでの饒舌ぶりから一変して閉口した。それは本人から直接聞いてくれ、という意味表示だろう。心底申し訳なさそうに手を合わせて舌を出す仕草を見せられてはこちらに罪の意識さえ沸いてくる。

そういう訳で昼休みである。

普段なら弁当を教室でつついている場合に俺は食堂で食券争奪戦を繰り広げた結果、カツカレーを獲得して席についたのだ。メルしておいた理紗はしっかりと席を確保してくれていた。頼りになるやらならないやらでよくわからない奴である。

話の顛末を理紗に話すと、自分はちゃっかり持ってきていた弁当を紐解きながら、

「わかったわ」

なにがわかったのか。後、俺の飯に目を着けるのは止める。

鷹の目がカレーに向けられている現状に危機感を覚える俺がいた。

「鍵は鈴童静歌ね」

「鍵ってなんだよ」

「この式を解く鍵よ。公式ともいうわね」

左様ですか。俺にはわからない世界なのでこれ以上は踏み込まな

い。

語り始めたときの理紗はとことん語らせておくのが得策だということ、十年も前から心得ている。

「彼女を引き込めば部の成立は簡単よ。生徒会長なんだもん。規則はもはや敵じゃないわ」

「そんな上手く行くかよ」

生徒会長だからこそ、校則には逆らえないんじゃないだろうか。

「で、一つ気になることがあるんだけど」

「どうして勧誘できないのか、ってことだろ」

「ご名答」

正答賞としてカツが一つ盗まれる。逆だろ。

「それについては何も聞き出せなかったわけ？」

人をスパイみたいに言いやがるが、こちらら偶然話を聞いたただけだ。聞き出すも何もない。

「使えないわね……。いいや。そこはぶつつけで行きましょう」

ひよひよい、とカツが盗難に遭う。なんと気付けば普通のカレーに様変わりしていた。なんとという早業だろう。俺はまだ一口も手をつけていやしないというのに。

具体的な案は何一つ口にしていないし、どうせ思いついてもいないだろう。ただ思い立ったら後は直進するだけ、それこそが理紗の行動理念。式の解法は何通りもあるが、どれもこれも直線だと理紗はいう。求めるべき答えは一つなのだ。ならば回り道など必要にならない。

椅子を倒して立ち上がる。知らない間に自分の弁当まで平らげていたらしい。

状況は簡単だ。

会長獲得、バンド設立、イコール——彼氏ゲット。

本来の目的を忘れていない自分が、なんだか嫌な気もするのだが

……。

理紗自身は覚えているのだろうか。どうだろう。どちらにしろ、ここまでくれば覚えていなくても同じだ。今の目的はその前段階で、最終目標はまだ少し遠い。肉食獣が獲物一頭を捕捉して決して逃がさないように、今この段階の問題に対して限りなく真っ直ぐなのが俺の幼馴染みなのだ。

数学と同じ。

最終的な答えに至るために、まずは一つずつ目の前の式を解いていく。

目指す場所が決まったただけでも進展はあっただろう。

さて、くだらなく続いた起承転結で言うところの起はここまでだ。そろそろ物語を次に進めなくてはならない。

カレーを口に運ぶ俺のスプーンを引ったくり——ついでに一口カレーにパクついて——その先を俺の鼻先に突きつけた。理紗の瞳は爛々と煌いている。ああ、もう、勝手にしてくれよ。こうなった理紗はどこぞのラスボスの最終形態より手が付けられない。

そして食堂全体に響き渡らんばかりの叫び声が木霊した。

「じゃ、実行は放課後にね！ この式、さっさと解いちゃいましょう！」

へいへい。

好きにしてくれ、哲学少女。

6 / 赤色の拒絶（前書き）

/

いつかほら 覚えてる？

放課後のトラック

泥だらけになって繋いだバトン
風になるうってバカ言ってた
汗の光った笑顔にまたねって

雨の日も

会えない日も

君がいない日も

ずっとここにいるから

my story

泣きたくないよ だから笑うよ

ほらまた擦り剥いた膝を見て笑顔を零して
そんな日々も 終わりなんだねって

やっぱり君は笑うから――

6 / 赤色の拒絶

/ 1

宣言通りに放課後、意気揚々と乗り込む理紗に付き添って、俺も再び生徒会室へ戻ってきた。

鈴童静歌は指定位置に鎮座するダンジョンのボスのごとく、生徒会長指定のパイプ椅子（つまり今朝と同じ席だ）に腰掛けて数枚の書類にペンを走らせていた。朝と違うことはフレームの太い赤淵の眼鏡をかけていることだ。

闖入者二人に気付くと、鈴童は静かに顔を上げてこちらを見据える。

挨拶もないのに慇懃な口調……否、業務的な口調が俺達を出迎えた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止だけど。一般生徒が何か用でもあるのかしら」

眼鏡の奥に光る眼光が明確な敵意を滲ませる。そこに朝の人当たりがいい会長の翳はない。

まるでこちらの用件を初めから知っていて、それを言わせないようにとしているみたいだ。無言の威圧と拒絶が無音の生徒会室に充滿する。押し潰されそうな重圧は全校生徒千人余りのトップが纏う覇気とでもいえようか。

無意識下で怯んでいたのかもしれない。唾を呑み込むと喉が思いの外渴いていたことに気が付く。

俺は言葉を選ぶことを言い訳にして沈黙に身を任せた。と、固体化した空気を融解させる発言を紡いだのはやはり、俺の隣の理紗である。会長様の圧などもろともせず、けろりとした口調が不相応に明るいトーンで振幅を成す。

「聞いたわよ、あんたギター出来るんだって？　ちょうどいいから、一緒にバンドやりましょうよっ」

一歩前に出る。

理紗の踏み出した足元に。

ざくり、と刀剣染みた視線が氷点下で突き刺さった。

「ギターじゃなくて、ベースだけだね。何回言ったら覚えるんだか、お姉ちゃん」

声が暗い。

こんな声、集会の壇上では一度だって聞いたことがない。

「そうなんだ。だったら好都合だわ。あたしはギターしか出来ないから」

なんでこいつ、こんな普通に喋り続けられるんだ。

俺なんて部屋の中にいるだけで筋肉繊維が全部凍りついた錯覚に襲われているのに。

「知らない。関係ない。やらない」

三つの否定であっさりと拒否を表明した。

理紗の言葉と脚が止まる。ここまできてようやく、状況が気軽に「バンドやろうぜ！」なんて言える空気でないことを悟ったらしい。だがもう引き返せない。

「先に言っとく。他を当たって。わたしは貴方達とバンドなんて組む気はない」

「なにそれ」

浮ついていた口調は直ぐに変化を見せた。

両者の対峙関係は一瞬で明確になる。どちらも隠す気なんてなかった。それが見ていて理解できる。染み出る拒絶の意思と、それに対して真っ向からぶつかり挑む意思が火花を落とす。二つが溶け合い、室内は酸素濃度が五パーセントくらい減少しているみたいだ。
「……無理に引き入れる気はないけど、その態度はないんじゃないの」

肩が微弱に震えている。

髪が揺れていることからそれを察した。理紗は感情を堪える際に握り拳を作って掌に爪を食い込ませる癖がある。痛みで感情を抑圧しているのだろうそれは、つまり継続時間がそのまま感情の丈を表す。今回はどれほど続くのだろう。

これはもう、あっさり断られたとかじゃない。

気に喰わないんだ。理紗にとつて、鈴童の在り方が。

「だったらお引取り願いたいわね。これ以上言葉を交わす意味はないでしょう」

「言われなくてもそうしてやるわよ。あんたなんて、絶対認めないから」

「なら解職請求でもしてみなさい」

「この……、望むところよ偽善者。あんたの化けの皮ひっぺがえしてやるんだから！」

そう言つて憤然と理紗は部屋を飛び出していった。

扉は蹴破られて壮大な音を立て、番は軋みを上げて反動で跳ね返り轟音と共に再び空間を閉鎖する。静寂と後に残された二人は奇しくも今朝方と同じもので、ただ決定的にその場の空気だけが違っていた。後を追いかけることも出来ない。睨む対象はいつの間にか、俺へと変わつていったのだから。

「なにか言いたそうだけど？」

まだ火の点いた感情が熱を冷ましていないのか、向けられる視線に込められた敵意は変わらずに刺々しい。むしろ鋭さを増しててくらしいじゃないか。一言も発言していない俺で持て余した情熱を発散するのはやめて欲しい。だがそう思つても口をつくのは別の言葉だったのだが。

「なんで、そんな一方的な態度で拒否したんだ。おまえならもっと、綺麗に治められただろ」

生徒会長としての鈴童静歌を俺は知っている。

彼女なら口八丁でもなんでも事態を丸くすることなんて出来た筈だ。なのにわざわざ角の立つ言い方で状況を悪化させた。断るだけ

ならもつと方法はあつただろうに。まるで二度と同じことを口にさせないようと念を押すかのような態度には引っ掛かるものしかない。

いや、そもそもだ。

こいつなんで、俺達が先の用件でここに来ることを知っていたんだ。

鈴童の態度は初めから揺るぎないものとして固定されていた。俺達が扉を開いた瞬間から。ここに来ることを知っていた。用件まで察知して態度を決めて。

「どうせお姉ちゃんから聞いたんでしょ。……ほんと、つまんないことばかりするんだから」

悪態をつく。

第二の疑問点は姉からの経由ということか。

「バカは突き放さないとしつこいから、ああしただけよ」

「今朝とは随分態度が違うみたいだが」

「これは生徒会長としてじゃなく、わたし個人としてのことだからよ」

「なんでそこまで露骨に拒否するんだよ。もう他のバンド組んでんのか？」

俺のその問いに。

鈴童の蓋をしていた感情が溢れ出した。歯が擦れ合う音が聞こえた気がする。瞳に渦巻く感情が一層色濃いものになっていくのが見て取れた。

「うるさい。いいからもう消えてよ」

背後の窓を振り返って、それからもう何も交わす言葉はなかった。「そもそも貴方たちとわたしじゃ、まず実力が釣り合わないのよ」

7 / 例えば帰り道で

/ 2

帰り道、理紗はぶんすか蒸気しながらがすがす大地を踏み鳴らして歩いていった。一步踏み出す毎に怨嗟の恨み言を吐き出す。歩きながら呪術でも行っているみたいな様子だ。

気持ちはわからないでもない。しかし世間の目は事情を知らないし、こんな様子を目撃して冷やかな蔑みか憐れみか意味不明な眼差しを送ってくるのだ。だからもう少し大人しくして欲しいものである。俺は大腿で歩く理紗の三歩くらい後ろを歩いていた。

理紗が退室した後の鈴童は、もうただの黒倒マシーンと化した。俺はスイッチを入れた覚えもコインを入れた記憶もない。だがその機能の餌食となったのは俺である。結構長いこと暴言の嵐を一身に受けていた気がする。

本当に、なにがそこまで気に食わなかったというのか。バンドを結成しようとする際のメンバー収集については、経験者がいれば飛び付くのが当然だろう。気を悪くするにしてもあそこまで露骨に、あの鈴童が態度で拒絶を表すなんて。

——貴方達とは。

脳裏を掠める低く抑えた声。何かが引っ掛かっているようにさつきからそればかりを頭の中でリピートしていた。

——貴方達とは実力が違う。

——釣り合わないのよ。

なんだろう。そこだけが妙に気になって仕方ない。的外れな憤慨や、一方的な悪態とも違う。それだけはどこか自分に向けられた苦言とか、嘆息のようなそんな風に聞こえた。だから本来一番憤るべ

きところには疑問しか生まれない。……いや、バカにされて腹の立つプライドも経験もバンドに関しては持ち合わせていないってのも理由か。素人なんだから下手で当然だ。

「あー、もう腹立つわね。こっちのプランが台無しじゃない」

プランなどと言えたものか。生徒会長捕まえてメンバー集めと規則無視の一挙両得を狙っただけの悪知恵じゃねえか。しかも確信も保障もありやしない。まさか前者まであんな断固とした拒否を受けるとは思っていなかったというのは確かにあるけれど。

「作戦変更ね。他の奴を探すわ」

「変更じゃなくて原点回帰……っつか問題が初期に戻っただけだろ」
人選を緩めまくるなら、声を掛けて人が集まらないことはないだろう。しかし動機が動機である。たった一人の男作りの為に部活まで作って、目的を達したら放り出すんだろ。最低定員の五人や顧問や部室はその後どうなる。うわあ、そう考えたら悲惨だな。止めた方がいい気さえしてきた。

目的を達成したら。

……どうなるんだろう。それはつまり、理紗に男が出来るってことだ。そうなればどうなる。こんな風にいっしょに下校することもきつとなくなるだろう。話す時間だって減る。だからどうした。関係ない。関係ないだろ。

なんてな。

実際そんなことはどうでもいい。こいつに振り回されなくなっただけ助かるじゃないか。

「この式は破綻ね」

「次の策はあんのかよ」

「ない」

「……左様ですか」

「心配要らないって。直ぐ次の式を立てるから」

自分で立てた式を自分で解くってんだから、こいつも面倒な生き方してるよな。

理紗はいそいそとメモ帳に何かを書き落とし、そのページを千切って折り曲げ始めた。

「当面はそうね……果報は寝て待て。あたし達だけでも練習しときましよ」

しかも式を組むとか以前の問題じゃねえかよ！ こいつ、考えることを放棄してやがる。

「物事は為るべくして為るの。偶然と必然が折り重なって螺旋に交わり、その果てに運命は描かれるわ。だから必要なことならなんにもなくても自然と成立しちゃうのよ。今はその時を待つことこそが得策——これが解答ね。あたしの立てた式は絶対なの。間違いない寸分も存在してないから安心しなさい」

ていうか。

さっきおまえの式とやらは破綻したばかりだろ。そしていつの間にかの式を立てていたんだ。体のいい現実逃避だろ。つつか考えるのが面倒になったのか。だったら止めるよもう。

「うつさい。ごちゃごちゃ言っただけな練習よ、練習ッ」

練習……と言ってもな。

「どこでするんだ、それ」

理紗の手の中で完成した紙飛行機が、赤い空に向かって飛び去った。

*

最近校内に妙な噂が流れ始めた。

それはどこにでもあるようなチープな怪談なのだが、俺の背筋にはその噂を耳にする度マイナス百度の寒気が走り抜ける。恐怖とはまた別の、だがある意味で恐れといえる衝動だ。

噂の内容は至極シンプルなものといえた。

夜中の旧校舎、かつての音楽室から聴こえてくる楽器の音――。
この噂のポイントは王道であるところのピアノ演奏、ではなくあえて楽器の音などと曖昧な表現で通っているところにある。確かにそうだ。ピアノじゃない。楽器の種類としては弦楽器と打楽器だ。ギターとドラムの音なのである。

そうだよ。

俺だよ俺達ですよ。

近頃意味もなく一人で泣きたくなくなることがあるのはそのせいだ。
全校生徒から指名手配を受けているような心境で古典の板書を行っていた授業中に、それはやってきた。

後の席の奴から回されてきたルースリーフはどうやら俺宛であるらしく、振り返って見ると隣の列で二つ後ろの理紗が自信に満ちた表情でアイコンタクトを送ってくる。中身を見ていないので意味不明だ。俺は四文の一に畳まれたそれを開いてみた――

「譜面よ譜面。スコア」

休み時間、内容についてのコメントがそれである。譜面？ 曲でも書いたのか。

「そりゃそうでしょ。曲もなしになにをするってのよ」

一理あるように見えるが、曲よりもまずメンバーが足りていない。危惧するならそっちだ。

「コピーバンドじゃなかったのかよ」

「論外」

二文字で一蹴された。

「あたしの曲と歌だから意味があるんでしょうが。目的を忘れたわけ？ これはね、たった一人のための曲なのよ。具体的には誰か知らないけど、この式を解答できる奴があたしの彼氏になるってわけ。コピーじゃそんなことできないでしょ」

オリジナルでも無理だよ。

「とにかく今日からそれ練習するから、頭ん中入れときなさいよ」

木製の机上にめり込むくらいの勢いで張り手されたルーズリーフを眺めながら俺は頬杖をついてはついでに溜息まで吐いてみたりする。頭に入れとけて言われてもな……。俺にはこんなスコア読めやしないのだ。よし。昼休みは図書室に行って参考書を借りてくるとしよう。バンド入門、くらいでいいか？

見下ろしてみると、五線譜の上に踊る音符や記号の羅列の他に文字は見当たらず、どうやら歌詞はまだないらしい。

理紗がいうところの式が完成するのには、まだ少し時間が掛かりそうだ。

8 / 夜の帳に

/ 3

夜になった。

……放課後じゃなくて夜だ。放課後だけどさ。

近年の日本は労働基準法とかなんとかで勤務時間にはやたらと厳しい。最終下校時刻を過ぎて一時間もすれば学内は空っぽになる。そして我らが占拠するのは旧校舎の音楽室である。無人警備システムなんて近代技術の産物は設備されていない。その死角を突いて放課後人氣が失せるまで休館に潜んで、その後に練習を開始する——というのが今回理紗の立てた新たな式だった。リスクでか過ぎるだろ。

現在ここには理紗が自宅から持ち込んだギターとドラムセット一式が置かれていた。早朝にこっそりと器材を持ち込むのには苦労したものである。身体的にも精神的にも。

無論、時間を考えて最大の配慮は行っている。アンプに繋いだギターは最低音量だし、ドラム各種シンバル込みにはゴム製のヘッドで振動を抑える加工まで施してあるのだ。だから毎晩地味な練習風景にしかないのだが。おまけに照明も点けていない。理科室からくすねたアルコールランプだけが頼りの明かりだ。スコアを覚えておけというのはそういうことである。

理紗は慣れた手付きでオリジナルソングを独奏していた。それが譜面通りなのかは不明だが、昨日までには聴いたことのない曲だから件のそれなのだろう。鮮烈な高音の疾走が掻き鳴らされた後にその余韻を引いて、跳ね上がった曲調の興奮をそのままにしながら最大限に抑えた重厚感のあるメロディがラインを刻む。噴火寸前の火

山みたいにテンションを溜め込んで、そして鼓動のような音節がリズムを刻み組み込まれる。後は一気に膨れ上がった熱を爆散させてサビへと突入し――

「ねえちよつと、あんたやる気ないの？」

ピックを弾く指が急停止していた。暗がりにも光る金色の目――とは大袈裟だが琥珀の混じった瞳が苛立ちを交えてざらりと輝きを見せる。どうやらいつこうに練習を開始しない俺に発憤しているようだ。しかし勘弁してくれ、出来ないものは出来ないんだよ。

「あんたドラム歴十年でしょ。それぐらい出来なくてどうすんの」十年とか言っても九割がブランクだ。単に十年ほど前ちよつとかじっていた程度に過ぎない。そういえばあの時も理紗の気紛れだった覚えがある。確かあの時は兄貴が始めたバンドに興味を持っていたことだった。夜の学校にこれだけ好き勝手持ち出されているんだから、おそらくもうその趣味には飽きがきてしまったのだろう。妹同様に飽き性な人だからな。

「ほら早く。灯りも貸して上げてるんだから」

「無茶言うな」

まずこれが読めん。

理紗は盛大に溜息を吐き、見せしめるように首を振って見せた。無能な部下を嘆くみたいな素振りだが俺が悪いのか。

「ほんつとどうしようもないわね。頭まで悪かったら、あんた何が残るわけ？」

その台詞はここまで俺が頭脳面以外での無能さをアピールしていたならば使用可能だが、残念ながらそのような伏線は存在しない。つか頭の良い悪いじゃないだろう。ドラムスコアの読み方なんて素人が知ってるはずない。

「あーもうわかった」

ギターを置いて立ち上がる。そしてつかつか歩み寄ってきて、すとなん、と腰を降ろした。

俺の膝の上に。

「な……お、おまえなにしてんだよ!？」

膝とは描写しても当然ドラムをやる訳だから脚を閉じてなんていない。理紗はその状況下で俺に重なってきたのだ。いくらなんでも慌てる。

「うるさい。バカに優しく、体に教え込ませるのよ」

「か、体につて……!」

がつり、と突き上げた肘が顎に命中して危うく舌を噛み掛ける。

「変なこと考えるな。ほら、手貸しなさいよ。違う。ドラムの基本でしょ、ほら腕交互にして」

いやそうするとなんか体勢がほら抱きついてるみたいでさ。

「くだらない」

なにが。

「中学生じゃないんだから。今更あんに何されても気にしないわよ。ほら早くして」

さらつとんでもないこと言っただぞこいつ今。

などと考えている隙に手首を引っ捕らえられる。強引に交差せられた腕が作り出す三角形の空間に理紗の体は思いの外すっぽりと収まっていた。しかしその意外な小ささに驚く暇もない。外部からの力で強引に稼働させられた腕が、まずは肩慣らしとばかりにツービートを刻み始める。

ぼんやりしているとまたも肘打ち。今度は胸に入った。何かと抗議してみればサボるなどのことだ。言われてみて理解に至る。確かに俺は全身の力を完全に抜き切っていた。これでは練習になどなるはずがない。……いや、力を入れていたとしたら練習になるのだろうか。

ウォーミングアップはエイトビートに至る寸前の速度で加速を停止した。こんな体勢ではこれが限界である。続いて休む間もなく——理紗は深呼吸に近い吐息を挟んでいた——新たな鼓動が刻まれ始める。タタタン、と軽快なリズムから入った初節はしかし、闇の中にわたかまる静寂を打ち破るような、雷鳴染みたシンバルの音で豹

変した。

怒濤の勢いで流れ込む強烈なビートと時折挟まれるシンバルの音耳を澄ませば、それだけ音が溢れる中にも理紗の呼吸と心音は確かな振幅を生み出していた。それらは徐々に加速を始めながら疾走しそして。

「おっけー、とりあえずここまでね」

熱が一気に覚めていく。室内に満ちるまだ形のないメロディはその一言で霧散した。

「サビの手前までだけど、本当はもっとテンポ速いから。この状態だと今のが限界だったのよ。まあ、初めはこれくらいでも練習にはなるでしょ」

とか言つて、あっさりと腕の拘束から逃れる。飛び跳ねて着地するときに足元がふらついていた。

「おまえ、ドラムのパートまで覚えてんのかよ」

「あたしが書いたんだし、当然じゃない」

「つつか、ドラム出来たんだな」

「お兄ちゃん、最初の頃はギターだったけど次のバンドではドラムだったのよ。叩いてるの見てたし、基本とか教えて貰ったからね」

多趣味の兄がこのユーティリティプレイヤーを作り出していたのかと今更に実感する。ちなみに理紗は音楽以外にも妙なスキルを持ち合わせていやがるが、それらも兄の影響であると見て間違いない。でも、ベースだけは無理。なんか地味だし、やったことない」

お手上げのポーズを見せて、ルーズリーフをひらひらとさせる。そういえばあの譜面にはベース（と思われる）のパートは記されていないかった。扱えない、イコール楽譜も組み立てられないということか。ならば尚更のこと、

「惜しいな、鈴童は」

と呟いてみる。

「……」

直ぐに激昂が飛んでくるかと身構えたがそれはなく、やや間を置

いてから思い出したように張り上げた声が闇に響いた。

「知らないっ。やる気ない奴は要らないから。だいたいあの態度は何よ。やっぱり猫被ってたんじゃないあの生徒会長。優等生ぶるのは勝手だけど……なんていうか、ム力つく」

思い出して苛立ちを再来させているようだ。

どうやら俺は余計なことを言ってしまったらしい。

「あんなのはあたしの式には要らないわ。変数に当て嵌めたら式が破綻するってもんよ。いいわよ。代わりを見付ければいいんだから」

「そういうもんか……」

「そうよ。音楽性が合わないし、論理性も合わない」

論理性ってなんだ。

時々意味不明なんだよな、この式っ娘は。

「なに？ あんたそんなにあの女を引き入れたいわけ？ 悲しいわね男って。存在の基盤に刻まれてるのよそういう風に。発生の前段階で遺伝子とか形生体とか染色体とか以前のあれよ、始まりの位置からどうしようもない生き物なのが男よね。輪廻のわっかから根本的にずれてんのよ」

「もう意味わかんねえよ」

「あんたを構成する存在式は、イコール淫乱ってことよ」

簡潔に纏められたがそれは心外だ！

と、反駁の声を上げる寸前でその小さな音が転がった。見れば、扉が僅かに開いている。誰かが中を覗いていた形跡にも見える。戸締まりなら再三確認したはずだ。無人とはいえ、それが効果の薄い防音だとしても、用心に越したことはないからだ。だったら、そこに誰かがいたのは確実なことになる。しかも今の物音の後に何者かが立ち去った気配はない。

その誰かはまだ、扉の外にいる。

理紗は音に気付いていなかったらしい。怪訝な面持ちでこちらを見上げていた。

どうしたのかと問う声をジェスチャーで塞ぎそちらに近付く。向

こつもこちらの接近には気付いているだろうから足音に配慮はない。逃がすまいとむしろ早足なくらいだ。そして扉に手を掛けて後は一息に、それをスライドさせた。

「あ……」

咄嗟に漏れたのであろう呟きの声は誰のものかわからない。

四つん這いになっている長い髪に赤いコートが目に入る。

鈴童静歌がそこにいた。

「ねえ、どうしたのよ」

理紗が言っている。こちらに来てはいないらしい。

答えず、俺は鈴童を見下ろして硬直していた。

琥珀が不安気に滲んでいる知られてはいけない秘密を知られてしまったみたいなお表情だ。逆だろ、それは。わずかな間、沈黙を見送って俺は。

「なんもない。思い過ぎだった」

扉を閉めて理紗に言った。

「練習、再開しようぜ」

9 / 勝手にしなさいッ

/ 4

翌日になって俺はおよそ一週間ぶりに生徒会室を訪れていた。ノックをして了承を貰い入室する。鈴童は作業中の書類から顔を上げると眼鏡を外し、こちらを確認するなり思い切り顔を顰めた。疫病神でも見ているような顔だ。

とはいえ確かに、俺が厄介事を持つてくる存在であることに間違いはない。

歓迎されていないのは明らかで、何も言わずに帰ってくれな雰囲気。鈴童は全身から醸し出している。俺はまず何を言って良いのかわからず、今日は良い天気ですね、みたいな常套句の代わりに鈴童の手元に対して話題を振ってみることにした。

「それ、創設祭の資料か」

「ええ、まあね。毎年、創設祭は生徒会の主催だし」

「そういうのってさ、文化委員の仕事じゃないのか」

「そんなのいない。……それで、用件は何かしら？」

表情が曇るのがわかった。

これから話すことに対してなのかそれとももっと別のことがあるのか——鈴童が表情を変化させた理由が俺にはまだわからなかった。ともかく、だ。と思考を切り替えようとしてみる。スイッチで変更可能なみたいに、それは意外とあっさり出来てしまうのだった。

「昨日の話だ、鈴童」

「……」

目付きが尚更凶器の鋭さを帯びる。

「なによ……生徒会を強請ろうつての？」

「いやだから逆だろ」

だから、という言葉の意味はきつと俺にしかわからない。けれど鈴童は指摘されてようやく目を見開き、役職と矛盾した自らの態度を自覚したように見えた。

そつだ。丸切り逆だった。昨日も今も。行動と言動とが矛盾している。

例えば鈴童が生徒会長だから昨日の晩、生徒間に流れている噂の真相を確かめようとしていた、というだけならば納得できる。しかしどうだろう。実際にそんな思惑があったならば俺に見付かった時の様子が可笑しい。だってそつだ。状況からどちらが不利かなんて明白で、会長なら権限でも一般生徒を上回っている——加えて昨晩は校則……どころか下手したら法律違反の現行犯だ——鈴童があんな顔をする意味がない。

あんな、何かを失ってしまうみたいな、悲しみの翳った表情をする意味がないのだ。

咄嗟のことで昨日は気付かなかったことがある。それは一日を掛けて思考した結果に導き出されたある仮説だった。それを、理紗を真似て言うならその式を成り立たせるためにどうしても、鈴童には一つ認めて貰わなければならないことがあった。俺がここにきた理由の一つがそれだ。

つまり何が確かめたかったのかと言えば。

「鈴童おまえさ、実は昨日だけじゃなかったんじゃないのか？」

「——」

答えない代わりに否定もない。ならばそれは、この場における彼女の肯定と受け取ってもいいのだろうか。

根拠なんて何もない。証拠だってなかった。ただそう推測させる状況だけがあったのだ。そつ。そもその矛盾を辿ってみればぶつかる不可解な謎があった。

何故、噂は流れたのか。

怪談なんてどこにでもあるものだろう。所詮は退屈しのぎにでっ

ち上げられたり何かを誇張することで生まれる虚実だ。だが俺は知っている。今流れている噂が正確に事実を伝播しているものだということ。可笑しいだろ。警戒は十分にしていたんだ。教師ならともかく生徒にばれるなんてない。もしも発見したのが教師だったらその場で俺達は生徒指導に連行だ。

だから噂が立ったということは、これを知っている人物が生徒であると言うことを意味する。

そして誰がそれを知り得たか。誰よりも早くに登校していて、俺達があれこれ器材を持ち込んでいたことを目撃してしまった人物——同時にそれを不審に思う人物として最も適当な人物こそ——前日にバンドの結成を進言されて拒絶した、生徒会長、鈴童静歌に他ならないのだ。

「だから何よ。だったら、わたしが好意で見逃して上げた……って言ったら。それで終わりじゃない」

鉄の生徒会長がそんなキャラだよ。

噂は警告だったのではないか。遠回しに、そろそろ止めておけと伝えようとした、鈴童の忠告だったとしたら。

「おまえだつて本当はやりたんじゃないのか、バンド」

「……………ッ！」

鈴童の顔が耳まで赤くなる。なんだこいつ。めちゃくちゃわかり易い。

「な、んで……誰が、貴方達なんかと——！」

机が割れるかと思った。それくらいの勢いで机上を叩き立ち上がる。鈴童はなんかもう泣きそうな顔をしていて、生徒会長としての気丈さはどこかに置き忘れてしまった様子だ。見ていられん。図星を突かれたのがそんなに恥ずかしかったのか赤面全開も依然としてそのままである。

が。

ここは会長様が付け入る隙を見せてはくれたが一旦退いておく。無理に差し込む必要はない。というか俺には背徳感に耐えながら弱

っている相手を脅すような真似をするほどの気概だってないのだ。
だから鈴童がそういうなら、大人しく引き下がるう。

「わかったよ。じゃあそういうことでいい」

「……」

「ただし、おまえが直接止めると言わないなら練習は続ける。構わないか？」

「……」

鈴童は沈黙を挟んで、それからぶいと顔を背けると、っーんとして明後日の方向を見遣りぽつりと溢した。

「……好きにしろ」

それからどれくらい静寂が流れただろう。やがて時計の秒針が動く音が聞こえるくらいに室内が静まった頃、いつまでも退室しない俺に鈴童がようやく振り返った。

「なに？ もういいでしょ。用が済んだならさっさと出ていきなさい。ほら早く」

すっかり嫌われたな。

じゃなくてだ。

「用ならまだある。むしろこっちが本命だ」

「？」

そりゃそうなるわな、と妥当な反応は予測通りのものだった。相手が常識人だと展開が読みやすくて助かる。ついでにもう一つ予想していることは鈴童の頭の中で、どうせまたメンバーになれとか自分も練習に参加しろとか言われるのではないか、とか考えていることだろう。だとしたらこれはとんでもない不意打ちになる。万が一程度にも鈴童は俺が次のような言葉を吐き出すとは思っていないはずだ。……まあ、不意を衝いたからどうということもないのだが。

意味がないわけじゃない。

どうせならメンタルのぐらついた今がいいのだ。

冷静にかわされないように、今、鈴童の内心が僅かでもささくれだっている間に言っておきたい。

不機嫌がありありと窺える鈴童の瞳から視線を外さず、そして俺は言った。

「生徒会の空いてる役職、なんでもいい——俺が立候補するよ。確か常時募集中だったよな」

鈴童は、こいつは何を言ってるんだろう変なものを拾い食いしたんじゃないか、ってぐらい可笑しなものを見る目を向けてきた。当然ながらそうなるだろう。だが正気に戻った時、果たして鈴童はこちらの腹の内が理解できるだろうか。俺が立てたこの不出来な式を解いてしまうのだろうか。今はどうでもいい。とにかく第一段階だ。式も何も、まずは生徒会に入らなければ形にすらならないのだから「ちなみに理紗もだ。二つくらい席は余ってるだろ」

「……なんのつもりか知らないけど」

たちの悪い冗談で馬鹿にされていても思っているのか、鈴童の肩がわなわなと震え出した。そのまま大股で歩き、部屋の隅っこの引き出しを思い切り開いて中から書類を二枚取り出す。そいつを今度は俺の胸に叩き付けて、叫んだ。

「勝手にしなさいッ！ 貴方達だってどうせ——直ぐに、辞めるって言い出すんだから……！」

真っ赤な顔はさっきまでとは違った瞳の潤みを隠しきれていなかった。

10 / 奇策のはじまり

/ 5

事後報告として以上のことを理紗に話したところ、問答無用で空中回転蹴りを見舞われた。鮮やかに旋回する長い脚は死神の鎌のごとくこちらの首を刈りに来て、実際そのような結果を果たす。横風ぎの一撃に堪らず俺は悶絶した。

口より先に手が出る奴だとは知っていたが、まさか手よりも先に脚が出るとまでは予想の範疇を越えていた。

脳天を襲った衝撃に視界がまだ白んでいるがそれでも、抗議の眼差しで理紗を見上げる。ともすれば傷害致死だ。よく生きてるな、俺。などと思いつながらまずは話を聞けとばかり、むしろ追撃を加えようとしてくる幼馴染みに懇願を込めたアイコンタクトを持ち掛ける。天井に向けてすらりと伸びた美脚が停止する。トドメの踵落としは寸前で待ったに応じた。

「命乞い？ 遺言なら聞いたげる。簡潔に纏めなさい」

人の最期を、そんな傍線部の意味を答えなさいみたい促さないで欲しい。

もちろんこれが人生最期の台詞になるなんてのは毛頭御免だ。

「落ち着け、俺だって考えなしにこんなことしたわけじゃねえって」

「書面に纏めて弁護士に渡しなさい」

聞く耳持たんというのか。

「……だったら一応聞いて上げるわよ。で、なに？」
さて。

俺が立てた式の採点が始まった。出来るだけデメリットを隠しつつメリットを強調する説明を試みるが効果を成しているか否かは

不明だ。しかし理紗は途中で話を遮るようなことはせず、驚くことに最後まで静聴していた。話終えた俺は静かに審判を待つ。ジト目に変な化学反応で発生した気体のようにねっとり俺を見据えることたっぷりと一分。ふん、と鼻を鳴らして腕を組んだ理紗の鼻の先はどこか遠くに向いていた。横目が俺に向けられる。

「遺憾だけど、他に案がないから採用してあげるわ」
「どうやら功を奏したらしい。」

にい、とさらに不敵な、というよりもどっからどう見ても悪役の笑みを理紗は浮かべる。

「と、なると、やっぱりあの会長の勧誘は必須という訳ね」
「そうなるな」

「あんた、あの娘のこと好きな訳？」

「んなことない」

「どうだか。男なんてああいうのには簡単に騙されるのよ」

「ああいうのってどういうのだ？」

「可愛い娘」

「……端的だな」

しかしながら好きか嫌いかで言えば好きな部類に入るとも思う。どこの世界に美人の嫌いな男が 있을까。しかも鈴童は才色兼備の人格者……いや、そこはどうだろう。とはいえあの感じは嫌いではない。強がって背伸びするみたいに必死で感情を抑えた瞳や、ただ自分を信じて疑おうとしない真っ直ぐな姿なんかは――

と、そこまで考えて不意に思い至った。

思ってしまった。

そんな人物が他に、もっと別のところにいるのではないかということに。

「浮かれるのも勝手だけど、目的は忘れないでよね。いーい？ あたし達の目的は――」

「おまえの彼氏作りだろ」

「――バンド結成よ。まずはそこからでしょ」

「……」

そうだったな。

まずは目の前の問題を解決していく。順序立てて一つ一つ必要な過程を経て最終結論に至る。縦に問題を並べていく思考は見事なものだ。ここまで切り替えの利く奴はなかなかいない。しかし理紗の場合は眼前の問題に熱中し過ぎてそこで終わるというパターンもあるのだが。

了解しましたよ。もう何度も口にしてきた言葉はいつになくやる気がないみたいだった。

これからどうしたものか。確かに突破口ははつきりしたがそこを通り抜ける難易度が果てしなく高い。なにせ相手は天下無敵の生徒会長様だ。おまけにその性格は、俺が思っている通りならかなり厄介なものである。これだから鼻っ柱の強い女は面倒なんだ。面倒だけれど嫌いじゃないが。あの手の人間は一度張った意地は最後まで張り続ける。

やれやれ。

本当に、どうしたものかな。

*

「なにやってんだ？」

「創設祭の企画書纏めてるのよ」

「手伝うことあるか？」

「ない」

「……左様ですか」

そんなやり取りが昨日行われた。晴れて生徒会役員になった俺と

理紗であるが、その実生徒会業務の助力にはまったくなくていいなかつた。もつとも、それを実感しているのは俺だけなのだろう。理紗は生徒会室にさえ顔を出そうとしない。なんだよ。面倒事は全部俺に押し付けようってか。

三日ほどそうしていてわかったことがある。

鈴童は本当に誰の助けも必要としない。雑務から書類整理、部屋の掃除もコーヒー挽きも全部自分でやる。オールマイティーだ。だからここ数日の俺の業務といえば、自分で入れたコーヒー（あくまで俺の分は用意してくれない）を鈴堂の向かいの席で啜っているくらいのものであった。

この必要とされていない感。

自分の無力感。

何もかもが嫌になってくる虚無感と気不味い沈黙だけが蟠って、これでは精神的に参ってしまいそうだ。することがないなんてものじゃない。これはもう、そこにいる意味がないとさえ言えるだろう。鈴童の周囲には、彼女自身の他に誰の居場所もなかった。

そしてそんな日々を過ごしてきた今日のことになる。

創設祭実行委員（生徒会）からのお知らせ——主に体育館公演の有志発表募集とかそんなの——の張り紙を行っていたときのことだ。いつても、これについてだって鈴童は俺に何も言いやしなかった。放課後になっても中々生徒会室に顔を出さないから探しに行ってみれば、一人で山みたいなA4用紙を脇に置き、校舎内の掲示板に画鋏で掲示している会長殿に出くわしたというのが経緯だ。

都合よく飛んできた一枚を拾い上げて、俺は抗議の言葉を吐き出した。

「仕事があるなら言えよ、手伝うから」

「いらない。わたし一人で出来る」

「でも二人の方が効率はいいだろ」

「効率なんて関係ありません。わたしはいつも一人でして来た」

「そうかい」

目も合わせやしねえ。

こんな量を一人で貼って回っていれば一日やそこらでは終わるはずがない。ここが一階だから、きつとこのフロアの途中までしか貼り終えていないんだろう。これを後フロア四つ分。ついでに校舎二つ分行わなければならなんて気が引ける。俺なら嫌だ。

掲示板最上部に告知表を貼り終えたと、脚立を脇に抱えた鈴童が俺に振り向いていった。

「これ、出なくていいの？」

指で示しているのは有志募集の枠だ。

「メンバー不足だよ。おまえが入るまでは無理」

「だったら永遠に無理です。諦めなさい。後一週間、別のメンバーを探すことね」

嫌味を言う為だけに立ち止まったのかよ。

鈴童がそうするよりも早く床に置かれた用紙の塊を半分抱える。けっこうな重量だ。これをあの細腕で持ち歩いているのか。脚立と一緒に。馬鹿なことをしたもんだ。

鈴童は残りの紙積みを持ち上げて批難の目を俺に向けた。窃盗犯でも咎めるような視線は鋭いが、両手が塞がっているので何の脅威も感じない。人類の発明した手錠とは実に見事なものだ、とか思ってみたりする。

「返しなさいよ」

「俺は新館の方回るから、おまえはこのままこっちを頼む」

「頼んでません。だから、一人でやるってッ」

「頼まれてやしないさ。俺が勝手にやるだけだよ」

すたこらさつき。冷静になって脚立を置いてから追いかけてきたら、勝てるかどうかも怪しい。

そうなる前にとつと逃げ出そう。

しかし鈴童は両手に一杯の荷物を抱えたままがなるだけで何もしてこなかった。好都合だがここまで脆いとは思っていなかったのか。何となく興醒めする。こんな、沸点が低いところまで同じなのか。

誰と？ 誰でもいいだろ。

「そんなことしたって、絶対バンドなんて組みませんからッ。恩を売っても無駄よ！」

ヒステリックに近い金切り声に片手を挙げて答える。

もう一つだけ、そういえば伝えておかないといけないことがあった。

立ち止まって体を回す。

廊下の先には目を赤くした鈴童の姿がある。

出来るだけこれ以上彼女を刺激しない方がいいだろうが、これだけは言っておきたい。だから遠慮も自重もしなかった。我ながら、性格は最悪だったようにも思えたのだが。

「恩なんて売ってねえよ。好きでやってるんだ」

鈴童は、唇を噛み締めて睨んでくる。

「だって俺も、生徒会役員だからな」

11 / せんせいのちゅうく

/ 6

新館の職員室前にて、鈴童姉、もとい数学の鈴童先生と出くわした。

授業では顔を見ているがこうして休み時間や放課後にばったりというのはあれ以来久し振りだ。前は意図的な邂逅だったわけであるのだが、今回はどうなのだろう。これが運命というやつの所業ならば有り難いのだけど。

先生は俺を見つけると何やらむすつ、とした顔で、彼女の妹とはまた違った睨眼を向けてくる。立ち止まるにはそれだけで十分だった。相手が俺に用があるらしいことは一目瞭然というやつである。

「ちよつと、片瀬くん、最近生徒会で好き勝手やってるらしいじゃない」

「……はい？」

確かに思い当たる節はあるが、あれは全て生徒会としての職務を全うしているに過ぎない。そのバックにどんな思惑があるうともだからこそ鈴童は俺の行動を咎められないし妨害もできない。——その甲斐あつて、鈴童のメンタル面はかなり揺さぶれているのだから。と、まさかだからこそ形振り構わず姉に泣きついたとでもいうのか。

あの鈴童が？

有り得ない話だ。

先生は怒り眉毛を少しだけ垂れ下げて、息を吐くと諭すような口調で、それからどこか哀れむような目をして訥々と言った。

「あのね、生徒会に入っても、静歌をバンドに入れるのは無理だよ。

その内生徒会だつて止めなくなるわ。みんなそうだったもん」

今は関係ないが、この人ほど仁王立ちとか腕組とかが似合わない女教師はなかなかいないだろう。生徒に喝を入れる妙齡の美人には、まだ実年齢も風格も足りなさ過ぎる。

「聞いているの、ねえってば」

言葉遣いまで子供染みてきた。

はいはい聞いてますとも。尖閣諸島とか樺太列島辺りの話でしたか？

「もう。そういうところ、悪い癖だよ。冗談ぶって人の真面目な話を台無しに使用とするところ」

「その心は、先生」

「最低」

「うわ、ぐさっ」

「そんな男の子最っ低」

「なんで繰り返すんですか!？」

「わたしは国語の教諭じゃないの。謎掛けなんて趣味はありません」
国語の教師がみんな謎掛け好きとは限らんだろ。ていうか今のは一切掛かっていないし謎掛けでもない。

こほん、という咳払いの音が場の空気をリセットした。先生は急に真面目な表情になってこちらを見る。そうしていると、早くも先刻の言葉を撤回しなければならなくなるが、そこには迫力というかなんというか教師の持ち合わせる威圧感が感じられた。

「あの娘が素直じゃないのはわかるでしょ。意地を張ったら、絶対自分からは折れないわよ」

「その言い方だと、本当はバンドしたいみたいに聞こえますよ」
「……どうかな。でもそうかもしれない」

だったら初めからそういえばよかったのに、と俺はいつかの一場面を思い出す。こちらの用件に耳を傾けることもせず、ただの一言で拒絶し一蹴した後でさらに追い撃ちまで掛けてきたあの日。あの一回だけの出来事が今でも鈴童に意地を張らせているというのな

ら馬鹿馬鹿しい——と、待てよ。

ようやく自分の思考が可笑しなことに気付く。待て。初めっていつからだ。俺と理紗がバンド云々の話を持ち出した辺りからか。違うだろ。別に、それならその時点でなら拒否することなんてないじゃないか。あれが本音でないなら、あの完全無欠な優等生の仮面を捨ててまで刺々しく拒絶するメリットなんてない。だから、本音とか意地とか言うならそこだ。咄嗟に出してしまったんだ——今までもずっと張り続けてきた、意地が。

「中学の時にね、あの娘バンド組んでたのよ。でも二ヶ月くらいで解散しちゃった。なんでだか、わかるでしょ。生徒会役員として一週間以上過ごした貴方なら」

言っていることがわからないなんてことは残念がらなかった。

俺自身も体感したのだ。あの虚無感や虚脱感を。まるで世界中から自分が必要とされていないような孤独に似た感覚を俺は知っている。元より生徒会という組織の業務なんかには興味もないし、何の情熱も信念も持ち合わせていない身だ。俺がしつこく鈴童を追いかけていられるのはそれが理由だろう。喪失する決意もなければ、湾曲する信念もありはしない。

それがどうだろう。もし本当の意味で、俺のような理由以外で真面目に生徒会の一員として在りたいと思った誰かがいたら——もちろん他も同じだ。バンドにせよ一人が秀で過ぎていればバランスが保てない。回りが追い付けないなら待っているのは崩壊だけだ。その、終焉の予感が、あんなにも不安を煽ってなにもしない内から人を落胆させていた。

胸を過るのは静かで空っぽな生徒会室の景色とそこにいる一人だけの姿。彼女は優秀だった、だから、一人になった。彼女といっしょにいる誰かは孤独だったかもしれない、そして彼女自身は孤高だったのだ。だからどちらにも孤立してしまう。孤独と孤高は立つ位置が違うのだから。

「……でも、それくらいで」

「二回あるのよ。少なくともバンドに関してだけ言うなら」

「二回？」

「去年の話よ。ちょうど創設祭の時期だった」

「その時に、解散したんですか？」

先生は頷いてから首を横に振るといふ矛盾した行動で答えてみせる。それはなんだろう。的を射てはいるが中心を外している、核心を得ずに結論に達したという意味なのだろうか。

不完全だった俺の解答に先生が補足する。

「別のメンバーで出たの。ベースだけ代えて」

「……」

「創設祭の出し物程度の考えだったから、別にプロになりたいわけじゃない。有能過ぎるメンバーは必要じゃなかったのよ」

だから疎外した。

当然だ。

それが自分達の平凡を阻害するものなら。本能的に排他するのは当たり前のことだ。

誰が否定できるだろう。俺だって思ってしまったんだ、居心地が悪いと思ってしまった。鈴童がそうしたこともあるのだろうけど。

とはいえそれは自覚的にだ。人為から生じたものは人為で受け止められる。でもそれが無自覚だったならと考えればぞっとする話だ。

「だからあの娘の周りには誰もいないのよ。それでいて意地っ張りだから、開き直って自分から一人になろうとしてる。もちろん不自由はないでしょうけど。必要な『関係』は作れるし、持ってるものでもそれ以上はない。大衆に溶け込むことで自分を押し殺して孤立してる」

「……それで、先生はどう思っんですか。そんな——」
妹のことを。

「——鈴童のことを」

名前で呼んでおきたかったのは、そうすることで自分の中の鈴童静歌を繋ぎ止めておきたかったからかもしれない。

「さあ……こればかりは本人の問題だから、わたしには何とも」
「でも俺にそんな話をしたってことはそれだと駄目なんだって思ってるんじゃないですか」

それが悲しいことなんだって、本人に言えたら楽なんだろうけれど。

「それも、どうだろう。今までも沢山静歌に言い寄る人はいたけど、貴方はなんだか変わってる。下手に出るんじゃない。高圧するんじゃない。ただそこにいて……なんだか挑発してるみたいだなんて」

俺にも俺の考えがある、いや、式があるんだ。

「まあ、静歌があんなになる前から、男の子はみんな玉碎してたんだけど。貴方がどこまで頑張るのかは少し楽しみかな」

……そういうわけじゃないんですが。

「じゃあ先生から忠告。男は立ち振舞い次第よ。態度には気を付けてね。特に静歌は押したって駄目なんだから、たまには引くことも大切だよ」

といって、先生は悪戯っぽく舌を出して笑う。童女のような仕草と表情から僅かに匂っている大人の香りが何となく犯罪染みて感じた。それは、大人としての忠告だったのか、それとも鈴童静歌の姉としての忠告だったのかは定かではない。どちらでもいいことだ。俺は去っていく先生の背中を見ながら思う。

昔の人は言った。押しても駄目なら引いてみな。悪いがそんなもの、知ったことか。近頃の高校生を舐めんな。

押しても駄目なら——押し倒してしまえ。

今はまだ前段階とはいえ、いずれ機会を得て必ず。意地っ張りな強がり女の扱いは不本意ながら心得ている。だから、ここでは引けない。

そうして俺は自分がチラシ貼りの途中だったことを思い出した。同時に。

今の思考が誰かに読まれていたら、俺はとんでもない勘違いをされていただろう。と、改まった心で思い至り背筋に冷たいもの

を感じた。

12 / 式娘の考察（前書き）

/

紙飛行機の描く軌跡
もつとずつと遠くへ

歌声の旗を振り 向かい風に負けないように

帰るかな 覚えてるかな

何もかも始まる前の 二人 まだずつと近くにいた頃に

ever cry

miss you

窓の向こう消える雲

空の果てに吸い込まれた昨日に

想い出はまだ残っているのかな？

ほら、それじゃあ 探しに行こう

また二人で手を繋いで

無邪気だった頃の忘れ物を探しに行こう

12 / 式娘の考察

/ 1

「優秀であることはつまり異端なのよ。優秀も劣悪もすべからく世界では異端なのよ。だってそうでしょ。どれだけ優れた生命でも、居場所を間違えればそれは『異常』よ。人間社会の歴史ではどんなに優れた思想も教皇、皇帝の意に異なるものならば異端として討伐されてきたんだから。自然界でも同じよ。野良猫の群れの中に一匹だけサーベルタイガーが混ざっていたら、それはリーダーでも支配者でも何でもなくて、超越者というただの『異常』でしかない。世界っていうのは環や秩序を乱す存在を排除していく存在なの。順応するには、自分で居場所を創るしかない。同じ場所に同じ位置の生命を集めるしかないってこと。だからこそより優れた存在は孤立を強めるし、やがて孤高として孤独になる。鈴童静歌なんていい例よね。あれは孤立した上に自分から自分を囲ってる。とんだ箱庭状態よ。外の世界が見えてないんじゃない。見えているけど敬遠しているだけ。そうして自分を一人にすることで秩序を保っている。そこにあるのは空っぽな自己認識の囲いでしかないのにね。——さて、あたし達の当面の目的はその囲いを叩き潰して中から彼女を引っ張り出すことだけど……って、どうしたのよ？ そんな顔して」

これだけの台詞を原稿用紙に纏めたら、軽く一枚半くらいは使ってしまうだろうな、と思いつつ、つまりライトノベルならばページほどを跨ぐ鉤括弧が登場するわけだ、なんてことを考えていた。もう前後文を一行空白にされていること間違いなしである。

鈴童先生に話を聞いた後に遭遇した理紗にチラシ貼りを手伝ってもらい、近くの空き教室で先刻の会話の内容を話した。今のはその

直後に口を開いた理紗が一息に紡いだ感想みたいなものである。久し振りだから聞き流すのも忘れてしまった。

要約するとつまり、優秀な人間は孤立するってことだろ。それってさ。

俺がおまえに話したことじゃないか……。

しかし理紗は小首を傾げて怪訝な表情を向けてくる。そうか。俺の話が無駄に長く引き伸ばした発言の最後は疑問系で締められていたな。なら次は俺の発言ターンだ。

「なんでもない」

「それ、口癖なの？」

「さあな」

「それも。語彙が少ないみたいだから止めた方がいいわよ。後、口癖って言うなら一言でインパクトのある、なんか印象的な台詞の方がキャラとしては立つから。『やれやれ』とか『まったく』とか『うるさいな、もう！』なんて陳腐なのはよしなさいよ」

三つ目も駄目なのか。使わないけどさ。

というか今は口癖の話なんてしじゃないない。

「どうしてもって言うなら、語頭に『アルゲバハニ』と付けなさい」
嫌だ。おまえがやってろ」

「アルゲバハニじゃあ本題だけど、その話を聞いてあんたはどうするわけ？」

「ある……」マジですんのかよ。「——俺が悪かった。普通に話してくれ」

真顔で謝って要求した。

「とりあえず、今の態勢は崩さないつもりだけど」

「それって間に合うわけ？ 明確なビジョンのない式は破綻するわよ。方程式は成立させる事象がはつきりしていないと成り立たないんだから」

確かに、前準備は上々でもそれが何の為のものなのかはつきりしていないのは問題だ。

何か一つ。

鈴童を無理矢理賭けの土俵に引き釣り上げることを見つけないと。「敵を知れば百戦危うからず。だからまずは、正確なりサーチが必要ね」

「リサーチ、ねえ」

実際のところそれを含めて生徒会に入ったりしてるわけだ。策の立案は理紗なのだが。

「ちよつとちよつと、人の『式』を『策』だなんて言うのは止めてくれない」

なんだか急にお冠なのですが、俺は何か失言してしまったのだろうか。

そのように訊いてみると、理紗は手近に何か投擲できる物体を探して手を振り回し、結局手頃な物が見付からなかったのか蹴りを飛ばしてきた。甘んじて受ける俺ではない。後ろに飛び退いてそれを回避する。が、なんと奴はそれさえ計算通りと言う風に、俺の回避運動を嘲笑って飛来した上靴が顔面に直撃した。

女の子がはしたない！……とも今更思わないのだが。

「わかった？　こういうことなのよ」

「わからん。何がどういうことなんだよ」

鼻を摩って反論すると、理紗の表情はさらに陰しくなる。このまま左の靴も飛ばしかねない剣幕だったので俺は慌てて両手を突き出して待ったを掛けた。謝って、そして推測する——しかしながら、俺が謝る必要はどの辺りにあったのだろう——答えなんて出ないけれど。

とはいえ考えている俺の様子に取りあえずは反省の色を見出したのか、むう、と溜め込んだ頬の空気を排出して理紗が言った。

「だからね、『策』と『式』の違いよ。『策』ってのはつまり戦略のことでしょ。イレギュラーもあればアンラッキーもある。そんな不確かなものでしかないのよ。あくまで確立にすれば百パーセントじゃない。『式』っていうのは、結末に辿り着くまでの確かな道程

の一つよ。変数さえ導き出せば、後は決められたルートを確実に辿ることが出来るの。わかった？ わかったら次からいっしょにしないでよね」

たかがそれだけのことで、俺はこのような辱めを受けたのか。しかも結構痛かったんだぞ。

それにしても相変わらず大層な持論をお持ちなことだ。考え方の違いでしかないと思うけどな、俺は。口には出さずにそんなことを考える。こいつの哲学を否定してしまうことはそのまま面倒に繋がるのだ。だから大人しくしておく。今理紗と争っても意味なんてない。そう。

この式っ娘が言うように、当面の目的は俺達が争うことではない。あくまでも、どのような土俵にどうやって鈴童を引き釣り上げるかなのだ。さらに言えば、その土俵の上で俺が鈴童に勝利を収められるかどうかでもある。

後者はそれが可能なように前者を選ぶとして、問題はそちらだ。「じゃ、そっちはなんとかしてよね。あたしはその間に作曲に励ませて貰うから」

簡単に言ってくれる。

上靴を履いてさっさと帰って行く理紗について行きながら、小さな背中に嘆息した。

どうしてこいつはいつもこうなんだろうね。悪い結果が何一つ見えていない。いつでも最高ばっかり想定してやがる。そしてこいつの式の核心的な部分はいつも俺に託されるのだ。今回に限ったことではない。

それを拒絶しなくなったのはいつからだろうか。もう覚えていなかった。

何でもいいさ。考えたところでわからないから考えないで置こう。俺はいつだって理紗特製の式の上で変数として立ち回るのだ。これまでがそうであったように、今回だってそうしよう。

十年間築き上げてきたその関係が信頼とか呼べるのかどうかは、

明日の古典の時間にも思案してみよう。そうしてその関係が、この式の完成後にも存続しているのかどうかもいっしょに。

なんだろう。

これだとまるで、俺が今の関係に浸ってるみたいじゃないか。

或いは不安でもあるというのか。

自分の幼馴染みにとっての特別が誰かに奪われてしまうことが。

13 / 特別練習

/ 2

理紗の言っていたリサーチというものがどういう過程を経てどういう結果を得たのかを俺は知らない。しかしそれは唐突、そして突然にやってくるのだった。そう。普段どおり練習している最中に、ちょうど通して演奏できるようになった記念すべき一曲目を合わせた後のことである。

俺は演奏後の心地よい脱力に身を任せて余韻を感じていたのだが、そのときに理紗がぼつりと零した。

「今日はこの後で特別練習があるから」

ペットボトルの水を煽る。なんかこの感じは嫌いじゃない。

「特別、練習？　なんだよそれ」

当然の疑問が口から出た。特別ってなんだよ。

ちなみにいつからか俺達非合法二人組み（校則だから非合則とでも言うべきだろうか）は放課後に堂々と練習を行っている。創設祭のオーディションが近くなり、申請さえすれば今は旧館の空き教室が借りられるのだ。勿論、俺達が普通に申請しては通る可能性が低いので、そこはそれ、立場を濫用したとでも言っておこう。

生徒会に入るという式の第一段階がこうして一つ、意味のある結果をもたらしていた。

しかし特別練習とはなんだろう。一気にレベルアップできる秘策でもあると言うなら、正直もつと早くに出して欲しかったのだが。

「自分のこれまでの努力を無駄にするようなことは言わないの。折角あたしについてこれるようになったんだから、自分の頑張りを誇るべきでしょ。ていうか、そんな非論理的方法はないわよ。靈光

波動拳でも伝授しろっての？」

「れい、こう……？」

そういえばこいつ、こないだ俺の家から大量に漫画を掻っ攫って行ったな。

例の少年漫画が部屋の本棚からこっそりと消えていた——具体的には四巻から七巻辺りが抜け落ちていた——のを思い出した。しかし辛い。あれを読んだ理紗が武術会を開こうなどと言い出すのではなく、バンドを組もうと提案してくれたのは心からの救いである。

「『ふしぎなアメ』くらいにしておいてくれ」

「努力値が上がらないわよ、それだと」

またマニアックな。

冗談はこれぐらいにしておこうと思う。

あまり無駄な話に時間を割くのも勿体無いしな。

「特別練習ってなんだ？」

「うん。まあ、今後の為の『宣言文』みたいなもの。証明とかで最初に変数の範囲を限っておいたりするあれよ。あれがないと証明も式も成り立たないから疎かには出来ないわよね」

意味がわからんのだが、それはつまり。

「なんかの伏線みたいなものか？」

「そうとも言っわね。ま、用心に越したことはないって言っとく」
備えあれば憂いなし、とでも言いたいのか。

俺には理紗の考えなど微塵も理解できないのだけれど。

「ん。じゃ、もっかい初めから通そっか。準備して」

「はいはい」

お喋りの間に体力も回復した。

放課後は長い。これからが練習も本番だ。まだ半分も終わっていない。

と、思っていたのだが。理紗の言う特別練習というのはこいつの頭の中でそれほどまでに重要なのか、練習は普段よりも早めに引き上げられた。あの後に二三度音合わせをし、他の曲を軽く練習した

後で早々に片付けを促される。そうして下校時間よりも早く校舎を出た俺達は、その脚で次の目的地に向った。

得意気に鼻歌を歌いながら、それが今までに聴いたことのあるメロディではないので理紗が考察中の新曲かもしれないか思いつつ、その背を追いかける。果たして、辿り着いた場所は実に意外な場所です、そこは学校から歩いて十五分ほどの距離にあった。

かきーんかきーん、と鉄の音が甲高く響き渡る。

「バッティングセンター？」

コイン制度で楽しめる、しかしながら映像がついていたりと妙に本格的なバッティングセンターだった。

「そ、バッティングセンター」

胸を張りコインを購入する。意気揚々と打席に立った理紗は自分が制服姿だということを忘れているみたいにはかすか打ちまくった。恐ろしいほどである。ホームラン性の当たりを軽く飛ばしまくってやがる。信じられない。そしてこいつの隣では打ちたくない。

しかしそんな切ない願いも理紗の怒声に許されず、二人並んで仲良くバッティングを楽しみましたとさ。

今回のオチ。

百球近くもフルスイングして腕がだるんだるんになったり握力がすつかすかになった俺は、それでも何故か元氣過ぎる理紗にその後キャッチボールを半ば強制的に付き合わされてしまい、晴れて翌日には盛大な筋肉痛を患った。……全くもって、意味がわからなかった。

14 / 絶望のファーストセッション

/ 3

果たしてそれから五日が過ぎ、創設祭舞台有志のオーディションは明日に迫っていた。

五日の間に俺が鈴童の引き込みに成功したのかというと答えは勿論否である。結局は今日まであの調子で生徒会の雑用に従事していた（主な業務は全部鈴童がやってしまうので、俺には出る幕がない）。しかしそれも無駄ではない。下準備としては既に十分過ぎるほどだ。時いておいた種は芽を出し、鈴童の中で燻っていた蟠りを煽ることは出来ている。

その準備が爆発寸前までに膨れ上がっているのはわかっていたが、最後の仕上げだけが空白のまま取り残されている現状だった。

—— 均衡状態を破ったのは意外なことに鈴童の方である。

その日いつものように生徒会室に行った俺は無言の鈴童に首根っこを引っ掴まれ引き摺られるようにしてそこへ連行された。どこあるう、それは互いに因縁の場所とも言える件の旧館音楽室だ。鈴童は無造作に扉を開くと、中の楽器を見回す。練習はあれからも続いていた。理紗の作曲も無事に一曲目を終えて俺も何とかそれを演奏出来るレベルに達したと思っている。

鈴童がなんの目的でこんなことをしたのかは、彼女の姿を見れば少なからず理解に至ることが可能だった。なぜなら俺を拉致してきた生徒会長様の肩には黒いギターケース（中身は多分ベースだろう）が掛かっていたのだから。棚から牡丹餅とはこのことか。こちらから手を出しあぐねているところに自分からフラグを立ててくれると言っただけ。

……と、浮かれることは出来ない。

何故かって。相手が鈴童静歌だからだ。

少なくとも俺はもう二週間ほど鈴童の近くにいたことになる。性格の似た、他の誰かとは十年以上もの付き合いだつてあるのだ。だから知っている。わかつてしまう。

鈴童がこんな素直に、こちらの式を成立させてくれる訳がない。

ケースを近くの机に寝かせて催促してくる。突き出した手は無造作に、視線は窓の外の遙か彼方果ての空へ向けられていてこちらを振り向く気配もなかった。

「楽譜、見せて」

「……なんのだよ」

「惚けてるつもり？ 貴方達がここで練習してる曲のよ」

その発言だとまだどうやら盗聴は継続中らしい。もはやそれを隠そうともせず、俺から窺える横顔には一切の感情が浮かんでいなかった。昨日までとはまるで別人で、こんなことになる前の優等生でも揺さぶりに従順な意地っ張りでもない。今の鈴童はただひたすらに静謐だ。波紋がびたりと消えた水面みたいに無情な静かさだけを湛えている。だからこそわかった。鈴童は、これで決着をつける気なのだ。いつまでも現状を終わらせられない俺に痺れを切らして返り討ちにしてやろう、と。

生徒会室からここまで、俺は下校スタイルもそのままに連れてこられた為マフラーも鞆も持参している。その中から理紗に貰ったルーズリーフを取り出し鈴童に手渡す。さらりと紙面を流すように眺めた鈴童は表情を少しだけ曇らせて愚痴るみたいに呟いた。

「ベースだけ、書かれてない」

ベースの居場所がない譜面をぼんやり眺めてから、今度は間違はなく俺に宛てて言葉を紡ぐ。

「少しだけ時間ちょうだい。貴方はその間にアップでもしておいて」

「あのさ、それってつまり」

「はあ。わかつてるんでしょ。勝負よ。負けたらもうわたしは諦め

て。……というより、諦めなくなる負け方をさせてあげるから。貴方に、自分からわたしを遠ざけさせる」

「……鈴童、なんでそうなんだ。そんな、自分から周りを寄せ付けないようなこと——」

きつ、と横目に睨まれる。

「うるさい」

本気、だ。

ようやく状況が読み込めてきた。俺が思っているほど現状は甘くはない。鈴童は掛け根無しで本気らしい。どこまでも。俺は勘違いしていたのだ。こいつが俺や理紗を拒絶するのは意地でも強がりでもましてや照れ隠しなんて可愛い理由じゃなかった。もっと別の感情から本気で突き放してくる。鈴童は本気の本気で孤高であることを望んでいた。

……だったら、こつちだって受けてやる。挑発してきたのは今まで俺だったわけだし、この結果はいつか実現させないといけないものだったのだ。万事解決じゃないか。いくら鈴童が抜群のセンスを持っていたって、本気でベースに打ち込んでいる訳ではない。さらに曲はこつちが二週間も練習してきた曲なんだ。

ブランク、土俵ともに俺に有利なこの勝負なら勝ち目はある。

「もういいわよ。これ、ありがとう」

ブレザーを脱ぎ、軽くスティックを振った。頃合いでルーズリーフを返却される。ちよつと待てよ。おまえこれ、なんの為に見せろって言ったんだ。見たところ他の紙に写した様子もない。そもそもこれにはベースのコードは書かれていないのだ。こいつは、部屋の外から聴いていた俺と理紗のセッションと、それから一度楽譜をさらっただけで自分のパートを組み立てて暗記までしたってのか。

「意外そうね。もっと時間を掛けた方がよかった？」

「いや、そっちがいいんなら俺は別に」

「そつ、じゃあ始めましょ」

そりゃあ。

俺がタイミングを預けたのだが流石にそんなに直ぐ様始めること
はないんじゃないだろうか。鈴童はまだケースからベースを取り出
してもいない。ピックに触れてもないしチューニングも、コード
の確認もしていないはずなのに。そこまで自信があるのか。勝つ自
信が。

大したプライドを持っている訳じゃない。俺がドラムを、バンド
をやっているのは一時的なことだ。けれどこれまでの練習を全部無
意味だと嘲笑されているような態度には少なからず腹が立つ。こう
なれば実力行使しかない、勝って認めさせてやる。自分の張ってる
意地が、どんなに馬鹿らしいものかを――

鈴童がベースをアンプに繋ぐ。

「どうぞ。これ、入りはドラムのソロからでしょ。好きなタイミン
グで始めていいわよ」

言われなくても、スティックの握りを確かめる。平常心だ。こ
こで乱れてはいけない。一度意識を綺麗にしてからの深呼吸で、こ
れまでに浮かんできたあれこれを排除していく。

静かな室内で自分の鼓動を聴く。スタートの合図を心臓が刻む。
両サイドのシンバルを力の限り高鳴らせた。出発の合図だ。そこか
ら次に繋ぐのは細かな連打。二本の腕で一気に音の波を生み出す。
理紗が一曲目に製作したこの曲はその名を『Siren』とされ
ている。何曲ほど演奏するつもりなのか知らないが、ライブの定石
として一曲目に持つてこられるアップテンポの疾走を思わせる曲だ
った。それ故に初めて演奏するのは難しい。ましてや鈴童が譜面を
見たのは五分にも満たない間だけだ。おまけにベース用のコードは
そこに記されていない。こちらが勝つ為の材料は十分揃っていた。
畳み掛ける。序盤は何度も繰り返し、理紗についていけるくらい
に成長した。俺が鈴童を突き放すならここしかない。細かい連打の
嵐を容赦なく限界速度で叩き付ける、その向こうから――

――低く、唸るような重厚感を持つ音が追走してくる。

はっ、として顔を上げた。自分の手元を見るのに必死だった俺はそこでもうやく鈴童の姿を見た。俺が必死になって走らせる曲調を抑え込んで纏めるように、完璧なベースの演奏が紡がれていく。曲の輪郭を完全に描いている。ギターはいないのにベースだけでそれを果たしているみたいだ。完全な縁取り。あちこちを浮遊する俺の音を集束して行き先を示すような演奏が、記憶の中にあるギターの音さえ引き出していた。

それだけのことをやって、涼しい顔で鈴童はピックを踊らせている。手が止まりそうだった。こんな速度でドラムを叩いたことなんてない。手首に掛かる負担がいつもの数倍になっていることにやっとな気が付く。こんなペースは保っていられない。一度速度を落とさない。

「——っ！」

驚愕は刹那を待つて戦慄に変わった。落とせない。自分の意思なのに自分の体なのに言うことをきかない。疲労で少しずつペースは落ちてきているが、それでも無理な稼働を両手が続けている。頭の中が真っ白になって鈴童を見る。そこで目が合った。

鈴童はちらりと横目を合わせて。

不敵に、小さく口元を歪めた。

叫びたくなった。純粹に怖かったからだ。挑発のような笑みには敗北感と絶望しか起こらない。煽られることももうなくて、ついていけないと、こいつには敵わないという諦めだけが心を満たしていた。

完全に旋律を支配している。全ての音を纏め上げて曲としての確固とした形に仕上げる境界役のベースは、その域を完全に越えていた。こちらが誘導されてさえいる。動くのなら、物理的に可能なら背中を押され続ける。いずれ破綻するとわかっているのに。そうして思ってしまった——敵わない、こいつは、そもそも住む世界が違う。だから間違っているのは俺ではなく——ぷつり、と思考が断絶

された。

怖かったのは鈴童の演奏じゃない。それについて行こうとしている自分と、彼女が誘導しようとしている音の幻聴が自分を追い越していくことだ。確かに聴こえていた。ベースもギターもドラムも完璧な完成した曲が聴こえていたから。もう、自分はいらないんじゃないかと思ってしまった。

叩いたシンバルは一節を遅らせて、次に移ろうとする運動は呆気なく停止する。痺れが上がってくる。手からとくにスティックが落ちていた。無情にも、疾走し彼方に消えていく完璧なメロディラインを望遠して、俺は空っぽの胸中で自分の負けを実感した。

圧倒的で、完璧な演奏が終わる。余韻さえ引かずに消えた幻は恐ろしいほどの静寂に溢れた夕刻だけを残して去っていた。これが、鈴童静歌だった。ただ傍から演奏を聴いているだけならどうか知らない。けれど少なくとも同じ場所で同じ旋律をなぞるなら、こいつは一人で十分過ぎる。あの時生徒会室で感じた感覚に似ている。自分の無力感、疎外感、無意味にそこにある不必要な存在と、あらゆる負の概念が押し寄せてきた。

声さえ直ぐに出なかった俺は、手の痺れだけを噛み締めながら何かを言おうと必死に鈴童を見た。

「わかった？ 釣り合わないっていうのはそういうこと。わたしはね、貴方とはいっしょにいられない生き物なの。だから諦めて」

アンプの接続を切り離し、ベースを仕舞う。何事もなかったように平然として鈴童は部屋を出ていく。こんな結果はやる前からわかり切っていたと言う背中は何れどこか寂し気も含んでいた。

我に帰って気付く。

この瞬間俺の中での鈴童静歌は既に、同じ場所にいる同じものはなかった。

「オーデিশョンは明日だから、明日の放課後。飛び入りは認めないけど、足掻くとしたらそれまでよ。それじゃあ頑張ってね。わたし、貴方を応援してるから」

バンド自体は諦めないで、と、初めて話した日のあの笑顔でそう
言った鈴童はもうここにいなかった。

「——で、コテンパンにされたって割には元気に練習してるじゃない」

同日、事後報告を理紗にしてから「じゃあ早速練習してみましょ」とかいう何がじゃあなのか不明な発言により一曲を通して演奏してみた。結果は自分でも驚くくらいだ。理紗の言うとおり、あれだけ圧倒的に実力差を見せ付けられておきながら腕は軽快に動かせる。引き摺っているものがない。少なからず凹んでいると思っていたのだが、そうでもなかったのか。

しかし深く気にすることはないだろう。モチベーションが下がっていないことは悪いことではないし、変わらず練習が出来るならまだ今日のことも無駄ではないはずだ。

「だけど厄介なのはその約束よねえ。負けたら勧誘を諦めるってさ、なんでそんな大事な勝負にあたしを呼ばない訳？」

「面目ない。……つつか、おまえがいたらどうしてたんだ？」

「当然あたしが勝負してたわよ。そうすれば万事解決してたのに。万に一つでも勝ち目があるだなんて思ってたの？ 思い上がりも甚だしいわね」

「な……」

なにも、そこまで言うことないじゃねえかよ——！

有利な条件はいくらでも揃っていたのだ。俺が勝てるだけの根拠がそこかしこに転がっていた。だから、万が一にでも勝てないとしたところで、あんな、圧倒的な敗北にはならなかったと思っていたのに。どうして、最後には鈴童の背中も見えなくなるほど遠く霞ん

だのだろう。

まったく、と失望の眼差しで理紗が首を振る。

ポケットから取り出した携帯音楽プレーヤーのイヤホンを俺の耳に押し込むと、前置きなしに再生ボタンに親指を掛ける。俺は何か言うよりも先に、その旋律に身を包まれた。今おそらくこの心が一番遠ざけておきたい曲で、一番、耳にしたくない誰かの声が流れ始める。

「これ——って」

魂を抜かれたようにそんなことしか言えない。理紗は何故か誇らしげだ。

「そう。鈴童静歌が知り合いのライブハウスでやった、ライブの録音よ」

ギターもドラムも上手い。

いや、上手く聴こえる。実際実力は高いのだろう。しかし俺が聴いているのはそんな現実よりもきつと遙かに高位なものだ。この感覚を俺自身が知っているからはつきりと解る。ベースの描くメロディの輪郭と確かなレールが夜空に散らばる星の輝きを一点に集めて自在に星座を動かしているような——そんな、意味のわからない例えでしか語れなかった。それが全てだから。

たった一人で完全に創り上げている。

否、完成させているというべきなのだろう。

彼女は百パーセントのものを百五十パーセントに仕上げてくるデザイナーだ。それでいてさらに、ボーカルまでやってやがる。こんなもん、俺と張り合った時は本気じゃなかったとは思えない。

「これ、どうやって？」

「ライブハウスの場所を調べて、尋ねたの。そしたら簡単にくれたわよ。くれたって言うか、MDを借りてきてダビングしたただけなんだけど。よくそういう客が来るらしいのよ。ずいぶん慣れた感じだったわ」

「これ、最近のなのか？」

「んつと、確か今年の七月だったって言ってたかな。メンバーが風邪引いてこれないから、代理を頼んだらしいのよ。そのグループ結構人気だったから、たまたまこれは録音されてたんだって」

ベースの端々から、完璧な曲の編成が窺える。脱線しかけた音もこまめに拾って、棘を隠しているんだ。だから完璧に纏まって聴こえる。どこまでも滞りないメロディラインが描ける。およそベースとしては十全過ぎる役割を果たしていた。

というよりも、そんなことよりも。

俺が何よりも驚いたのは鈴童の歌声だった。

上手いのは言うまでもない。本当に上手だ。綺麗な歌声は五線譜上を僅かの狂いもなく駆け抜けて行き、抑揚、ビブラートも自由自在に操っている。そして彼女は自らの歌声を最大限にバックアップ出来る演奏をも誘導していた。

その姿が手に取るように想像できる。このレベルの演奏が、見えてもいないライブの風景を視界に投影してくる。そこは薄暗い原色の灯りが線となって飛び回る空間で、弾ける舞台上の各メンバーと、その中心で歌声を張り上げるボーカルの少女が鮮明に思い浮かぶ。

鈴童は。

音の中心にいて楽しそうに笑っていた。

声から解るんじゃない。これは録音だから気付けることなのだろう。ライブを創り上げているのは、バンドメンバーとそして客席の全てだった。爆発するような歓声の波や飛び交うメロディの嵐が溶け合って一つの楽曲になっている。或いはそれさえも鈴童が。

こんなのは俺の想像でしかないのかもしれない。

けれど、本当に鈴童が笑っているなら。

“そっちは、応援してるから”

悲しそうに呟いた言葉を思い出す。

それは、そこに自分がいられないことを嘆いていたんじゃないだろうか。

突然、俺は世界との繋がりを断絶させられた。といよりも現実に

引き戻されたのだ。俺は一瞬の内に閑散とした旧音楽室に意識を回帰させられる。理紗が耳に嵌めたイヤホンを引き抜いたらしい。

「これが鈴童静歌よ。あなたじゃ敵うべくもないでしょ」

悔しいが反論できない。

「おまえだったら、ついていけるのか？」

恐る恐る訊いてみる。

俺は知っている。理紗とは毎日練習しているんだ。こいつの実力が、鈴童に及びつかないことぐらいわかっていているつもりだった。だけど訊かずにはいられない。答えは彼女の口から聞いてみたいと思ったからだ。

そう。理性では客観的に理紗が劣っていると思っっているのに。十年間をこいつと過ごした記憶が、別の答えを予想させる。

「当たり前じゃない」

当然と胸を張って威風堂々に答えるのだ。それが俺の幼馴染みだった。

「言っとくけど、あんたに合わせて上げてるだけで、あたしだってこれぐらいの演奏は出来るのよ」

「ああ」

そうだったな。それが嘘でも本当でも、実際、鈴童を目の前にすればこいつはどこまでも隣について走っていけるだろう。俺の知っている理紗はそういう奴だ。強気な発言も前向きな未来予想も叶えてしまう。なぜかって、決まっている。

理紗の存在式が、そうなっているからだ。

或いはこういうことなんだろうか。

こいつはいつでも成功する未来までの式を持ち合わせているから、絶対の自信を持って大口を叩ける。理紗自身が言っていた。式とは何かを成立させれば確実に定められた結論に辿り着けるものだ。と。策ではない。俺が企てたのは、所詮まだ策の域を出ていないが、十年間、もしかしたらもつと昔から、その一つを信じ続けてきた少女は『式』という概念を果てまで昇華させたのだろう。

なんて、流石に妄想が過ぎるか。これだと創作物だ。

案外、ただの根性論なのかもしれないしな。

「？……あ、信じてないな。あのね、あんたあたしが誰の血統か知ってるでしょ？」

「誰のつて……」

あ。

そういえばこいつの父親、有名なヴァイオリニストだったな。今は現役を退いているが。

……まあ、ギターと関係があるのかは不明だが。音楽面の才覚は少なからず潜在しているのだろうか。才能云々の話でもないのだろうけれど。トップレベルの演奏を何度も聴いているなら、そしてそれが血の繋がった遺伝子が覚えているなら、少なくとも他と比べればアドバンテージを持っていると考えて間違いない。

失念していた。

「さて、と。じゃあ可哀想なあんたにあたしから式を授けて上げるわ。目標変更よ。今まではそうでもなかったけど、これ聴いてあたしも『ベーシストとして』鈴童静歌が欲しくなったわ。だからあんたは今まで通りに自分の『策』を実行しておいて。なんとかして、あたしとの対決までこじつけてくれたらそれでいいわ」

「一応訊いとくけど……俺のリベンジマッチとか熱い展開はないのか？」

「ない」

あっさりと。

「無駄に熱い展開なんて必要ないわよ。週刊少年誌でだけやってればいいのよ、そんなのは。クールでシニールに現実を見なさい。それとね、そういう理想や幻想が式を破綻させる要因なのよ。用意した式を書き換える定数を加えたら変数が目的値と異なるでしょ。だからー。あんたはそこまで持つて行つてくれるだけでいい。忘れないでよね」

「冗談めかした表情はいつの間にか真剣な眼差しに彩られた表情に、

「音楽だと、万に一つもあんたに勝ち目はないんだから」

決定的な現実を口にした。

「それじゃあ、もう一回。頭から行くわよ」

そしてやっぱりマイペースに切り替えて、練習を再開してしまう。俺は呆れた首を振った。こんな状況だったのに理紗は全然前向きじゃないか。

ふと思ってしまった。

鈴童がメンバーに加われれば、理紗と二人、ベースとギターというバンドの柱が完璧なものになる。そうなると俺はどうなるんだ。一人だけ、実力のなさが浮き彫りになるんじゃないのか。きっと付いていけない。あの勝負と同じ様に、いや、どころか今度は幻聴じゃない本物のギターに置き去りにされる。

何もかもが遠くなってしまう気がしていた。

この先にある未来で、俺は理紗の隣にいれるのだろうか。と、そんなことが漠然と心のどこかに引っ掛かったまま俺はスティックを振った。

16 / 彼女の体温

/ 5

久し振りに朝一番で登校した。

理紗には言っていない。多分このことに関してはたつぷりと怒髪が見舞われるだろう。しかしこれも策戦の一貫だ。そう、策戦だ。あの式女が言うとおり、俺のは所詮『式』とはいえない不完全なものだろう。だから成功不成功の明暗は俺自身の器量と気合でわけられる。だったら根気が大事だ。

意地を張っている相手に対して、引いて待つていては埒が明かない。

俺がしようとしていたのは、鈴童を挑発して、挑発して、挑発し続ける。何らかの形で正面对決に持ち込めれば、後はそれに勝ってしまえばいい。気が強いからこそ、強がっているからこそ、そして意地を張っているからこそ何かに負けないと折れてはくれない。俺が知っている意地っ張りな強がりはその奴だ。

鈴童がもしもそうなら、いつか機会は廻ってくるはずだった。それが昨日だ。結果として負けはしたけれど、それは俺の推量が正しいことを意味している。まだ機会はあるはずだ。なら諦めないでいるだけ。今は。俺に自分の式を委ねた理紗に繋げなければ俺がいる意味がない。

早朝登校に眠い目を擦りながら門を潜る。前回よりは時間を遅らせたので、予想通り正門は開いていた。誰か教師が既に来ているのか、それともまた鈴童が早くから生徒会の業務に励んでいるのか。

……後者の可能性はあるがそうであって欲しくないな。こんな生活を続けていれば体がもたないって。

などと予想しながら生徒会室に向う。

中庭に入って、そして。

……いた。

花壇の傍に座り込んで、隣に工具入れを置いて何かしている赤いコートが目に入った。

まさかとは、思ったけれど。薄っすらと雲の隙間から滲み出す朝日が照らす黒髪は濡れているような艶と光沢を持っていて、流麗で繊細な生系の一本一本は間違いなく。

「……鈴童、さん？」

思わず言葉遣いが可笑しくなってしまう。

十一月の中間で冬はまだ頭の方だがそれでも気温は低い。鈴童はそれでも額に軽く汗を掻いているようで、それを軽く拭ってから俺を見上げた。眠気など感じさせない凜とした瞳が見上げてくる。鈴童は俺の存在を認めると、信じられないとばかりに目を見開いた。

「ええと、おはよう」

たどたどしく言う俺に、鈴童の仰天眼は殺意を帯びて煌いた。

「貴方……なにしに来たのよ」

「いや、どうせおまえ、創設祭の準備とか企画とか一人でやってるんだろ。手伝おうと思って」

「いい。要らない。要らないってば」

拒まれるのは元から承知だが。

なんとなく、こうしていると俺が鈴童を苛めてるみたいに見えて嫌だった。現実的な人格を考えれば有り得ない話だが、けれど、俺の助力を拒む鈴童の目はどこまでも強い拒絶と何故か悲しい色を含んでいたから。そんな風に錯覚してしまう。

どうやら鈴童は壊れた花壇を直しているらしい。工具とかを見れば直ぐにわかることだ。畳んだ体が覆い隠していて、どの程度修理が出来ているかは窺えない。俺は膝を曲げて、工具入れに手を伸ばした。

その伸ばした手を鈴童の手が遮る。

こちらの手首をがっしりと掴んで、爪が食い込むくらいに強い力に拘束された。

「要らないって、言ってるじゃない」

そう言った目は意地を張っているのでも、強がっているのでもない。今までに見たことがない、怒髪も拒絶も虚勢もない表情にはただ怯えだけがひたすらに震えていた。

俺はそろそろ手を戻す。今もまだ鈴童の体温が染み付いている手首を見て、そこに残留した感情から目を逸らす。手の冷たい人は心が温かいというが、だったら、鈴童は物凄く心の冷たい人間だ。だって、今もまだここに残る彼女の体温は痛々しいくらいに生々しく、皮膚を溶かすような熱を残していたのだから。

「悪い。じゃあ俺、先に生徒会室行ってるから」

反論する気が起きなかったのは何故だろう。どうしてか食い下がる事が出来なくて、俺は気付けば鈴童に背を向けて歩き出していた。その背中に鈴童が言う。呟くような小さい声を、張り詰めた冬の冷たい空気は性格に伝播した。

「約束、守ってよ」

「……」

「わたしのことは諦めるって、そういう約束じゃない」

肩越しに鈴童を見て、そこにはやはりあの瞳をした彼女がいる。

鉛色に濁った曇天みたいに渦巻く瞳が弱々しく、懇願するように見詰めてくる。俺は何も言わずに先を急いだ。目を逸らしても、その声が聞こえないなんてことはないとかわかっていたのに。

「貴方なんて何一つ出来やしないくせに。——何一つ、わたしに勝てないくせに」

耳を塞いでもそれは、もしかしたら聞くえていたのかもしれない。……なんだってんだよ、このやろう。

「そういえば今日よね、オーディションの日」

「他人事みたいに言うけどさ、おまえも生徒会なんだから審査に加わらないといけないだろ」

「知らないわよ。あたしはそんなこと言われてないし。それをするのはあんたの役目でしょ」

「……それも、そうなのかもしれないんだけどさ。おまえ自身は鈴童と接触ねえけど、いいのかよ」

「いーの。いずれお互いに実力を認め合う日が来るんだからさ」
「そうかい」

「同じ高位の存在は認め合えるものよ。異端同士が理解し合うことはない。でも引き付け合うのは確かよ。そうすることでその誰かが自分の居場所になるかもしれないんだから。もつとも、それだって馴れ合いの真似事でしかないけどね。そうよ。理解は出来なくても認めることは出来る。手を繋ぐことは人に許された権利なんだから。同じ場所に立つてさえいれば、歩み寄る心さえあればいつでも触れ合えるのが人間よ」

「あー……そすか」

どこの新興宗教の勧誘を受けているのだろう。

昼休みの旧音楽室にてそんな会話が繰り広げられていた。もうなんだか昼の陽気は宇宙空間みたいだ。そしてさらにと自分自身の実力を強調する理紗である。確かにこいつが凄い奴である為の周辺事情は用意されているが、俺はその凄さをまだ目にしていない。肌で体感した鈴童の能力に理紗の口にする凄さが匹敵するのは未知数だ。

だからこそその不安がある。

理紗は鈴童を知らない。知っているのは機械を通した偽物だけだ。

あれは、体全身で感じる異常だから、聴覚だけでしか認識していない理紗の言うことはここではまるで当てにならないと考えていい。

食後の運動として合わせている今も俺の予感収まらなかった。

もしもこのままことが上手く進んで、俺が鈴童と理紗の対決をマツチアップ出来たとしても勝てる保障は、

「あたしが信頼出来ないの？」

緩やかな間奏の合間に訊かれる。

音は穏やかな波のようだった。俺でさえ遅いと感じてしまうくらいの速度だ。稲妻染みた疾走もなく、雷鳴染みた突風もない。丁寧に確かに五線譜の上を正確に縫って入るが、それは練習で幾らでも可能な範囲だ。

「……あのねえ。あたしが本気出したら、あんたについてこれやしないし、それじゃあ練習にならないでしょ。あんたが本当にあたしに追いつくことが出来るくらいになったとき、本気出してあげるから楽しみにしてなさい」

言って、曲調がジャンプする。理紗がピックを大きく振って、間奏の終わりを響かせる。

従って俺もシックエンスを止めて鼓動を速めていく。

シンバルを高鳴らせ、次の音階への口火を切った。

「……………なんの用？」

そこで理紗が演奏を止めた。姿勢が固まったりしたわけじゃない。腕は腰に当てられて、ピックを持った方の手は下がっている。視線は一点へ。音楽室の扉へ向いていた。

奇しくも今度は俺が気付けなかったというわけだ。

理紗の目線を辿っていけばそこには極当然のように鈴童がいてこちらを睨みつけている。

腕には生徒会の腕章をつけて。

……そんなもん、なかったはずだろ。

「ここで何をしているんですか。使用許可は与えていないつもりだけど」

「あたし達は生徒会役員よ。執行部部員。許可なんて自分で降ろすわよ」

「……そう。執行部員、ね」

褪めた視線で鈴童は俺と、理紗とを交互に見やる。

「なら規約のことは知っているでしょう。部室及び一定期間中の教室使用許可は、特別な場合を除き、同好会以上と査定された場合にのみ与えられる。また、行事期間中、同好会未満での放課後下校時間以降、休み時間の使用には顧問の同行を必要とされる。何一つ満たされていないわ」

う、うわ。

すっごい正論持ち出してきやがった！ さすがに生徒会長である。ルールを味方に付けて戦われたなら俺達に勝ち目はない。だって校則違反は言うに及ばず、こちらら下手をすれば法律違反二人組みなのだ。最悪の場合通報されればオシマイだ。……どうするんだよ。

理紗は臨戦態勢になって瞳を細くする。

ギターを下ろして、今にも掴みかからんとばかり至近距離まで鈴童に接近する。身長差が二人には意外とあるようだった。理紗はやや自分よりも背の高い鈴童を見上げている。だが張り合いは負けていない。どちらも互いの視線に怯むことなく無言の激情に火花を散らしていた。

……なんか、不味い。

不味いぞ、これは。

十年來の勘である。そういうば中学の時に似たようなことがあったな。反抗期の餓鬼じゃないんだから、理紗だって簡単に爆発しないだろうし、やたら滅多に権力の首元に噛み付くような真似はしないはずだ。匂いで解るだろ。おまえ等似てるんだから、キレたらなにしゃがるかわかんねえんだぞ。

「っさいわねこの頑固頭！ 赤鬼！ 泣いた赤鬼！ あんたそんな気張ってばっかだから誰も寄り付かないのよ自分でわかんない訳！ バツ力みたい！ 正真正銘真性のアホなんじゃないの！ 孤高

主義なんて寂しさを隠すだけの強がりだって、この歳でわかってないなんてほんっとバカよね！」

おいおい。

状況わかってんのか、理紗。

俺はまだ。

前科は欲しくねえ——！

「止めろって、おまえ！」

罵詈雑言、拳句は暴力行為にすら発展しかねない。なんだこいつ。冷静に式とやらを立てて、表で俺を使役しつつ裏で意図を引いてる黒幕タイプに徹すると思ってたのに。ちよつとは成長したと思ってたのに！ 頭の中まるで子供じゃねえかよ。

がっしりと理紗の腕をホールドする。じたばたじたばた。振り解こうと腕を振り回して、その拳は正確に俺の顔面を射抜いてくる。ああこのやろう大人しくしろよ。駄々っ子なんて流行らないぞ。

「離せ痴漢！ ちよつと、どこ触ってるのよ！ 発情してんじやないわよ！」

「てめえ、俺に何されても気にしないとか言ってたじゃねえかよ！」

「うるさい！ これは忠告だからッ。今物凄い興奮状態なのよ！間違いを犯すわよッ！」

「ああ、傷害事件を起こしかねないよな！」

なんなのこいつ、何とかしてくれないですか。

力尽くで何とか理紗を抑え込む。その一部始終を鈴童は冷たい目で遠くから見ていた。心なしかさつきよりも離れてないか。しかも無表情を装っているが若干引いてる。隠しきれてない。あの鈴童が内心を隠しきれてない。

「……どうでもいいけど。苦情が出る訳じゃないわ。とはいえ、以後ここは使用禁止よ。どうせ、今日明日で創設祭のオーディションは終わりなんだから。直ぐにとは言わないわ。三日間、猶予を上げる。それまでにさっさと引き払いなさい。くだらない。生徒会ごっこも終わりよ」

「この、なんであんたは——」

右腕だけ振り解かれる。しまったと思うと同時に左手もするりと抜け出し、俺はその手首を掴んでどうにか動きに抑制を掛ける。理紗は右腕を高く振り上げて、一気に振り下ろした。突き出した人差し指を、鈴童の眉間を射抜くようにぴんと立てて。

「——正面から来なさいよ！ 本気で、本音で！ あたしと勝負しなさいよ！」

熱血っぽい台詞を、怒声で叩き付けた。

「このバカが相手なんじゃ、あたしの實力はわかってないでしょ。なら見てみなさいよ。思い知らせてやるわよ。自分がどれだけお山の大将か。井の中の蛙なのか！ 自分で困って一人しかない世界で神様やって、そんなので楽しいわけじゃない！」

左手さえも取り逃がしてしまう。

閃いた左手はそのまま、擦じ上げるように鈴童の胸元を掴んでいた。

額をぶつけて、そして理紗が布告する。

「そのバカみたいな思い上がりの境界を破却してあげるから。一回、出てきなさいよ」

抑えた声は本当の本当に掛け値なしの本音だと、俺は知っていた。だってこいつがこんなに激情するのはきつと、気付いているからだ。

鈴童はまるで昔の理紗に似ている。一人っきりで意地っ張りだった昔の理紗に。だから許せないんだ。認められないでいるんだ。一人で困って一人で孤独な、一人だけの一人ぼっちが手に取るように悲しいと解ってしまうから。

感情のままに咆哮した理紗は、それで幾分か気が晴れたのか簡単に鈴童を解放した。

鈴童は乱れた制服の胸元を正している。まだ何も言わない。

大きく息を吐いて、そして、それが最後だった。

「これ以上は時間の無駄ね。これは警告だから。貴方達は従うしか

ないわよ。じゃないと、校則違反も、今の暴力行為も、貴方達の不純異性交遊も全部使ってここから叩き出します」

熱量が違い過ぎる、そんな言葉が揺れていた空気を停止させた。

理紗は、もう何も言わない。

俺もまた何も言わなかった。ここまでだなんて思っていないから。鈴童がここまで意地を張っていたなんて知らなかった。……って待てよ。不純異性交遊ってなんだ。おい、ちよつと待った勘違いだろそれは。

「り、鈴童、ちよつと待った！」

慌てて待ったを掛けるが、鈴童はまるで乱れないペースのままゆっくりと口を開いた。

「もう一つ」

流し目に睨んでくるのは俺だけだ。既に理紗とは関わり合いを持ちたくないとか、話を通じないだとか言う風じゃない。煽るような空気もなく今の鈴童の中には俺しかいないようだった。それはきつと、これから言うことが俺にしか意味のないこと、理紗には言う必要さえもないことだと判断したからだろう。

そうして鈴童は迷いのない口調で拒絶の言葉を紡ぐ。形にして、まるで心が冷却されていくみたいだ。そんな他人の心境がわかるくらいに、鈴童の表情の変化はあからさまだった。

「オーディションには私だけで十分だから、貴方は必要ない。こなくてもいいからね」

もう少し、幼馴染み風に顔が赤かったりしたら照れ隠しみたいでよかったのにさ。なんでそう冷たく言うんだよ。それだとおまえの言っていることが、こっちには本気としか思えないだろ。心からお願いみたいに聞こえて、直ぐに反駁できないじゃないか。

用件は済んだとばかりに鈴童が部屋を後にする。無造作に扉を開けて後ろ手に音もなく閉める。俺は初めに理紗を横目に入れてみた。激情に任せて今から生徒会室を襲撃したりするようならば、なんとかそれだけは阻止しなければならぬ。そんなことになれば仕込み

が台無しだ。

もつとも今のところ。

俺の仕込みは完全に裏目を出し続けているのだが。

ああ、もう畜生。

理紗は心配なさそうだった。だから次に心配な奴をどうにかしておくことにする。他の誰でもない、この俺だ。どうにも気分が晴れない、なにか大切なものに罅が入っているみたいな感覚が気になって仕方ない。朝から全くモチベーションが上がらないのだ。少なくともこれまでは保っていたそれが今は完璧に枯れてしまっている。

このまま鈴童を帰らせたりしたら、俺はあいつに言われた通り……扉を開けて直ぐにでも走り出そうとした。けれど、その必要はなかった。だって鈴童はまだそこにいたのだ。廊下側に窓のない音楽室、その壁に凭れて、少し顔を上向けて鈴童は立ち尽くすように棒立ちしている。

「なにしてんだ、鈴童？」

駆け出しそうな勢いを押し殺して扉を閉めた。力を入れてそうしたわけではないが、ぴしゃり、とやけに音がでかい。立て付けの問題もあっていつもこんなだ。意識しないと少なからず大きめの音を立ててしまう。

上向いた顔を元に戻して、眉間を指で少し押した鈴童が歩きながら追い越し様に言ってくる。

「なんでも。貴方達が私のいなくなった後にくだらないことを計画していないか、聞き耳を立ててただけよ。邪魔なら直ぐに帰るわ」階段に向かって角を曲がる。まるで迷いの足取りは呼び掛けても止まらない。何度か名前を呼んで追いかけて、やっと止まったのが階段の中段辺りだ。あたかも初めて気付いたみたいなりアクションで振り向きやがるが、顔はすいぶんだるそうだ。

「待てって鈴童」

「まだ何か？」

見下ろしているのに、見下されてる気分だ。

「俺も行くからな、オーディション。俺だっておまえと同じ生徒会だ」

今日初めて見た腕章に視線を向けて言う。異常でもなんでも、俺達は同じもののだとそんなことを言いたくなっただけかもしれない。折れそうな心を鼓舞しただけかもしれない。鈴童はどうかわかっただろうか。それは不明だが、けれど無理矢理な作り笑いを浮かべた鈴童は、

「あの勝負で伝わらなかったなら、はつきり言って上げます。貴方なんて必要じゃない。私は誰も、要らない。一人でいい」

全て粉々に、砕き割ってくれた。

「今までだって、そうしてきたんだもん」

17 / 式少女のメロディライン

/ 6

—— 要らない。

—— 一人でいい。

—— 何一つ、勝てないくせに。

—— 貴方なんて必要じゃない——。

放課後、冷えたアスファルトに寝転がっていると凍り付くような冷え込みが身に刺さった。それがまるで鈴童に言われてきた言葉を再生しているようで落ち着かない。体の芯まで染み込んできて心を凍えさせる冬の午後の外の空気が肺を締め上げる。

屋上は空に近いから暖かいんじゃないのか。太陽に近いんだからその理屈だとヒマラヤとかの上には雪なんて積もらない訳だが。若干凍ってるんじゃないのかここ。本当に風邪を引きかねないので起き上がる。体勢を立て直して給水塔に凭れて座った。

吐く息が世界の一部を白濁させる。体温が奪われているんだ。けなしの体温が。

失われていく貴重な温もりを惜しみながらフェンスの外を眺める。遠くに見えるのが体育館で、今その中では創設祭舞台有志のオーディションが開かれている。校内在校生とは今日の部と明日の部の二回、外来のゲスト参加者は明日という日程である。

聞くところによると創設祭実行委員とかそんなものが一時的に発足しているらしい。審査員はそこから何人かを選出される。生徒会からも二人か三人ほどが代表で審査に加わるのだが、俺は放課後の体育館にどうしても脚を向けられなかった。

俺が行ってどうなるものじゃないだろ。

鈴童が一人でいいって言っているんだから。俺が行けば邪魔なだけだ。頭を占めるのはそんな弱気な考えだけだった。強行してしまえばいい。強気になろうとすればしかし、あれが去来する。まだ新しい完全敗北の記録。絶望的な両者の距離を見せ付ける、全く釣り合うことのなかったセツシヨンの光景が戻ってきて意思を打ち碎いた。

だから行けなかった。怖かったのだろ。また、あんな風に自分が無価値に感じられるのが。なるほどそういうことが。

俺は全くへこんでいなかったわけじゃない。見事に奪われていた。空っぽにされて殺されていたのだ。鈴童静歌に対する感情の全てを殺されて——それが、スイッチになる。寸分も敵わなかった、ただ遠いだけの記憶を呼び起こすスイッチに設定されていたんだ。

鈴童は演奏でだけ勝った訳じゃない。

一つの勝利で呪いを残した。昼休みのはトドメを刺されたといっている。深く深く、鈴童の言葉は心に突き刺さって抜けやしない。やっとわかった。これが鈴童の言っていたことなんだ、と。いずれ自分から遠ざけたいとなるとそう言っていた意味が。

……あーあ。理紗にどうやって言い訳しよう。

俺、なんかもう降りたくなって来た。あいつはもう手に負えないけれどそう考えるのも、何だか気分が悪い。だったらどうしろってんだよ。本当にどうなってしまうんだろ。どうなってしまうたいんだろ。そんな二つの感情がぐるぐると廻り続ける中で放課後は進んで行く。

「なーにしてんのよ、このバカ」

頭上から声が降ってくる。

心臓を鷲掴みにされたみたいな感覚に思わず振り返った。しかし背中をべったりと付けていたことを一瞬忘れてしまい、なんだか三点ブリッジみたいな体勢になる。……一秒後、後頭部に激痛が生ま

れたことは言うに及ばず。

涙目に霞む先に理紗の白い脚が見えた。

「オーディションはどうしたコラ。あんた啖呵切ってたじゃない」
見られていたのか。

急に羞恥心が湧き上がる。

挑発の一貫だったとはいえ選んだ言葉は結構人に聞かれたくないからな。

「悪い、体調が優れない」

「何が足りないの？ 注入してあげるから言ってみなさいよ」

「気合」

「オッケー」

張り倒された。

しゃがみ込むのが面倒臭かったのだろう。

右足が旋風を巻き上げて首を刈りに来る——失速せずそれは俺の頬を打ち抜いた。

「な、なにしゃがる！」

三メートルくらい転がった。歯の何本かは覚悟したくらいの激痛だ。

「気合注入。元氣出た？」

「出るか。俺は蹴られて喜ぶヘンタイじゃねえッ」

「でも男でしょ？ 蹴る時にあたしのパンツ見せて上げたじゃない」
「突然の衝撃に、んなもん見てるだけの反応が出来るか！」

実は水色のストライプが見えたのだが。たまたまだぜ。

理紗は軽口を叩いている割に顔は一ミリも笑っていない。近付いてくる姿に追い討ちを幻視する。強い風に目を閉じた。けれど暗転した視界はいつまでだっても静かなままだ。次の一撃が加えられることは、なかった。

目を開くと理紗の顔が直ぐ近くにあった。

膝を折って、スカートを折り込んだまま両手を膝裏に挟んでいる。寒いのだろう。俺だって寒い。なのに何故か胸の中は変な熱を帯び

ていた。理紗の吐き出す息が肌をひりひりと焼く。近くにいるだけで、心拍を共有しているみたいな静寂が流れていた。

「……ごめんな」

知らず謝ってしまう。

それしか言えなかった。

だってまだ俺はその言葉を口にしていなかったのだから。

そうして気が付く。自分が何を抱えていたのか。鈴童に負けたから。そんなのはどうでもいい。俺の腕が未熟なのは百も承知だ。何度も言うが、傷付いて困るようなプライドなんて持つじゃない。だから俺が何を気にしていたのなんて、簡単なことじゃないか。俺に任せると言った、理紗の信頼に応えてやれなかったことがずっと、心を締め付けていた。

鈴童に挑んでいけばまた何度でも、理紗を裏切ることになる。それが嫌だから降りようとしていたんだ。なんで気付かなかったんだろ。本当は今までもそうだったんじゃないのか。何をするかなんてどうでもいい。ただ俺は、理紗の立てた式を、自慢げに、嬉しそうに胸を張って語るその式を形にしてやりたかっただけなんだ。

「ごめん、理紗、俺、負けたよ。で、もう敵う気がしない」

この先も。

目の前の問題が解決して、目的どおりバンドを組めたとして。

今度はそこで俺が脚を引っ張ることになる。二人の実力には置いていかれるだけだ。それは目に見えて明白。そうなければまた。

「バカね。バカよ、あんたは」

「知ってるよ。俺はおまえみたいに、なんでもかんでも式とか言っ
てられるほどお利巧じゃない」

だからどうしよう。

どうすればいいのか、教えて欲しい。

今は、自分では決められないけれど、頑張れと言ってくれるなら、まだ頑張れる気がした。

「頑張るとか、そんなのはどうでもいいわよ」

……て、おい。

この感じでそんなこと言うのかよ。台無しだ。

「だって、あたしの式はいつでも完璧なんだから。あんたは絶対、それを成立させてくれる。それだけで十分よ。結末は決められた未来一つだけ。大丈夫よ。あんたならね。だってあんた、頑張ってるじゃない」

「……根性論かよ」

「論理式よ」

どっちだっていい。呼び方なんて。

「前向きに考えなさいよ。鈴童静歌がそれだけ凄いなら、あんたの腕くらいカバーできるわよ。それにあたしもいる。マイナスが一つでプラスが二つなら、プラスが残るんだから。それにあたしは、あんたが必要ないなんて思わない。あんたじゃないと嫌よ。これは絶対。だからさ——」

黒い瞳の奥に滲んだのは、本音だったのだろうか。

頬の筋肉をぴくりとも動かさない。目も背けないし顔色一つ変えない。真面目なのかそうでないのかも解らないくらいに極自然に当たり前に単純に端的に——だけど純粋で透明な言葉は、雑然とした心の奥の奥にまで浸透していった。

「あんたが必要ないなんてこと、絶対にないわよ。あたしは、あんたが好きだから」

「……おまえ」

なんで、こんな。

あつさり、そんなことが言えるんだろう。こっちが恥ずかしくなってくる。

それはきつと、こいつにはそんな気なんて全くないからだろうな。「しっかり協力してよ。あたしの彼氏作りにね」

幼馴染みは幼馴染みだ。

そういう意味では俺だって、少なからず理紗のことは好きだと言っている。

ん、と喉を鳴らしてじつと覗き込んでくる。猫が遠くからこつちを見ている様に似ていた。違うところといえばなんだろう、その、距離が物凄く近いということか。今までならこんなことなんて気にならなかったのに。

「で、まだ答えを聞いてないんだけど」

「……なんのだよ」

「あんたまだ、頑張れるのかって、訊いてんのよ」

「……」

発熱しかけた意識が一瞬で冷却されていく。

本題に戻ると、どうにもまだ、強くなれなかった。なんだよ。頑張れる気がしたって。実際それが仮定だったとはいえ、今はびっくりするほど自信がない。こいつ言わなかったし。冷静になって立ち返れば、俺は始まりと何も変わっちゃいなかった。

ただ自分が何で落ち込んでいるのか。何に対するモチベーションを剥奪してしまったのか。自分の中の何が殺されたのかという容態を自覚しただけだ。わかったところでどうしようもないそれを、悟ってしまっただけだった。

ふん、と理紗が鼻を鳴らす。憤然と立ち上がり、髪が翻った。

瞳に溢れるのは呆れとか苛立ちとか、けれどそれを形作るのは際限ないほどの自信だ。理紗が一番自分らしい目をしていて。どこか嬉々として、完成した絵を親に見せる子供のように輝いている。見下ろされた俺はただ黙って次の言葉を聞き入れた。

「ついてきなさい。あんたがやる気出るように、とっておきを見せてあげるからっ」

連れて行かれたのはいつもの、昼休みも訪れた旧音楽室である。

理紗は部屋に入るなりギターのチューニングを始めて、いつもなら見ることもない楽譜を立てた。それが意味するところはなんだろう

うと疑問に思っていると、こちらを見ることもない怒声に準備を促される。言われるがままドラムを前にスティックを握った。軽く叩く。寒空の下にいたので、少し体を温めておく。これから演奏するのは明らかだからな。

理紗はすいぶん早くに準備を整えていたようだが、俺の調子が十分になるまで待っていてくれたらしい。腕組して譜面を眺めている。新譜だろうか。なら俺はついていけないぞ。

「じゃあ始めるわよ。先に言っとくけど、あたし、今回は本気で行くから」

「本気って……」そっぴや普段は俺に合わせてるんだっけ。「おっけい。わかった」

「ちゃんと付いて来なさいよ。でないと意味ないから」

「善処するよ」

「そういう時はカッコつけるだけでいいから、強気で言ってなさいよ」

「がってんしょうちのすけ」

「よろしい」

よろしいのか。

すつ、とピックを持ち上げる。理紗の瞳の色が、深海の色に切り替わる。深く吸い込んだ息を肺一杯に溜め込んで、長い吐息が終わるのがスタートの合図だ。もう掛け声も目配せも要らない。それぐらいに練習は積んできた。

曲目を考える必要はなかった。

こんな風に理紗が始める曲は完成している三曲の中で一つしかない。

そして俺に付いて来いと言った。無茶を言っているようでそうではないのが理紗だとも知っている。理紗は俺にそれが出来ると判断したのだ。一番始めに完成して、最も長く練習した曲目が答え。奇しくもそれはドラムを前にした瞬間に頭を過ぎっていた。

疾走感を掻き立てる軽快なリズム、その口火を切るのは大気の震

動と胸の高鳴りを代弁するようなシンバルだ。始まりの合図を響かせる。

鈴童に完敗した記憶が旋律と共に蘇る。
まだ体が覚えていた。あの感覚を、あの途方もなく遠いメロディの疾駆を確かに。

だから出だしは上手く腕が動かなかった。練習ではどうということもなかったのに、意識だけでここまで変わるものなのか。短いソロが終わってギターの音が重なりだす。理紗の作り出す、一本の太い線が音符の一つ一つを貫き進んでいく。

いつもと違う点は、理紗の演奏は走っていた。

隣を歩いていくいつもの音調ではない。こちらを置いて行かんとする、速度も音階も何もかもが桁違いだ。響き渡る、夏空を思わせる爽快なメロディは鈴童のベースが聴かせてきた架空のものとは違う。本物の重みがあつて、本物の鼓動が含まれていた。

そして加速していくメロディに、

「――」

理紗の歌声が重なる。

……そういうことか。

ようやく理解した。

知らない間に歌詞が出来ていたらしい。理紗はその初舞台を今に決めたのだ。こんなぼろぼろのタイミングで。自分の式が破綻しようとしている今この瞬間に。折れかかっている誰かを鼓舞する為に。

遠くの空へ駆け抜けて。

青く青く果てない色の夢に声よ届け。

キミの歩む道、

その道標になる歌だけを胸に響かせて。

サビの一節を歌い上げた理紗は、間奏に入って澁刺とした笑顔はこちらに向けた。

「——なんだ。ついて来れてるじゃない！」

上がりきったテンションがますます段階を上げていく。

冗談じゃない。俺は置いていかれないように必死なんだ。涼しい顔をして軽口を返すこともままならない。だけど表情だけなら応えられる。自分がどんな顔をしているかは理解できないけれど——もうさっきまでの情けない顔はしていないだろう。

不思議とついて行ける気がした。無理矢理引き釣り上げられる鈴童のそれとは違う。手を引かれている感じだ。もっと早く、ほら、もっと早く、と笑顔で急かされているような。手首を掴んで走り出す、迷いのない歩調は減速を知らない。どこかの誰かみたいだ。演奏には人格が出るということだろうか。

そうして最後まで駆け抜けた。躓いて転んで、何度か音程を外してしまっただがそれでもやりきった。

歌詞を堪能している余裕なんてなかったが、少しだけ元気を貰うことは出来た気がする。

応援歌として元々作られた曲だ。気持ちが高ぶるのも当然だろう。

ギターを下ろさないまま、理紗は体をこちらに反転させて、

「なんだ。やっぱりやれば出来るじゃん、あんた！」

無邪気な笑顔だ。何がそんなに楽しいんだよ。こっちはもうへとへとだ。特に精神的な部分で。

愚痴を口に出すことはしなくなかった。だから俺も、自分に似合わないことは知っていたけれど理紗の真似を試みる。——掲げた拳の親指だけを立てて、二人、その拳を突き合わせた。

「ね、元気出た？」

高飛車でない、こんな奴、俺の幼馴染みにはいない。

俺の知っている式少女はこんな風に素直に笑わないし、優しくものを尋ねたりもしないのだ。

そこにいる誰かは俺の知らない誰かで、テンションのグラフを定期的に上昇させる要因の擬人なんだと思う。だから素直に答えられる。冬なのに汗が滴る笑顔に向って、

「ああ、ばつちりな」

言って、聞き入れた理紗はぴょんとステージに上がってくる。
肩を思いつ切り後ろから叩いて、

「ほらね、大丈夫だよ——頑張ってる誰かを見捨てるほど、この世界は酷くないから」

或いはそれは、考察中の歌詞の一部だったのかもしれない。
我ながら単純だと思う。でも確かに、百億の言葉に勝るほどのものを貰った。

これなら行けそうだ。

もう少しだけ、頑張ってみよう。

西陽の差し込む教室に残った余韻を肌で感じつつ、もう一度心が折れてしまわぬよう胸に仕舞い込んだ。

18 / ある放課後の話（前書き）

/

真つ 青な羽を広げて 歌声を上げる
ここに いるよと 叫んでいた
届けと 歌って 声を枯らす
それは まるで 誰かの 慟哭の ようで

イヤだ って この ままじゃ
ずっと 二人で いる だけじゃ
不安だから だから もうどこにも いかないで って
ここに いるから いるからね

失くした 後で わかる 君の 大きさを
綺麗な 色した 青い羽 赤い 色の 空に 飛び 立った
君が いない 日々を 映した 誰かの 涙 溜めた あの 空

いつか ずっと 傍に あって
近く に あった から 気付 かなか った
大切な ものは、 もう ずっと ずっと ここに あった から

君は 鳴いて た

18 / ある放課後の話

/ 1

「鈴童！」

夕陽がもう沈み出し、辺りが薄暗く青い闇に包まれ始める。体育館に駆けて行くと、鈴童はオーディション申請の書類とか評価を付けたのであるうノートやその他諸々を両手で抱えていた。誰が知ろう。そして誰がこの姿から察するだろうか、これが我が校の生徒会長である。

漫画などなら。

両サイドに屈強な男や麗人系の美少女を従えているのがお約束だが、この生徒会長様は常に一人だ。一人で全部の仕事をこなしてしまふのだ。現実なんてそんなものだろう。能力のある人間は人に頼らない。人を使役するだけだ。

それを鈴童は一切しようとしなない。使役する人物が周囲にいないからだ。

「……なにをしに来たんですか。残念だけど、もう今日のオーディションは終わりましたよ」

「でもどうせ、まだ仕事は残ってんだろ」

俺は鈴童の抱える荷物を見て言う。

今更隠したって仕方ないのに、くるりと背を向けた鈴童はそれを見えぬ位置に持っていた。首を捻ってこっちを見る。またあの目だ。威嚇するように鋭い、近寄らないでくれと懇願する目を見返す。そうはいかない。今度の俺はこれぐらいでは引き下がってられないのだ。

「貴方には関係ない」

「そうはいかないだろ。俺だって生徒会だ」

「わたしはそんなの、認めていません。いいから帰ってよ。どうせ、何も出来ないくせに」

「コーヒーくらいは淹れてやる」

「自分でするからいい」

話していても埒が明かない、という風に鈴童は大腿で歩き始めた。流石に重そうな荷物に見兼ねて、鈴童の腕から半分ちよつとを強奪する。抵抗してはくるが、鈴童は両手が塞がっているのだから脅威にもならない。俺は簡単に書類の山を削り取った。

「これぐらいなら俺だって手伝えるだろ」

「……ばか」

噛み殺した声が聞こえた。

鈴童は抱えたそれらをぶちまけてしまいそうなくらい大幅に足を踏み出し、その脚も地面を凹ませるんじゃないか思うくらい強く打ち付けられる。目に見えて怒っている。物凄く怒っている。ここまです露骨に感情を表す鈴童というのは、どうだろう、流石に初めてな気がする。チラシ貼りのときと比較にならない。

こつちを見ないまま先の言葉を連呼する。呪詛の言葉を吐き出し続ける鈴童の声がだんだんと熱を帯びてきた。呪われているみたいで怖いのだが。俺は半歩後ろについて会長の背中を追いかけている。そんなことを冗談めいた思考に霞ませていた。

「ばかばかばかばかばかばかばか、この、大馬鹿者。諦めろつて、言ったのに」

「知らねえよ。俺はそんなことの為にこうしてるんじゃない」

「だったら何で！」

怒ってるよ。鈴童が凄く怒っていたまる。

……と、冗談めかして描写してみれば可愛いものなのだが、これが本気で怒った女の顔に怯んでいる心境を誤魔化しているということとは秘密にしておく。蛇に睨まれた蛙はこんな風に死を覚悟するのか、ってぐらいにおっかない。

俺は答えずに脚を動かした。自分でも何と答えてよいものかよくわからなかったからだろう。

鈴童に固執する理由は、正直言って今の時点ならそこまではないのかもしれない。

何せ理紗の式は半分以上完成している。ベースストの獲得という点以外でならば――既に問題は何一つ残っていないのだ。本来はそのことを鈴童に悟らせないこともこの行動の理由なのだが、どうやらその目論見は上手く行っているらしい。

まさか鈴童ほどの相手にこんな小賢しい策が通じるなんて、俺は思っていなかったのだが。

気が回らなかったというより、気を回さなかったのだろう。問題は何もないと、そう判断されたのだ。だが実際は、俺と理紗が生徒会のメンバーになった時点でほとんど鈴童の後手である。彼女はそのことに気付いていない。

「なあ鈴童、一個だけ聞いてくれ」

「……なに？」

「俺は確かにおまえに付いていけない。でも理紗は違う。あいつなら、おまえと張り合える」

直ぐに反論されると思った、けれど。

「……知ってる。そうでしょうね、彼女なら」

は、と目を向ける。鈴童もこちらを見ていた。

口にしてしまってから気付いたのだろう。これだとまるで、自分が俺達を気に掛けているみたいに聞こえると。鈴童の発言は、一度ではなく何度も、その実力を測れるくらいに演奏を聴いていたというのを暗示していた。

「ち、違うから！ わたしは……貴方みたいなへたくそに合わせられる實力から、そう思っただけで」

フォローになってなかった。冷静な鈴童が取り乱している。

これはこれで面白そうなのだが、あんまりイメージを壊したくないのでこの辺にしておく。

叩けば幾らでも埃が出てきそうだな、今のこいつは。

「だから、わたしは貴方が足を引つ張ってるっていいたいのよ」

「それもわかってる。でもおまえならカバー出来るだろ？」

「……自分の無能を、勧誘の文句に使わないで下さい」

ぐさり。ああ、胸が痛い。嘘だけど。理紗の受け売りだし。

「だったら、俺におまえについていけるくらいの実力があつたら――」

「――論外。そんなもしもの話なんて、なんの意味もない」

言葉を途中で切つて、最後まで言わせてくれない。

それもそうだろうな。

いくら仮定を並べ立てても現実には成り代わらないのだ。

それに、とこれは出来れば聞こえていないで欲しい、という風な音量で鈴童は付け加えた。

「音楽だけじゃない。わたしに、ついてきてくれる人なんていなんだから」

悲しそうに、呟いて。

盛大にずっこけた。

俺ではない。鈴童の方がだ。

渡り廊下の小さな段差に躓いて引つ繰り返った。俺は倒れる体を引き止めることも出来ず、信じられないものを見た心境でコンマ何秒か意識を乖離させてしまう。だってさ、あの鈴童静歌だぜ。創作物のどじつ子のようにほとんど平坦な道ですつ転ぶなんて展開を予想できるはずがないだろ。直視してそれでもまだ信じられないくらいである。

派手に書類が飛び散る。放射状に散らかったその上に倒れ込んだ鈴童は、自分でも信じられないという顔で起き上がった。ぺたん、と目をぱくりさせて座り込む。腰が抜けたみたいな格好だ。当人さえも現実が飲み込めていないのだろうか。

ややあつて。

ぐるんぐるん、首を振って周囲を見回した鈴童がこちらを睨む。

「い、今のはちょっと、疲れてただけで……！」

心配しなくてもいい。オレハナニモミナカッタ。

やれやれと散らかった書類を集める。鈴童はそんな俺の姿を忌々しそうに睨みつけているが止めようとはしなかった。そしてそれらを一つに纏め上げてからもまだ立ち上がろうとしない。膨れたまま目を逸らしてくるばかりだ。

相当恥ずかしかったのだろう。

そりゃそうか。

完全無欠でいることって、難しいんだな。……当たり前か。

「これ、俺が運んどくから」

「……勝手にして」

壁に凭れるように立ち上がる。その姿は本当に存在感が希薄で、今にももう一度倒れてしまいそうな子鹿を思わせた。これは重症だ。しかしわからないこともない。こればかりは逆の立場になって想像できる。

銀色の鉄片に緑色のプレートがぶらさがった何かが、放物線を描いて宙を舞った。鈴童が生徒会室の鍵を投げ渡してきたのだ。俺はそれを書類の山の上でそれを受け止める。

「わたし……今日は帰ります。生徒会室、閉めておいて。その鍵は、お姉ちゃんにでも渡しておいてくれればいいから」

それだけを言い残して、鉄の生徒会長は去っていった。どこか定まらないそんな足取りで。

19 / 鍵の一枚

/ 2

預かった、というより半ば強奪してきた物を生徒会室まで運んでからのことだ。

鈴童が残したらしき業務を少しでも減らしておこうと四苦八苦し
てみるが、何一つ、どこからどう手をつけていいのかもわからな
った。自分が名前だけの生徒会役員だということを今ほど思い知っ
た日もない。せめて普段から鈴童の手伝いをしていればここまでで
はなかったのだろうが、そんなこともしてこなかったからな。

時計を確認する。オーディションの後だ、下校時間は既に十分ほ
どオーバーしている。

生徒会執行部という名目の活動ならば、まだこの先一時間と少し
ぐらい校内に残っていても問題ないが、それになんの意味があるだ
ろういやない。だから大人しく下校しよう。

書類を適当に机の端っこに纏めて置いて、腰を上げた。

背後の扉が開いたのはちょうどそのタイミングだ。初め俺は鈴童
が戻ってきたのかと思った。あの会長様なら有り得ない話ではない。
その日の課題をその日の内に片付けられないことを嫌いそうな性格
をしているからな。しかし現実、そこにいたのは赤いコートの生徒
会長などではない。

俺の良く知る幼馴染みの式っ娘が、冬の空みたいな瞳でそこにい
た。

理紗は無言で室内を見渡す。誰かを探しているようにも見えるが、
ここには俺しかいない。

そのことを悟ったのか、

「驚いた。生徒会長、本当に帰ったんだ」

「なんだおまえ、知ってたのか」

「校舎の中から見えたのよ、あいつが出て行くの」
「ばたり、扉が閉まる。」

今から帰ろうとする俺を尻目に、理紗はコートを脱いで椅子に掛け、鞆を机に置いた。

「で、あんたは何してたわけ？ まあ、見ればわかるけどね。この山積みの書類。……って何よ、これだけしか片付いてないの？ あ

ーあ、無能ねー。ホントに使えないなー」

「……悪かったな」

「本当よ。悪いも悪い、最悪よ」

「……」

なにもそこまで言わなくてもいいだろ。

「だから、あたしが手伝ってあげる。曲作りは大方終わったし。暇なのよ。一人じゃ練習にならないしね。なに？ 何か文句ある？ 別にあんたがいらないうっていうなら、放っておいて帰るけど。それでもいい？」

「待て待て。手伝ってくれるなら大歓迎だ」

助力があるのはいい。一人より二人だ。

だが理紗が加わったことだけでどれだけの意味があるだろう。こいつは俺以上に生徒会業務に携わっていない。生徒会室に訪れたのだってこれで三回目くらいじゃないか。そんな奴が一人増えたくらいでは狼狽するお仲間が増えただけに変わりない。

理紗は書類を手前に引き寄せると、ぺらぺらと捲って――目が左右に動いている。内容は速読しているらしい――握ったペンをさらにと走らせ始めた。驚くほど行動がスムーズだ。

「おまえ、なんでそんな簡単に書類処理できるんだ？」

「適当よ。適当。ていうか、ほとんど終わってるようなものじゃない。……これなんてほら、会計の書類。これさ、後は経費の総合を計算するだけで終わりだし。クラスからの徴収と生徒会予算なんか

の面倒な部分は綺麗に纏められてる」

言われてみて適当に一束を手にとって見る。

確かに付箋が貼られたり蛍光ペンやラインマーカー、シャーペンの走り書きや要点のメモなんかも書き施されている。だが俺ではこれだけでこの書類が何の書類で、ここからどのような結論を導き出して整理すればいいのかわからない。

鈴童ほどではないのだろうけれど。

それでも理紗もまた、こういう能力には長けているのだ。

昔から何でも一人よりこなす。負けず嫌いが生んだ平均以上の結果をはじき出す潜在スキルが理紗には備わっていた。多芸な兄とか、その辺の環境も影響しているのだろうし。こいつもまた一人で何事も解決してくる人生を送って来たのだ。

「なに突っ立つてんのよ。面倒なのはあたしが済ませるから、あんたもほら、座って」

檄が飛ぶ。

奇しくも理紗が腰を下ろしているのは鈴童の指定席だ。なんだろう。そこに座った奴はみんなそういう態度に変容するのか。などと思いつつも素直に従って、俺も俺の指定席に着く。ここ二週間ばかり使っただけなので、指定席というほどでもないが。そこは鈴童の対面、今は理紗の対面だった。

「ちよつと、判子ってどこにあるの？ 生徒会承認の判子」

「知らん。たぶん鈴童が持ち歩いてるんじゃないのか？」

「あ、そう。じゃあここは保留ね。ほら、これならあんたでも出来るでしょ」

さらに、と流される書類に目を通す。

ふむ。

何となくだが出来る気がしないでもない。物凄く時間が掛かるだろうけど。

予想通り、俺がその一つを仕上げる間に理紗は四倍ほどの仕事量をこなしていた。化物なのかこいつは。ていうか何で急に手伝う気

になったのだろう。もちろん助かるのだが、理紗が鈴童の為に尽力する理由が見当たらない。理紗自身はそこまで鈴童に固執していなかったはずだ。

「だって、早く済ませないとあんたと練習出来ないじゃない」

「そりゃそうか」

「結構楽しいからさ、下手だけど、あんたといっしょに歌ったり、ギター弾いたりするの。最終的な目的は別にあっても、でも今は今が好き。今が楽しいから、こんなことに時間を取られるのが嫌なだけよ。さつさとベーシストも加入しないといけないし。ここまできたらやっぱり、あの生徒会長を引き入れないと負けた気分でしょ。そんなのはあたしの式に反するのよ。あたしの存在式にね」

存在式って何だ。

そう思っただけで中学時代のことを思い出した。そういえばこれについては一度説明を受けたことがあったと思う。個人を成り立たせて、世界と他の個人から自分を確立する為に必要な式、とか言ったか。つまり個性とか理念とか信念とかを文字に例えて、等号で繋いだ右辺（あるいは左辺）が今の自分なのだとかなんだとか。人間でないにしろ、個々の存在は全てその式の上に成り立って現存している、らしい。

……しかし、確かにそうだ。

負けっぱなしで引き下がるようなら、それは理紗ではない。

どこまでも意地っ張りで強がり負けず嫌いであれば、俺の幼馴染みの理紗じゃない。

格段に嵩の減った山の上から一枚を拾い上げ、山札から引いたカードが好カードだった時のギャンブラーみたいに、理紗は不敵に口元を吊り上げて俺を見た。自慢げに、心なし胸を張っているようにも見える。手にした書類を俺の鼻先に押し付けて、

「それと、これ。もう一つの目的、よく見てみなさい」

見えん。もう少し離せ。

要求通り書類を引き下げる。俺はその文字を上から丁寧に読み上

げてみた。

「創設祭、舞台有志進行に基づくプログラム製作と――」

そこまで読んで理解した。

そういうことか。

本当に抜け目のない奴だ。

「――最後の詰めって奴ね。これが最後の問題だったんだけど、思ったよりあっさりクリア出来て良かったわ」

確かに、この過程を省いては何事も為し得る事がなかった。

今日帰ったのは鈴童に取って大きな失態になったな。

考えても見ろ。生徒会はあくまで生徒会執行部だ。創設祭についての最大権力を保有している機関は、期間限定で発足する創設祭執行委員会である。だからこそ、有志舞台のプログラム案をこそ生徒会から提出はするが最終決定は執行委員が行うのだ。

その際に一つだけ、こちらでその存在の有無を決定出来る事項がある。

鈴童なら間違いなく、その欄を空白にして提出していたはずだ。

「さて、目的は果たせたし、これ、片付けちゃいましょ」

につ、と微笑んでその一枚を拝借し――今更その程度の不正行為を咎めようとは思わない。というか、これを提出する権利は俺たちにだってあるだろう――残った書類の平積みと布団のように叩く。最終下校まで残り三十分余り。これなら十分済ませられる。

かちかち、とシャーペンの芯を押し出す音がする。

理紗は書面に目を落としつつ、しかしその顔はやけに怪訝な面持ちをしていた。

「ねえ、何か気にならない？」

「何かって、何がだよ」

「……上手く行き過ぎって言うか。張り合いがないって言うか。……ううん。なんでもない。そうよね。その為にあんたを動かしてるわけだし。それが功を奏しているってことかしら。自分で立てた式とはいえ、ちよつと、この程度で解けるっていうのがちよつと

興醒めだったただだから、気にしないで」

そう言われると逆に気に掛かるのだが。

可笑しなことを言う。自分の式に絶対の自信を持っているはずの理紗が、こんなすつきりしない顔を見せるなんて。完成寸前の式を目前にして不安ではなく違和感を湛えた表情をしている。——とはいえ、それも本人が何でもないというなら、やはりそうなのだろう。数学でもそうだ。ある定理を使えば、思ってたよりあっさり証明が出来てしまったり、変数を求める方程式が思いの外単純だったりすることはよくある。だから俺は理紗の式を疑うことはしなかった。だって何もかも上手く行っているのだから、何を疑えというのだ。だが。

これは現実であって、数学ではない。

嫌な予感はそう、当たってしまうものなのだ。

けれどこの時俺達がそれに気付けなかったことも仕方のないことだろう。なぜなら理紗の式は何一つ間違えていない。完璧だったのだ。見直す必要など何もなかった。ただし、ある一点を除いて。だがそれは正直こちらの関与することではなくて——結論は変わらなくても、そこに至る過程の一部が変わっていた。それに誰が気付けるだろう。

或いは。

鈴童本人でさえ、そのことには気付いていなかったかもしれないのに。

驚くことに書類の処理が終わってしまった。最終下校を五分ほどオーバーした頃の話である。この結果における理紗の貢献度を数値化すれば、それはそれはとてもな数字になるだろう。終わってみての感想は、鈴童はいつもこんなもんを一人で片付けているのか、というものだった。助力としては微々たる物かもしれないが、理紗には俺が協力していた。それもなしに、まったくの独力で処理してしまふ鈴童は本当にとんでもない。

一息ついて天井を仰ぐ。初めて生徒会的な仕事をした気分だ。理紗は書類を纏めてクリップを付けるまでの余裕を見せている。こいつの脳はまだまだスペックを余しているらしく、むしろ、この程度のものかと拍子抜けしているようにさえ見えた。ほとほとこいつの特異性を思い知らされる。

せめて自分に出来ることは何かと考えて、手近なコーヒーマーカ―の電源をオンにした。

豆を濾している間に理紗が話しかけてくる。

「これってさ、生徒会傘下の委員会全部分の仕事よね。本来ならそれぞれに分担されるはずの仕事量が、一気にここに集まってる。正直な話、こんなものをずっと一人で処理していくなんてあたしには無理ね。いつか自分の容量をオーバーするのが目に見えるわよ」

とか言いつつも、初見でこんだけのことをやったんだ。弱気なようでそれを否定できる事実を見せ付けられていては、易々同意する気にもなれない。俺？ 俺に関して別の話だ。こんなもん、委員会一つ分だっやってられるか。

「あのね、言ったでしょ。ここにあるのは全部、ほとんどあの生徒会長が一人で済ませてるのよ。あたし達はね、証明までの過程を全部用意してもらった上で、導き出した式を解いて結論を出したに過ぎないわけ。道標と道筋が用意されていて、到達点だけ横取りしたようなもの。そんなの、何の意味もないわよ」

悔しそうに唇を噛んでいる。

こんな顔をするのは心底理紗が他者と自己との差を実感した時だけだ。生徒会業務というアウェーではあれ、その差は腹の立つほどのものだったらしい。

「いつかパンクするわよ。並みの精神じゃやってられない。そりゃあ、慣れとか能力でいくらかカバーは出来るのかもしれないけど、こんなのって、心の方が追いついていかないじゃない。どこかで破綻するし、壊れるに決まってる。もしかしたら彼女、もう極限状態なのかもしれない」

「それは……」いや、結構余裕でこなしてるんじゃないか、あいつ。「どうだろうな」

花壇の修理とか、もはや用務員の仕事みたいなことまでやってたし。

俺からはなんともコメントし難い。

しかし理紗にここまで言わせるんだ。事実は何よりの武器となる。確固たる現実を自分の身で体感してしまった以上、理紗はそれを否定する術を持たない。こいつは式娘だ。事実よりも信用できるものは他にない。たとえそれがどんな信じ難いものでも、自分で実感したことを否定することはないのだ。

「よかった、あたしが生徒会長じゃなくて」

「なんだよそれ」

「まあ、あたしの場合は臆面なく手伝わってもらわよ。ていうか筋立ててこの仕事全部、本来の場所に返すわよ。なんで生徒会が風紀委員の校内警備状態なんてプランしなきゃ行けないのよ。バカじゃないの」

散々な言い様だった。確かにその通りなのだが。

「そこがおまえと鈴童との違いだよ」

「他はいつしよみたいな言い方は止めてよね」

拗ねた口調だ。それは自分でもわかっていているということだろう。

この二人が少なからず似ているということを。高いところにいる奴にはわからないものなのだ。自分が高い位置にいるなら、下に降りてくれれば済む話だと。下から上へは行けなくても、上から下へは行けるのだから。

理紗と鈴童の一番大きな違いは、その事実を知っているか知らないかにあるのだと俺は思う。

「存在式が根底で大きく異なるわよ。説明して欲しいの？ お望みならあたしは一晩中証明を聞かせてあげることも辞さないわよ。どうなの？」

「遠慮しとくよ」

明日も早朝に登校せにやなんのでな。

「そう。だったら軽はずみな発言は謹んでよね」
気を付けるよ。

コーヒーの出来上がるアラームが響く。甲高い音だ。香ばしい豆の匂いが室内に漂う。

カップを二つ——ここを利用する人間は二人だけなのに、しかも最近まで一人だったのにやたらと数がある——取り出して、褐色の液体を注いだ。理紗のカップの横にはミルクとスティックシュガーを四つずつ添えてやる。やたらと甘党なのだ、こいつは。

頭を使うと糖分が不足する。

常に物事を式として捉えて思考する自分にはこれぐらいが丁度いいのだと、理紗は言っていた。

褐色がかなり白よりの変色を遂げたカップを理紗の前に置いて、

「静歌あ、またこんな時間まで残ってるの？」

何の予兆もなく扉が開かれた。

鈴童先生の突然の来訪である。

そういえば最終下校を過ぎていることをすっかり忘れていた。コーヒーとか淹れてる場合ではない。本来なら叩き出されてしかるべきだ。そもそも顧問同伴ですらなかったし。ここまで何も言われなかったのが幸運か。

先生は俺達二人を見るや、夢で出逢った誰かを偶然見かけたみたいにきよとし、ここが生徒会室であるかを疑うように周囲を見回す。どうやら彼女の空間認識の結果は、正常にこの場所がどこであるかを判別したらしい。状況の特質さに直ぐ気が付く。

「あ、あれ、あなた達こんな時間まで何してるの？ 静歌は？」

「鈴童なら帰りましたよ。疲れてるそうです」

「そうなの？ へえ……そう」

「どうかしましたか？」

自分がどつきりに掛けられていることを疑ってでもいるのか。まだいるはずもない妹を部屋の中に探している。きよるきよると動く目が止まる気配を見せない。俺はそんなに妙なことを言っただろうか。

鈴童先生は、すると部屋の中に入ってきて近くの本類を一枚手に取る。丁度理紗が仕上げた奴だ。

その間に理紗は先刻拝借した書類をこそつと鞆の中に隠したりしていたのだが、

「これ……あなた達で済ませてくれたの？」

「はい。これ全部あたしがやりましたよ、先生」

全部じゃない。……確かに全部みたいなものだけど。

何でそこまで堂々と自分の功績に胸を張れるのだろう。文字通り盗人猛々しい。

「どうかしたんですか、先生」

どうにも腑に落ちない表情を変えようとしない先生に俺が問う。
「ううん。なんていうか、意外なのよ。あの子がこんなに仕事を残して帰るなんて、いつもならないことだから。あ、時間とか仕事量の問題は別ね。その日の課題を次の日に持ち越すことが、あの子ど

うしても嫌いだから。そんなに疲れてたのかな」

右斜め上に視線を向けて、右手の人差し指の先を唇に当てている。無意識でそんなポーシングを取っているのかこの人は。御伽の国の住人かつて。それはともかく。その発言には俺も同意させて貰う。鈴童が中途半端に仕事を残して帰宅したことは、この二週間なかった気がする。

少なくとも学校に置いていくことはなかったはずだ。

これだけの量なのだから、まあ、無理もないことなのかもしれないが。

そこで違和感を覚える。しかしそれが何であるのか、正体までははっきりと掴めない。答えを発見したのは、同じことを疑問に思ったのか理紗だった。積み上げた書類の真ん中辺りから一枚を抜き取って内容を吟味している。

「今日のつていうか、これに関しては日付が四日も前のよ。別に、今の段階で片付いてれば問題は何もないけど、その話だとちよつと矛盾してるわね。……あ、これとかもう先週のよ。結構溜め込んだのね。それでこの量なんだ」

色々なことに納得が行った。

本来なら執行部の管轄外である業務が集まってきているとはいえ、この量は確かに多過ぎる。今日一日だけじゃなかったんだ。先週からの分が募り募ってこの山を築き上げている。それならこの量にこそ納得は行くが、それだと無視できない問題が発生するのだ。

鈴童が一週間もこれらをほったらかしていた。それが異常な気がした。

……まあ、先入観とかもあるしな。

俺や先生がそう思っているだけで実際、鈴童のペースがこれくらいだということかもしれない。なんにしる書類は全て期日以内なのだから。これが期日を過ぎた書類なら、いよいよ驚天動地なのだろうけれど。これだけだと流石にまだ異常と呼ぶには早いか。

「あ、それよりもあなた達、もう下校時間過ぎてるよ。また静歌が

残業してるのかと思ってたから放っておいたけど、ほら早く帰りなさい」

言われなくても、という具合に理紗は鞆を肩に掛ける。湯気の立ち上るカップの中身を一瞬で飲み干した。こいつの喉は何だ。どうなってるやがるんだろ。疑問に思いつつ俺は自分の分には口をつけて一口だけ喉に流す。

「それじゃあ、あたし達はこれで。さよなら、先生」

「あ、はい、さよなら」

初見の印象が随分悪かったのか、礼儀正しい理紗に戸惑っているようだ。まあ、あの時と今ではモードも変わる。理紗にとって人格の切り替えはお手の物だ。

軽く頭を下げてから理紗は早々と部屋を出て行く。その際にアイコンタクトで俺にも退室を促してきた。言われなくてもだ。これ以上はここに残る意味がない。腹も減ったし疲れたし帰って寝よう。

理紗に倣って俺も先生に挨拶し、そこで思い出した。この部屋の鍵は確か鈴童先生に渡しとくんだったけか。ポケットの中から冷えた鉄片を取り出した。先生に手渡す。その際、既に室内に残されたのが二人だけになったこのタイミングで、

「変わってるわね。あなた」

「俺がですか？」

理紗じゃなくて、俺が？ 悪い冗談だろ。

俺は至って通常だ。

「だって、ここまで静歌に関わろうとする子なんていないから。それに、あの子が信頼してる子も」

「信頼なんてされてないですよ」

間違っても俺は、そういうのではない。

信頼なんて有り得ないだろう。鈴童に取って俺はいつもどおり跳ね除ける対象でしかなく、今は普通よりもしつこいそれではないのだ。だから的外れもいいところだ。信頼なんて微塵もありはしない。

「そう。なんか難しいな。でも、あの子が少なからず気を許してる部分があるのは確かよ。だって、そうじゃないとここの鍵を預けたりしないもの。こそこそあなた達の練習してるところを見に行ったりもしない。それって、やっぱり少しは気になってるってことじゃないのかしら」

「そうだと、いいんですけどね」

俺は何とかして邪魔者を排除する尻尾を掴もうとしているのだと思っていたのだが。

「でもね」

少し悲しそうに、鈴童静歌の姉は付け加える。

ぽつりと落ちる言葉は夜更け前に落ちていた雪みたいに、すぐに溶けてなくなった。

「それはあなたと、彼女との信頼とは違う。本当に、ただ近くにあるだけの関係でしかない」

「えっと……」俺と、理紗とのことを言っているのか。「そりゃあ、そうですよ」

だって理紗と俺は何十年も幼馴染みをやってる腐れ縁なのだ。

二三週間ほどの関わりしか持っていない鈴童との関係とは異なっていて当然だろう。過ごした時間の密度が違えば築かれる関係も違うのは当然だ。それは別に俺と理紗の関係を誇示している訳ではない。

客観的に仕方のない事実なのだ。

でも、だから。と先生は言った。

「羨ましいんでしょうね。切っても切れない絆っていうの、そういうの。それがあの子には眩しいんだよ。それだけは、何でも持つてるあの子が持っていないものだから」

馬鹿みたいに時の経過を経て腐ってしまっただけの縁でしかない。そんな、誇れるものでもないのだが。だって保とうとして保ったわけでもない。たまたま長続きた縁がいつの間にか切り離せない、今の一部になってというだけのことだ。

俺はふと思った。

しきりに鈴童が口にしていた言葉。貴方では、何一つ私に勝てやしない。それは、そういうことなのか。先生の言うことが本当なら、それを認めたくないからあんなことを何度も負け惜しみみたいに繰り返していたのか。そんなものは欲しくない。自分には必要のないものだから悔しくないと、自分が負けている部分なんかではないと――いつもみたいに強がって言っていたのだろうか。

まさかな。

考え過ぎだ。鈴童の頭の中は俺が想像できるほど単純ではない。

「なにしてんのよ早く来なさい！ 置いて帰るわよー！」

話し過ぎたか、それとも俺がついて来ているとも思っ歩いてたら誰もいなかった、とかそんなのか。理紗は既に廊下の曲がり角まで到達して手を振っている。黄色のマフラーが薄暗い廊下に光る。俺は片手を挙げて直ぐに行くことを示した。

ああ。

これが、こういうことか。

鈴童先生が言ってる俺達の関係ってのはこれなんだ。この無意味に過ごした無駄な、でも無価値ではない長い時間が生み出した繋がりのことを言っているんだ。所詮時間の産物でしかないから、やっぱり我慢できるものじゃないな。

「じゃあ俺達は帰ります。……えーと、下校時間、過ぎちゃってます」

「いいよ。お咎めなし。でもね、もう夜になってから校舎に忍び込むのは止めなさい」

さすがに庇って上げられないから、と苦笑する。

……この人、知ってたのか。

自分がどれだけ危ないことを仕出かしていたのかと自覚して身震いする。もう早く帰ろう。

「ねえ。何か企んでるんでしょ、あなた達」

「……」

俺は答えないでマフラーを巻き直す。

痺れを切らしかねない理紗の靴底が刻むタップのリズムが反響していた。だから俺はその言葉を最後にそれ以上何も言わず、ただ無言で、意思だけを視線に込めて先生に答える。それがこの日この場所であつた最後の意思疎通だつた。

「だつたら、静歌のことも巻き込んで。お姉ちゃんから、お願い」

自嘲にも思える苦笑を浮かべた彼女に。

俺が返す答えなんて一つしかなかった。

言われなくなつて、そんなのは初めからそのつもりだ。

むしろ、止めると言われても止めてやるつもりはない。

21 / スリーピース

/ 4

そういえば昔、一度理紗と大喧嘩をしたことがある。

……いや、昔というにはまだそれほど時間が経っていない。早過ぎるかもしれないが前言撤回だ。三年ほど前の、まだ中学二年だった頃の話。昔というべきかどうかは、この際個人の感覚に頼ることにする。少なくとも俺は、あいつと十何年も付き合ってきた俺としては、三年なんてのは割りと最近に部類されるのだ。

壮絶な喧嘩の果てにどうにか関係を持ち直せたのだが——といっても、修復に支払った労力がないわけではない——その後変わったことと言えばなんだろう。まあ、少しばかり理紗の奴が素直になったというくらいだった。

何故今更そのようなことを思い出してみたりしたのかといえば、漠然と今の状況がその時に重なったからである。あの時もお互いの意地が衝突して、どっちもそれを曲げなかったことがいざこざに発展したのだ。だから、今と同じかどうかと言えばそれは断固として否であり、どこまで行っても似ているの範囲を出ない。

だったら結末は半分見えたみたいなものなんだろうけれど。

さて、厄介なのはそこにこじつけるまでとそれからだ。

最後の最後に一仕事、俺には残されているのだから……。などと思いつつ朝だった。早朝である。

ここ数日はこの時間の登校にももう慣れ始めていたので、そこまでの苦には感じない。生徒会室に行くと一日で復活を遂げた鈴童は先にそこにいて、昨日俺達（主に理紗）が纏めた書類に目を通していた。俺が入室するのを音で確認すると、眼鏡をずらしてこちらに

視線を向ける。書類を見ている状態から顔が動いていないので上目遣い気味だ。

鈴童は不気味なものを見る目で、まさかね、とばかりに目を背ける。

仮にも生徒会の一員である俺に早朝登校の労いもなければ時頃の挨拶もなし。どことなく気まずい沈黙が流れて、それがこのまま漂い続けるのかと思っていると意外なことに鈴童が先に口を開いた。
「これ、貴方達がやってくれたんでしょ？ 昨日、お姉ちゃんから聞いた」

「俺よりもほとんど理紗だけだな」

「見ればわかる。私が修正しないといけないのが何枚があるから、それが貴方でしょ？」

酷い。実に酷い。そして反発できない自分が悲しかった。

シャーペンをくるくると回しながらさらに鈴童が続ける。

「どういうつもりよ。こんなことして。貴方達がこんなことする理由なんてないのに」

「そんなことないだろ。俺達だって生徒会だ」

「そうだったかしら。……まあ、昨日のことは私の失態だから、何も言わないけど」

遠回しに礼も言わないと言ってるようなものだ。別に感謝されてくたしたわけではないが、それはそれで何だか寂しい気もする。もともと、こんなことで現状を打破できるだなんて思っちゃいない。これもまだ仕込みの段階だ。どこまで煮込めばいいのか、先の見えなさ過ぎる仕込みだけだ。

「これからどうする気？ オーディションも終わって、もう貴方達に手なんて残ってないと思うけど。創設祭は諦めて、またの機会でも窺う方針に切り替えたの？」

「さあな。まだ何とも言えねえよ。まずはメンバー集めからだしな」
「そう。だったら早く見付かるといいわね、いいベースリストが」

自分が参加するつもりは、微塵にも存在していないらしい。

そつだろつな。そりゃそつだ。

これくらいで折れてくれては張り合いがない。今までの時間が全部無駄になる。切り出すなら今だろつか。昨日のことで恩を売って、そこからもう一度勝負を持ちかけるといふのはどうだ。下手な交渉をしてそれが破綻すれば、今までの全部無駄になり兼ねないが。さてどうするか。

鈴童に交渉を持ちかける。

今はまだ早いと保留する。

重大な分岐点だった。

いくら日があるとは言え、いくら式がほとんど成立した後だとは言え、最終的な問題はそこに終着するのだ。ベーストの不在を解消しなければ事は解決しない。そしておそらく誰よりも適任であるのは鈴童だ。今更代わりなんて見つかるはずなんてなかった。初めからこいつを引き入れる算段で話を進めていたんだからな。

鈴童はもう話を切り上げて資料の確認に戻っている。余念がないと言つかなんと言つか、一枚にかけている時間がやたらと長い。真剣なところ申し訳ないが、作業は一度中断して貰う。黙っていては埒が明かないのだ。こちらで口火を切っておかないと間に合わないかもしれない。

そつ決意して、俺は鈴童に呼び掛けた。直ぐに、だがゆつくりと顔を上げる。

「俺は、俺達は絶対におまえから離れていかない。約束する、絶対だ」

口にした本人が驚いていた。何で今ここでそんな誓いを明言したのか自分がわからない。違つだろ。今必要なのはそんなことじゃないというのに。——と、冷静に否定する理性は偽物だった。目的は違つても、伝えたい気持ちはそれで、本物の気持ちだったのだから。

俺がどうして鈴童に固執していたのか、考えてみなくても少しだけわかつた気がする。ベースの腕だとか作曲技術だとか立場的有利

だとかは一切関係なく、むしろそんなことはどうだっていい、バンドの話ではないんだ。ただ知って欲しかった。一人でいることが悲しいことだと、誰かといえることはこんなにも楽なことなんだと。誰だって知ってる当たり前を知らない、完全無欠なこいつに教えてやりたかった。

そうだ。

昔の幼馴染みに似ている一人ぼっちを見て、放っておけなかった。それだけのことだ。一人だけの生徒会、一人だけの世界、そんな鈴童の箱庭があまりに寂しいと思えたから気になったのだろう。奇しくもそれが、自分の好きな誰かの過去に酷く類似していたから余計に。

本当は知っているかもしれない。きっと気付いているだろう。だって鈴童は笑っていた。声は歌声で表情に関しては見てさえいないから何もわからないが、しかし間違いなく笑っていたはずだ。理紗の持ってきたあの音の中にいる鈴童は俺の中のどこにもいない鈴童で、楽しそうに笑っていた。

「……急にどうしたのよ。まだそんなこと言って、私を引き込むつもりなんですか」

「おまえが本当に嫌ならもう諦めるさ。でも違うだろ」

「違う。私は貴方達となんていっしょにいられない。一度身をもって体感したんだからわかるはずじゃない。これから何度だって私は貴方突き放す。いっしょになんていれるわけない」

「じゃあ何回でも戻ってくるって、約束する。あれぐらいのこと、なんでもねえよ」

実際はかなり凹まされたが関係ない。俺だけなら鈴童を見失ってしまうかもしれないが幸いにも俺は一人じゃない。三人いる。鈴童と同じところにいられる、理紗がいるんだ。誰か一人が駄目でも他の誰かが何とか出来る。ほら、問題なんてどこにもないじゃないか。「詭弁……にもなっていない」

そりゃそうだ。

思わず同意してしまうくらい、俺の思考はおめでたい前向きシンキングだった。でもいいだろう。今必要なのは詭弁でも理屈でもないのだ。

「二人とも離れていったら？ 二人一緒に戻ってきてくれるの？ 三人なんて、そんなのは別に関係ない。今までも失った物の数の方がずっと多いんだから」

鈴童は冷静な鉄面皮を剥がそうとしないで、あくまでも平静を装っている。いつの間にかシャーペンを握っていることには気付いているだろうか。この様子だと気付いていないのだろうか。よく見ると小刻みに肩が震えている。

「もう怖いから嫌なのよ。みんなどこかに行くのがわたしは怖い。自分が普通じゃないって、思い知らされるから」

喪失感が恐ろしいから、何かが自分の一部になることを自ら否定する。そのやり口はよく知ってる。同じことをやらかしてる奴が近くにいたからだ。けれどそれは逃避の選択でしかない。追いかけるんじゃなく跳ね除けるなら確かに裏切られることも傷付けられることもないだろう。だがそうして得られるのは無害な空虚だけだ。一人ぼっちが悲しいことを忘れさせる麻酔にしかない。

そして鈴童の一番の間違ひは、それがいつしか逆転していたことだろう。失くすのが怖いから手に入れる前に捨てる。つまり外部からの傷を拒否して、自傷に切り替えているだけだ。結果は変わらないうとこいつはきっと知らない。酷く歪で脆く不安定な在り方だ。

俺は言った。

「普通じゃない奴なら俺も知ってる。俺はそいつとかこれ十年は馬鹿みたいにいっしょにいるんだ。今更一人増えたってそれは変わらないよ」

離れた心はまた寄り添えとも知っている。

「信用できない」

「信用なんてしなくていい。でも俺は勝手にそう信じるよ」

「バカじゃないの」

「バカでいいさ。それが最善なら何よりだ——だから、もう一回勝負しろ。今度は三人でだ」

「……だから、ってなに。可らしいじゃない」

そいつは俺のつつこみだ。既出の再利用は禁止させて頂きたい。

「それで証明してやる。絶対にどれだけ離れてもついていく。絶対に見失ったりしない——今度はもう、絶対に負けない」

三人寄れば文殊の知恵だ。古来より人間は『三』という数字を神格化している。だからバンドも三人揃えば何だって出来る。一人だけ実力が劣っていても付いていける。他の二人がその一人を引上げられるからだ。

理紗に、鈴童に、俺が揃って初めて完成する。

それはきつと、最高のスリーピースになるはずだ。

……。

たぶん。

「とにかく、もう一回だけで、今度は理紗も混ぜて三人で演ろう。そしたらおまえだって——」

「うるさい」

鈴童が、ここにきて語句を強める。

強い拒絶の色が瞳に滲んでいた。冷え切った声色で突っ撥ねられる。正面から睨みつけられて、俺はそれ以上何も言えなかった。我ながら情けないと思う。だがこればかりはどうしようもないのだ。怖いわけではない。ただ鈴童の訴えるような目があまりにも真摯だったからそれを無視してまで何か言おうと思えなかったのだ。

また室内に沈黙が戻ってくる。

外の風が窓を叩き付ける音がうるさいくらいに静かだ。時計の針の音も、下手をすればお互いの心音も聞こえてきそうくらいである。何か言わないと。今度は俺の番だ。何でもいいから鈴童の否定を否定し返さないと、ここで終わってしまったらもう次に繋げない気がする。

しかしなんとさえいい。

何を言って鈴童をその気にさせればいい。

解らない。

時間だけがちくたく進んでいる。ああ、もう。こんチクシヨウ。なんでもいい。なんか言え。

「俺……は——」

他に言い様があつたとは思うのだが、焦っていたとしか思えない。気付けば俺は次のように叫んでいた。

「俺は——おまえが好きなんだよッ！」

「……………」

あ。と間の抜けた声が出ていたかもしれない。

自分の発言が取り消せるなら直ぐにそうしたいのだが、ここで下手に撤回しようものなら状況は悪化するばかりだ。ならもう開き直るしかないだろう。開き直って突き進むしかない。ここまでしたんだ。もうこれ以上破綻することが怖くないなら前進あるのみだ。

チキンレースはもう止めた。

嘘じゃない。俺が鈴童を好きだというのは嘘なんかじゃない。美人だし歌うまいし性格がいいのかは知らんが才色兼備で成績も優秀で、ほら見る嫌いになるところなんてないだろ。そんな女の子とバンドが組めたらって、なんで思っちゃいけないんだ。男として当然じゃねえか！

もう最早自分でも收拾の付かない思考が夜空の天体みたいに廻っていた。

混乱の極致とは今の俺を以って言い得るのだろう。

好きでいい。間違いなんかじゃない。

だってこいつは、俺の好きなあいつに似てるんだから。

「何度だって頼んでやる！ ああ、百一回目とかそんなもんで済むと思うなよ！」

聞いている鈴童の沈黙が物凄く痛かった。

だから痛みを忘れる為に走り続けるしかない。

止まってしまったらもう吹っ切れそうにないから。

「何万回でも言うさ！俺らはおまえが好きだからいつしよにバンドが組みたい！文句あるかよ！」

「……………うるさい、黙れ」

温まった、どころか沸騰した精神を一気に冷ます一言だった。

極寒の、氷点下の、マイナス百度の視線が向けられていた。もしかしたらこれは殺意だろうか。

本気で恐ろしかったから止まってしまう。そうして襲ってくる激しい後悔と羞恥に今度は顔が沸騰しそうになる。どうするんだよこの状況。取り返しが付かないくらい終わっちまったぞ、これどう見ても。

振り切った意識が真っ白に燃え尽きた。

俺はこの気不味さをどうにかすることよりも、そして鈴童を説得することも忘れて、自らの保身だけを考える。既にバンド云々の問題では収まらない。この状況、この感じ、これは命に関わる。

張り詰めた緊張の中で。

不意に、鈴童が視線を外した。そうして。

「……………うるさい。恥ずかしいからもう止めて」

ぼつり、初雪みたいな言葉が溶ける。

「どうせ、何て言っても聞く気なんてないんでしょ。もういいから、わかったから」

わかったとは、どういうことなのか。

鈴童は徐に鞆の中に手を入れて中から財布を取り出し、机の上に置いた。無論目的があって取り出したのわけだが、俺の硬直した視線に気付いて一度それを中断したのだろう。咳払いをして、また睨まれる。しかしその目はさっきまでの冷え切った視線を放つことが出来てない。人間らしい熱を持った眼差しが、思えば初めて向けられた気がする。

目が合ったのもほんの僅かな間だけだ。つい、と顔を明後日の方向に向けて、横目にもこちらを見ようとしない。そんな鈴童が聞き取りずらいくらいに細々とした口調で言う。

「……考えて上げてもいい」

リアクションできない俺は言葉に詰まる。

口を咂然として開けたまま閉口する。

鈴童はその姿に憤慨したらしく、耳まで真っ赤にして今度は怒声を張り上げた。

「もう一回だけなら、勝負して上げること、考えてもいいって言うたんです！」

身を乗り出す際に地震が起きたのかと思った。それぐらいに勢いを付けて体を突き出してきたのだ。手を突かれた机が震度七強くらいで揺れる。鼻の先がぶつかり合う程の間近に迫った鈴童の目は、怒っているのか呆れているのか、もうどんな感情に由来しているのかわからない。

一つだけわかることがある。

鈴童もまた俺と同じくらいに、このどうしようもない状況に開き直ってしまったのだろう。

それでも尚、考えてやる、と曖昧な肯定の言葉を選んだのはさすがというべきか。

向き合っていたのは実質一秒ほどもなかったと思う。俺には苦痛でしかない一瞬だったのでやたらと長く感じられたが、実際はとめどなく聞こえていた自分の心音を一度跨ぐ程度の間でしかない。

憤然として傲然と、鈴童は長髪を翻す。どこかへ行くのだろうか。俺の後ろの扉へ向っていた。

「あの……鈴童さん、どちらへ？」

「コーヒーを買いに行くだけです。この部屋暖房ないから、寒いのだ」

「コーヒーなら買いに行かなくても淹れられるだろ、ここ」

「ああ、もう、うるさいッ。ほつといてよ！」

地鳴りと地響きが同時に起こる。

校舎が倒壊するのではないかと心配になるほどでもない勢いで扉を閉めるものだから、反射的に俺の背筋は強張った。荒れまく

りだ。鈴童が滅茶苦茶荒れていた。人間とはあそこまで見事に壊れることが出来るのだと、アルコールを知らない十七の俺は知る。

そうして一人残された。

なんだったのだろうか結局、と先刻までのそれを咀嚼する。言葉の綾とでも言うべきか、しかしそれでも俺は真実鈴童に対して好きなどと言ってしまった訳だ。それに対する鈴童の反応はどうだったか。激怒して部屋を飛び出してしまった。

けれど。

約束はした。

再戦の確かな確約ではないにしろ、一方的に拒絶するだけの今までと比べれば大きな進歩と言える。

これは成功したと言ってもいいんじゃないか。いや、それに際して俺が失ったものは確かに大きいけれど。それでも、確かに。まだ先に繋がる何かがあったのだ。ならばこれはやはり、先の選択が正しかったことを意味するだろう。

やれやれだ。ここのなら、もう一息ついてもいい頃合だろう。

峠は越えた。果たしてその峠の先に何が待っているのかはまだわからないが。鈴童が僅かにでも心を開いてくれたと思うと大躍進だ。自分を称賛してやりたい。よくやったよ、俺。頑張ったじゃないか。大きく息を吐く。溜息なのか深呼吸なのか或いは安息なのかはわからない。しかし小さな達成感が胸の中で少しだけ誇らしかった。いやいや、まだ役割は残っているのだ。鈴童ともう一度セッションする為にはその前に俺が個人的に何か対決で勝利しなければならぬのだから。それが何になるかは今のところ不明である。

とはいえ、俺もここらで一休みだ。

鈴童がそうしたように、コーヒーでも啜って落ち着こう。

立ち上がってコーヒーマーカーに向う。と、その途中であるものが目に留まった。それは先程鈴童がバッグから取り出して放置した財布である。中身を掠めようとかは一切考えていない。ただ違和感があったのだ。だから気に留まって、それが窓にこべり付く霜みた

いに気持ち悪かった。

考えれば簡単にわかることだろ。

単に鈴童が持つて行くのを忘れただけだ。自販機に飲み物を買に行くと言言して、そして財布を忘れたのだ。ないこともない。あんな訳の解らない状況だったのだから、誰がどんなぼかをして俺は驚かないだろう。しかし今回は例外だった。だって鈴童がそれをしたのだ。あの、鈴童静歌が。

違和感は募り募ってそして——確かな、嫌な予感に変わった。

不意に踵を返す。鈴童の後を追おうなどと、どうして思ってしまったのだろっ。

足取りは少しずつ速くなる。そうなることに嫌な予感は確実な悪魔のイメージになって頭を侵食していった。——今までだって可笑しなことは色々あったのだ。それらが積み重なって今、大きな不安に姿を変えている。

考えてもみる。

目の前の課題が片付いて落ち着いている今だから俺にもわかる。

鈴童が何もない場所で躓いたりするか。自販機へ行くのに財布を忘れるか。業務を他人に任せて先に帰るか。思い出すのはいつかの昼休み。練習中に旧音楽室を訪れてきた鈴童の、退室後の奇妙な行動を思い出す。背中を預けてへたり込んでいたあの姿。あれは聞き耳を立てていたのではなくて、本当は——

走り出す勢いで扉を開ける。

廊下を走り、校舎の外へ向う。自販機までの最短のルートを辿れば追いつけるはずだ。もしかしたら引き返してきた鈴童と鉢合わせるかもしれない。そう思いながら走り抜け、曲がり角を折れたところで。

冷たいリノリウムの廊下に座り込む、鈴童静歌を見付けた。

眠るように目を閉じて、荒い呼吸は熱を運び、冷え切った空気を白濁させていた。

目に見える過呼吸の証として鈴童の肩と胸が上下している。熱があるのは明らかだ。どうして気付けなかったのだろう、そう思うほどに顔色が悪い。額には汗まで滲んでいる。この寒い冬の真ん中で、あのプライドの高い鈴童が廊下に座り込んでいるのだ。

兆候はいくらでも見せていたのに。

自分のことで手一杯だったから何一つ気付くことが出来なかった。それは俺も鈴童も同じだ。互いが互いの抱えているものを見過ごしていた。俺や理紗の思惑を鈴童が見逃していたように、俺もまた、鈴童の不調を発見出来ずにいたのだ。

不自然なことなんてなにもない。むしろこれで当然である。

いくら鈴童が完璧だとか超人だとか怪物染みているだとか言われても、こいつもやはり一人の人間だ。十七歳の、もしくは十六歳の女の子なんだ。どれだけ意地っ張りでも、体がそれについていけないなら壊れるのは当然といえる。

強固な内面に反して、その体は脆く、オーバーワークに悲鳴を上げ続けていたということだろう。

俺だって自分で体感したんじゃないか。生徒会の業務を、全ての委員会の業務を一点に集められる苦勞を。そしてそれを一人で処理し続けてきたのは鈴童だ。今まで平然としていた方が間違っている。絶対に可笑しい。

目の前の現実是否定したくても、そんな論理に結び付く思考が頑

固に肯定していた。

こんなときばかり。

変に頭回してんじゃねえよ。

本能のまま動いていたらどれだけよかっただろう。僅かでも遅れて間に合わなかったら、自分で自分が許せなくなる。俺が鈴童を助け起こしたのは、だってそんな今更理解したって何の意味もない思考の後だったのだから。

「……あ」

零れる吐息のような呟きは、きつとサーモグラフィで表したなら真っ赤な色を帯びていたことだろう。手の甲に掛かったそれは皮膚を蒸発させてしまいそうなくらいに熱かった。息だけじゃない。背中で感じる鈴童の体、その全身が熱した鉄のように熱い。人間がまともに活動する為には、これは明らかに加熱され過ぎている。

鈴童の体はびっくりするぐらいに軽かった。

普段の尊大な立ち振る舞いとギャップもあるのだろう。しかし実際はこうだ。身長も体重も並み、体重に関しては平均よりも軽いかもしれない。なにせ鈴童はスタイルがいい。制服の上からでも見てわかる。彼女を背負った状態でそんなことを考えていると、どこか犯罪性を感じるが。

俺もそんな風に冗談で自分を冷やかしていないと、やってられない。

「なに……してるのよ」

か細い癖にまだ敵意を孕んでいやがる。いい加減にしろ。

病人なんだから大人しくしてろよ、おまえは。

「……コーヒー買いに行ったんだろ。財布、忘れてたぞ」

「ああ……そっか、そうなんだ」

遠い声は今がどんな状況かを理解できていないみたいだった。

わからないことはない。自分ではまだまだ行けると思っている、体はそうでなく、意思に反して強制的に活動を止めてしまうことがある。そうなってしまうと自分では何がどうなっているのかわから

なくなるのだ。まるで夢の中にいるような、現実から隔離された気分に陥ってしまう。

鈴童もそうなのだろうか。

彼女は今夢見心地でいるのだろうか。

だとしたら、それはせめて優しい夢であって欲しい。まあ、対立関係の男におぶられてる夢なんてのが、年頃の女子高生的にはどんな夢なのかは知らないし考えたくないのだけど。

「いいや、それ、あげる……」

「いや、要らないし。貰えない」

こいつ。

本気で頭沸いてるんじゃないのか。

鈴童の発言と荒れる呼吸が足取りを焦らせた。

「鈴童、力入るか？　ちよつと走るから、しつかりしがみ付いててくれ」

「なにそれ……えっち」

「……………ッ!？」

おいおい待てよ。

こんな時におまえがそんなこというなよ。そこは罵倒してくれていい場面だろ。いつもの覇気が感じられない声で、苦笑混じりな口調で言われたら——しかも素直に抱き付かれたら、どうにかなっちゃう！　おまえ自分の体型わかってんのかよ。

頭に沸き立つ邪念の一つ一つを、百八を優に超えてしまいそうな煩惱の全てを振り切るようにただ走った。現役の生徒会長様をその背に乗せ、廊下は走ってはいけないなんて小学生でも知っているルールを全霊で無視する。向う先はどこだ。自販機。馬鹿言え保健室に決まってるんだろ。

この思惑は思いの外功を奏する結果になった。

普段から人を背中に乗せて走るなんてしないから、結構神経を使うのだ。それに何よりも疲れる。ちよこつと走っただけで息が上がっりそう。普段使わない脚の筋肉を使っているか、それとも使い方

が普段と違うのかはわからない。とにかく大変だ。

そうか知らなかった。

人を、誰かを背負うってことが、こんなにも大変でしんどいことなんだって――。

鈴童は生徒会長として、一人や二人じゃない、この学校の全生徒を背負っている。俺にとっちゃ一人だけでも息が上がるのに、ほんとはよくやるよ。信じられない。その上強がって、意地張って、笑ってやがったのか。誰だよ、そんなことも知らないで「バンドしようぜっ」とか気楽に誘ってやがるのは。何で何もわからないんだ。自分のことしか見えてない。そんな奴が間違っても――傍にいないっていい訳ねえだろ。

「背中…… おおきいね」

子供みたいなことを言う。別に俺は背筋を鍛えているわけでもないし、体格も標準だ。

「安心する…… なんだか、すごく楽」

その言葉を聞いて、何故だろう、少しだけ嬉しかった。

別に自分に宛てられた賛美でないことはわかっていたし、もしそうであっても嬉しくはないだろう。単に、鈴童がわかってくれたことが嬉しかったのだ。誰かに寄り掛かることが楽なことなのだと。今、疲れ切ってこんなになっっている今でも、それがわかってくれるのが嬉しい。自然と体が軽くなる。もつと速く、走らないと。

「頼って、よかったのかな、わたしは」

俺は何も言わない。

言えないのだ。

言葉を吐こうとしたらもう、ぜえぜえ言ってまともな人語に変換することが出来ない気がする。こんなことなら日頃からランニングでも筋トレでもしとけばよかった。後悔先に立たずとはこのことだ。「一人でできることは、えらいことだと思ってた。なんでも、一人でできればほめてもらえたから。でも大人になったら、それが寂しいことなんだって、わかった。でもそう思ったときはもう、わたし

は、一人だったんだ。ねえ、わたし、どこで間違えちゃったのかな」
「知らねえよ、そんなこと。」

「寂しいって、疲れたって、言えばよかったのかな。そうしたらみんな助けてくれた？ 一人ぼっちは嫌だって、泣いたら誰かがそばにいてくれた？ そんなことないって、決め付けてた。だからせめて強くありたかった。誰にも笑われないように、泣かないって決めた。一人で、全部一人でできるから。わたしは一人でいいんだって、自分に言い聞かせてた」

「……」

「ほんとに寂しくても、そうじゃない振りをした。一人でいるのが好きだって思ったら、少しだけ楽だったんだ。でもそれは楽な以上に、悲しかった。キレイに生きていこうなんて思ってたけど、一人で泣くのはみつともなくて、余計に悲しくなるから、泣かないようにって思ってたんだ」

「なんでだよ……おまえ」

「だからほんとにね、嬉しかったんだ。いっしょにいてくれる、誰かが現れて。でもわたし、怖がりだから。怖がり寂しがりだから昔ね、いつかいバンド組んでたんだ、わたしも。結局、壊れちゃったけど。……また、一人になるって思ったら、怖いからもう嫌だった。暖かい場所を知ってしまったら、また一人になったときの寒さに耐えられないから」

「だから……、なんで」

「嗚呼、悲しいな。わたし、なんで素直じゃないんだろ」

「——なんでおまえは、もっと早くそれが言えないんだよ！」

一人が寂しいって。

それが悲しいって。

知ってるんだろおまえは。

だったら初めから強がったりするなよ。

「わからねえよ、俺、おまえみたいに頭がいいわけじゃないんだから。言ってくれないと、わからねえだよ！」

切らした息も血を吐くくらいの覚悟で、肺が引き千切れそうな気分で叫んでいた。

「嘘だ。嘘だよ」

それを、鈴童は笑って否定する。

「だって、わたしが何も言わなくても、いっしょにいてくれたじゃない」

そんなこと。

俺が、勝手にしていたことだ。

俺が、理紗の為にしていたことだ。理紗の為に、俺の為に。自分勝手な理由で近くにいて、それさえ、こいつには重荷にしかなくなっていなかった。無駄な負荷を増やしていただけなのだ。それをどうしてこいつは、こんなに幸せそうに口にするのだろう。

理紗と似ているとかじゃない。

これが本音なら、鈴童は俺が思っているよりもずっと小さい。小さくて儚い。だからこそ一人でも光っていられるように、綺麗でいられるように強がっていたんだ。そうしていないと消えてしまいそうだったから。何もわかっていなかったのは俺の方だ。勝手に自分ならわかってやれる気になっていた。思い上がりも甚だしい。

「ねえ、一つだけ言わせて」

新館の二階に駆け上がる。保健室はもう直ぐそこだ。

息が上がり切っていたので、これ以上はもう鈴童に返事をしてやれる自信はない。だから最後の一言だけは鈴童からの一方通行になる。俺はそれを聞き逃さないように、走りながらも耳を澄ませた。無言で先を促す。

「ありがとう。こんなわたしと、いっしょにいてくれて」

熱に浮かされて、気がふれていたんだろう。

こんなにも素直な言葉を、鈴童が言うはずがない。

「こんなわたしのこと、嘘でも好きだなんて言ってくれて——ありがとう」

23 / her sister (前書き)

/

25時の電話がバイブを鳴らす
眠い目擦って確かめた着信の名前
二時間も前にメールを止めた君

眠れないからおどける声
冗談じゃないと笑い合って

とめどないイマに
だけど終わりのある夜が
静かに流れて消えていく
月明かりさえ眩しい暗い夜
朝日みたいな笑顔を思い出した

放課後になって保健室にやってくると、しかしそこには今朝方拝見した保健室の先生はいなかった。

代わりと言ってはあれだが、そこにいたのは鈴童先生である。別に白衣を着たりカルテを弄っていたりはしていないので、保険室を脱兎してしまっただけではないのだと思うが。しかしどこにいても違和感のない人だ。音楽の先生とか、美術の先生とか、そういう芸術系の先生とか後は今みたいに保健室なんて場所も似合ってしまう。

勘違いするなよ、別に変なことなんて考えてないんだから。

余談はこれぐらいにして。

鈴童先生は俺を見るなり表情も変えないで、だからいつもみたいににこりもしない、そんな顔で立ち上がった。正直なところその拳動だけで背筋が震える。鈴童先生といえば、これまでのことから妹を溺愛していることが明らかだ。こんな状況になっしまえば、張り手も覚悟しなければなるまい。なにせ鈴童を支えていた何かを決壊させたのは間違いなく俺なのだ。

ゆっくりと立ち上がって、先生は。

こちらに向って、深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。わたし、なにも知らなくて。お姉ちゃんなのに」

「え……いや、先生」

「いいから、まずは謝らせて。わたし、君に全部丸投げにしてみたいだから」

予想外の行動にあたふたさせられる。

こんな情景は想定外だからどうしていいのかまるでわからない。普通に「いやいや気にすることはないよはっはっは」とでもいつて、その豊満な茶髪を撫でてやればよいのか。アホか。アホだよな。というか早く頭を上げてください。保健室の先生が戻られたらどうするんですか、この状況を。

「それなら大丈夫。あなたが来ると思つて、ちよつと外してもらつたから」

「ああ、そうなんですか」

見透かされてたというわけか。

腰だけを折つたまま顔を上げた先生はてろりと舌を出して悪戯に笑う。この分だと俺が挙動不審になることも先読みされていたのだろうか。案外、けろりとしてるんだなこの人。俺なんて朝からあんなことがあつたから、授業中も寝れなかつたというのに。

「そうだよな、わたしの授業もちゃんと起きてたよね」

「珍しいことみたいに言わないで下さい。ていうか、心を読まないで下さい」

「口に出てるよ。ぶつぶつって」

「マジですか!？」

ぶつぶつ、って。……出来物みたいだな。

独白が口に出るのも動揺の証なのだろう。

そう。真実俺は動揺しまくりだった。それはもう本当に。だってそうだろ、自分の所為で無遅刻無欠席（鈴童の性格から考えるに、多分）の優等生を一日保健室でサボタージュさせてしまったのだから。その姉と正面切つて向かい合つてたら緊張で心臓が爆発しそうになるのも当然というものだ。

とりあえず座つたら、と言つてくれる先生の言葉に甘えて、近くの丸椅子に腰を下ろす。

先生も今の謝罪の為だけに立ち上がってくれたらしく、もう一度着席し直した。

「静歌、過労だったんだって」

ぼつり、と直ぐにそれを教えてくれた。

過労か。そりゃあそうだろう。鈴童が倒れたと聞けば、少しでも彼女のことを知っている人間はそれを思い浮かべる。俺だってそうなのだ。これがもしも突如流行り出した風邪とか言われる方が信用ならない。働き過ぎた。生徒会職務にも労働基準法は適用されるべきなのである。

先生はカーテンの閉じたベッドの方へちらりと視線を投げた。

「わたしが気付いてればな、って思わなくもないけど。どうせ、わたしが何を言っても意味なんてないんだろうな。あの子、最近全然わたしに頼ってくれないんだ。中学生の時なんかはさ、『心配ないよ』とか『一人で大丈夫だから』っていうのが口癖みたいになってたもん」

それは本人も似たようなことを言っていた。

一人で何でも出来ると、言い聞かせていたのだと。

「後は『お姉ちゃんだあい好き』とか」

「ダウト。……それは嘘ですね」

「むむむー。……しく」

泣かんでも。

「信用ないんだね、わたし……」

何の信用なのかは知らないが、この場合どちらを信用したのかと言えは鈴童の性格である。

そんなこと言うキャラじゃないだろ。そうであって欲しい。

「だから、静歌も何も言ってくれなかったのかな」

「えーと、先生？」

少しだけ俯いて、苦笑するみたいに目を伏せた。

あまりにも、さっきまでの雰囲気と違うそれにこの人はきつと女優になれる。とかなんとか適当なことを考えて今度は動揺が顔に出ないようと努める。しかし先生にはとくに俺をからかおうとかいう思惑はないらしく、こちらをちらりとも見ずに、むしろ見ないようにしているのか、そんな風にして話し出す。

俺の爪先が彼女の独白染みた言葉を聞いた。

「呪い、みたいなものなんだと思うんだ。あの子は誰にも頼っちゃいけないって、強迫観念みたいなものを抱いてるみたいで。だからわたしは勿論、他の誰も頼ろうとしなかった。自分は出来る子だから、誰かに頼ったら罰が当たる——って。自分ばかり恵まれ過ぎてるくせに、誰かに縋ろうするのが間違いなんだって」

膝の上の手が、ぐつ、と服の裾を掴んだように見えた。
きつと。

気のせいだろう。

「笑って、話したのよ、あの子」

それがどんな心境かを察することが出来たから、俺もへらりとはしていられなかった。

強くあるうとした少女の末路が、その果てに、倒れかけて支えてくれる誰かがいなくて地に伏した。なんて、馬鹿みたいじゃないか。そうか、と理解した。鈴童は何でも出来るんじゃない。誰かに頼る、という一つを永遠に排除する代償に、孤独な万能を手に入れたんだ——。

まるで昔の。

あの、式少女みたいに。

「季節の変わり目には風邪を引き易いって言うでしょ。今回ののはそういうことなんだと思う。あの子は今まで傍に誰も寄せ付けなかったから、突然、一人じゃないって温かさに触れて調子を崩しちゃったんだと思う。情けないけどね、わたしにはそれがイイコトなのか、ワルイコトなのかわからないのよ」

「……それは」

一人切りを支えてきた彼女の呪いを、踏み越えてしまったのは俺だ。

だから彼女は今まで守ってきたものを、独りっきりの強さを保てなくなつて、その、自分で囲った唯一の世界を、箱庭を失おうとしている。理紗が言っていた。一人で囲った世界はとても居心地がい

い、と。だって自分以外に誰もいない。破ってはいけないルールも、乱してはいけない秩序もなく、自分の為だけにある世界だから居心地がいいと。

だけどそれはとても悲しいことなんだとも彼女は言っていた。

奇しくもあいつがそれに気付いたとき、傍にいたのは俺だったのだ。

だから俺にもわかる。

その殻を破って仰ぐ、みんなと同じ青空の下は——生き辛くても息苦しくてもそれでも——とても、幸福なのだ。それを心を閉ざしてしまった後の彼女がはじめて見せた笑顔が教えてくれたのだ。

ならば俺の答えは決まっていた。

そう言わないと、全部嘘になる。

中途半端で止めてしまつては、今までの自分も、今までの理紗も、きつと、今までの鈴童も否定してしまうことになるから。胸を張って言うしかない。なんだ。選択肢なんてないじゃないか。アホらしい。どれを選んでも移行する場面は同じか。

「イイコトですよ、きつと。それを決めるのは鈴童ですけどね」

「……そう、なんだ」

「比較対照のない幸せは無価値だって、俺の幼馴染が言ったんですよ。だから、鈴童にも選んでもらいますよ。一度外に出てきてから、どっちの世界にいたいのかって、あいつにとって、どっちが幸せなのかって」

「うん。それじゃあ——」

「——止めませんよ。こんなことになつても。俺は、鈴童と同じ世界にいたいんです。俺や理紗のいる、恐らくはみんなが幸福と妄信している、この世界に」

「わかつた……お願いね。駄目なお姉ちゃんからの、お願いだから」
かたり、と椅子が揺れて音がする。

鈴童先生は丸椅子から立ち上がり、ゆっくりとカーテンの方へと向つた。保健室のベッドは合計で三つ用意されている。それら一つ

一つがカーテンで仕切られる仕様になっているのだが、今純白の布が覆っているのは一つだけだ。

だから俺は当然のように、先生が向った先には鈴童が眠っているのだと思っていた。

当たり前みたいに。

なんの根拠もないのに決め付けていた。

一度だけ、そうして一回だけ縋るような目付きで俺を見る先生に、疑問を抱くのが遅過ぎた。

なにせ俺が妙に当たってしまう、例の嫌な予感を感じたのは、彼女の目が泣きそうに潤んでいるのを発見してからのことだったのだ。「あのね、一つだけ……もう一つだけ謝らないといけないの」

カーテンに手を掛けて。

言いながらそれをスライドさせた。

ほんの一瞬の迷いを付与させた手付きで。

「静歌、いなくなっちゃったんだあ……！」

先生の目は正真正銘に泣いていて、そして声までも涙声に変わっていた。

おいおい冗談だろ。

これってあれだよな。

保健室の先生には席を外してもらったんじゃないで。

本当はこの事態の処理に奮闘してるってことだよな——！？

「うああああ——っ。どうしよっ、どうしよっ！？」

「あんた、よくさっきまで普通に語ってたよな！」

「だってえー！」

童女のように手をばたつかせる。悪戯がばれた後の子供みたいな、助けと許しを乞う目だ。

お兄さん、そんなものには騙されないんですからねッ。

「これ、これが、置いてあったんだもん！」

千切れたノートの切れ端か、ルーズリーフかの紙片を振りまして俺に見せてくる。

それは病床に付いている割には随分と丁寧な字で、だからこの達筆とも思える字体から間違いなく本人が書いたものだと解る、そんな字で次のようなメッセージが残されていたのであった。

「『もう大丈夫だから、心配しないで』」

無機質な癖に。

文末には鈴童が書いたとは思えない、焦りの様子を表す顔文字なんか汗を垂らしていた。

こりやどうしたことだよ。

大丈夫だって。

全然大丈夫じゃないだろ、あの生徒会長。似合わなさ過ぎるだろが。顔文字とか、拳句、脱走とか。それっておまえのすることじゃねえよ。面倒くさい。ああもう、付き合いきれない。しかし約束は約束だ。全うしよう。

生憎俺は彼女の姉みたいに、大丈夫、ってそれだけで騙されるよ
うな人間ではない。

自分で大丈夫なんて言う奴は大抵、大丈夫なんかじゃないと知っているからだ。

24 / 彼女の箱庭

/ 2

「で、当てはないわけよね」

「お恥ずかしいながら」

「あんたってほんとに考え無しよね、昔っから」

「反論する余地も見当たりません」

「跪きなさい。そして懇願しなさい。そうすれば、あんたが進むべき道を示して上げるわ」

「！？ …… は、ははっ、仰せのままに」

「ふふ、よろしい。では、神の言葉を授けましょう——靴を舐めなさい。余すところなく、しっかりと」

「ありがたき幸せです！」

「あら？ もう、あんたが舐めるから、その汚い唾液で靴が汚れちゃったじゃない。これは罰を与えるに値するわね。ほら、そこで懺悔の意思を示しなさい。そう、いい子いい子。ちょっと、なに手で隠してるのよ。ちゃんと見せなさい。あは、縮こまっちゃって、情けない。仰向けになつて——あたしが、優しく踏んであげるから。あんたが汚したこの靴でね…… あはは」

……………。

「——という経緯を経た後では、断ろうにも断れないわよね。仕方ない、協力してあげるからその汚いものを仕舞いなさい」

「てめえは何で、一人芝居で過去を捏造しようとしてんだよ！？」

「む。口が悪いわんちゃんね。もう、なによ。気分出ただけじゃない。それとも不満あるの？」

「大有りだッ」

「じゃあ逆バージョンにしておいて上げるわ」

「要らねえよ！」

「んっ……………んあ。……………あっ……………ん。んん……………！……………え？　ねえ、なんで止めるの？　お願い、なんでも言うこと聞くから、こんなところで止めないで……………ご主人様」

「だから止めると言っている！」

緊迫した状況はのっけからふざけまくる理紗により、台無しにされてしまった。人生におけるシリアスとコメディの比率があっていない、とか言う理紗の調整であるらしい。が、俺にとってはこの上なくシリアスな場面ではない。この幼馴染みは十数年間、俺をどんな目で見てきたと言っのだろう。

下手をすれば自分自身を見失ってしまいそうな気分である。

理紗はこんな感じのやり取り（八割は理紗の自作自演だ）を展開して、空気を切り替えるように咳払いを一つ寒空の下に落とした。こほん、という小さな声が見事なまでに場の雰囲気のリセットした。何だかんだで、双方が現状の深刻さを理解しているからこそなのだろう。

肩の力は抜けた？　と理紗の悪戯な笑みを見る。

力が抜けるどころか、力尽きた感じた。

「あたしは満更でもないけどね」

「冗談だろ？」

「どうだか」

何で楽しそうなんだろう。

保健室を出た時点で、実は理紗には既に事情が筒抜けになっていた。何せ保健室に入ったのは俺だけだが、保健室までは二人で行ったのだ。つまりこいつは部屋の外から全ての会話を盗聴していたのである。だから鈴童が失踪したことも知っているのだが、どうも緊張感がない。

学校サイドで現状を知っているのは鈴童先生……………いや、恐らくは保健室発信で職員室辺りには知れ渡っているかもしれない。詳細は

わからないところであるが。放っておいても家に帰れば案外普通に紅茶でも飲んでるじゃないだろうか、実は思わなくもないのだ。とはいえ。

捜さないわけにもいかなかった。

もしものつぴきならない事情で鈴童が学校を抜け出していて——あるいはまだ学校の中にいるのかもしれないが、生徒会室は既にチエック済みである。無論、いなかった——また倒れるようなことがあれば取り返しが付かなくなる。

今度は助け起こすことの出来る誰かがいないかもしれないのだ。

こうして冷静に思考を切り替えて現状を把握し直すと、解けた緊張感が再来してきた。

校門なんかで蟠っていないで、早く飛び出して捜索に向うべきだろう。

逸り出した心を長年の勘で察したか、理紗が呆れるような溜息を吐いて俺の前に立ち塞がった。

右手を突き出して、

「ストップ。あたしまだ、話し終わってないんだから」

「まだ……って、なんか更に話すのか」

十分だろ、もう。

出来ればこの状況を脱するまで口を開かないで欲しい。

「聞く気がないなら好きにすればいいじゃない。ただしその時は、あたしを倒してからね」

突き出した右手を握りこんで拳を作る。

こつん、と胸板を売った衝撃が腹の底まで落ちて行って、不思議とそれだけで焦っていた気持ちが少しだけ落ち着いた気がした。理紗に取ってはそれも計算済みだったのか、にこり、と不敵に口元を吊り上げる。

「落ち着け、ばーか。焦ってもいいことないわよ」

「……わかったよ。とりあえず、ちょっと落ち着く」

促されて深呼吸する。肺の中が冷え切った。

「あんたはさ、自分のしてきたことが間違いだと思う?」

「俺がしてきたことって、なんだ」

「鈴童静歌は一人で幸福だったのに、それを壊してまで箱庭から連れ出すことに意味なんてあるのか、って訊いてるのよ。その結果、こうして彼女が倒れることになっても。それでもあんたは自分が正しいって胸を張れるのか。そうまでしなくちゃいけないことなのか、ってさ」

「……それは」

自己完結したはずのそれを、やはり他人の口から聞くのとは意味が違ってくる。さつきはあんなにも固い決意に見えたのに、今は脆い、砂上の楼閣みたいだ。理紗の言葉だけで揺らいでいる自分がいる。それが自分の正しさを間違いだと批難しているようだった。

「もう止めにしようよ。イイコトなんて何もないんだから」

理紗は、諭す口調で俺に語りかけた。

「誰かの世界に勝手に干渉する権利なんて誰も持っていない。それはその誰かの生涯を否定してるのと同じなのよ。こんなことして誰が幸せになるのかって、あんたは考えた? 鈴童静歌から何もかもを奪ってでも、それでも前に進む理由はあるのかって、考えたことはあるの?」

こんなことをして誰が幸せになるのかって、それは、わからない。わからないなりに進むと決めたとつもりだった。それを決めるのは鈴童だから、と。

俺は理紗を見る。理紗の無垢なまでに真っ直ぐな目を見る。

ああそうか。

試されているのか、俺は。いつもこうだ。勝手に見下してきやがる。心にもない正論を吐いて、相手を試してる。それが俺の幼馴染みだった。きつとこいつは、こんな半端な気持ちでそうするならさつさと家に帰った方がいい、と言いたいのだと思う。鈴童と理紗は似ている、と幾度も俺は思った。似ているからこそその境遇に理解し合えるのだろう。

鈴童が守ってきた箱庭^{フラインド}を、理紗は良くも悪くも認めている。

だから覚悟もなく奪ってはならない、とそういうことだ。

果たして俺はそれくらいの何かを持って、彼女を引っ張り出そうとしているだろうか。

考えるまでも、ないだろ。

「正しいかどうかはわからない。でも、間違いだって認めたくもない」

認めてしまえば、今までが嘘になる。

今朝、鈴童が話した言葉も全て。きつと、これまで話したどの言葉よりも本音に近いはずの言葉さえ嘘になる。それがただ嫌だった。だってあいつも言ってたんだよ。一人は寂しいって」

昔のおまえみたいに。と付け加えようとして止めた。

これ以上理紗と鈴童を重ねたって意味がないからだ。二人はやっぱり別人だから。

理紗は腰に手を運んだ。そして、仁王立ちから微笑を浮かべる。

「合格。そんだけはずきりしてるなら、あたしは何も言わない。あんたなら上手くやるだろうしね。そのことはあたしが一番良く知ってるわけだし、まあ、心配はしてないわ」

自覚があつた訳だ。

こいつは意外な事実が発覚した。

「じゃあ行きましようか」

「行くつてどこに？」

「……あのね、あんた自分の目的を忘れちゃったの？ 鈴童静歌のところ^{ココ}に決まってるじゃない」

「いや、だから……」

ちよつと待て、と。

なんでこいつ、こんなまるで鈴童が今どこにいるのかを知っているみたいな口振りなんだろう。明確な目的地なんて決まっているはずもないのに。これから街中を駆け回って、やっとの思いで発見できる、というのが小説とかのセオリーだろ。

その過程を省略して結果に辿り着けるなら、しかし現実ならそれに越したことはない。

何せもう日も沈みそうだ。冬の日没は早い。

「言っただじゃない。敵を知って、己を知れば百戦危うからず。孫子の言葉で、宮本武蔵は巖流島でそれを実践して見せたわ。戦いつて言うのは始まる前からほとんど決着が着いてるのよ。実力差とか、コンディションもそうだけど、なにより事前の情報収集。それを怠った者に勝ちはない。だからね、今回のことだって初めから勝てるって決まってたのよ。心配ないって」

黒髪が薄く橙に染まり始めた灰色の空に翻る。

そしていつものように胸を張り、誇らしげに彼女はそれを宣言した。

「この程度の式は、とっくに解いちゃったんだからっ」

そもそも川原というものが創作中の遺物として消え行こうとしている現代だが、この辺りはどうやらまだそこまで先進開発が進んでいないらしい。などと思いつつ、自分も小さい頃はよく遊んだその河川敷にやってきた。

扇状地というのか、三角州というのか、実際どっちでもないのだが、上手い具合にダイヤモンド型に模られた河川敷は地元の子供達にとってはもはや公園代わりである。ガキ大将が仲間を集めて野球をやってるような、そんな情景を想像してもらいたい。つまりそんな感じた。ばっちこーい。

俺が理紗に導かれて到達したのはつまりそういう場所だった。

例に漏れず小学生と見える少年達が野球を楽しんでいる。この寒いのに半袖シャツの子供もいるから元気なものだ。人数は両チーム合わせても十八には満たず、ホームルーム後に募集を掛けて集まったメンバーみたいな感じと見える。十二人くらいか。結構いるな。

しかしこのご時世に子供が悠々と遊んでいられる空き地なんてものはそうない。

私有地とか、後、口うるさいおっさんとかに子供の自由地帯は脅かされる一方なのだ。だからここに人数が集まってくるのは意外と自然な話なのかも知れず、そういう意味でこの人数が集まったのだとも考えられた。いつだって一つの場所に人は集うものである。そしてあれぐらいの歳の頃であれば加わる者への敵対はない。

子供達の遊びに飛び入りゲストとは、大抵の場合歓迎される存在なのだ。

例えばそれが――

かきーんと、打球が上がって。

――見ず知らずの高校生だとしても。

白球がグラブに収まった。

鈴童静歌のグラブに収まった。

……。

え、ちよっと、鈴童さん？ あんた学校サボって何をしてやがりますか。

俺は自分の目と現実を疑った。あの鈴童が、子供に混じって野球なんてやっている。何でも出来る奴だとは知っているので嗜み程度に野球をプレイする分には俺だって驚かない。だが現状はどうだ。鈴童が、小学生の群れに混じって、あんな、無邪気に笑ってるんだ。信じられないと言えば、何もかも信じられなかった。

水面が夕陽に染まっていく。途中観戦の身としては彼らが今どのような戦況に身を置いているのかわからないが、どうやらダイヤモンドの中にいる小さな戦士達のボルテージは最高潮に達しているらしい。埋まり切った塁上の――みんな泥だらけだ――彼らは好機を逃した感嘆を天に叫んでそのまま守備に付いた。グラブはある程度使い回しているようだ。

時間帯を考えると、これが事実上の最終回といったところだろうか。

ベンチも何もないが、一列に並んだ小学生達が声援を飛ばす。脚で線を引いたのだろう手書きのバッターボックスに立つ。一人目のバッターは見事にヒットで出塁した。歓声が上がる。素人の野球は基本的に乱打戦になるわけだから、さほどこのヒットが珍しいというわけではないが、状況を考えれば確かに貴重だ。

次のバッターはピッチャーが意地を見せて三振に打ち取った。続く打者も外野へ運びながらも送球アウトに倒れる。ランナーはスコアリングポジションに進んで、ツーアウト二塁。順当に引き分けて終わるのか、それとも延長突入か。

勝負の行方を決めるラストバッターが打席に立った。

「……………」

俺は啞然とする。

この場面でおまえに回るのかよ。

バッターは鈴童だった。

それも滅茶苦茶真剣な顔をしている。大人の顔だ。もう、これ、甲子園出場校の球児達と変わらない。本気の本気でこいつ、小学生からサヨナラヒットを打つ気だ。ヒットどころか、むしろホームランか。やめとけよ、小学生にとってボール一球なくすことは一大事なんだぞ。

しかしここは鈴童も大人なのだ。

立場くらいは弁えているだろう。

と、思った瞬間である。

ベンチ（つぼく選手の集まった河原の砂利の上）から歓喜の聲が上がり、守備ナイン（実際は外野が一人で、ショートが欠けている為六人だ）から悲鳴が飛び交う。夕陽の赤い空に伸び上がった打球を追っていく外野手を嘲笑って、白い点は無情に遙か彼方に転がった。

どう見ても、外野の返球は間に合わない。二塁ランナーは余裕で生還してサヨナラを決めていたが、大はしゃぎの鈴童もゆつくりとホームベースまでランニングしてきた。なにしてんだあいつ。「ひゃっほーう」とかいう声が聞こえてきそうである。

しばし忘我に駆られていた俺も、試合の終結を見てやっと言葉を思い出した。

「理紗、こりやなんだ」

「ずいぶんと白熱した試合だったわね。日本シリーズも凌ぐ熱気じゃない」

「んなことは訊いてねえよ」

「つか日本シリーズ舐めんなよ、プロだぜ。プロ。」

「おまえの感想なんてどうでもいいし、途中から観てた癖に感じ入

ることもないだろ」

「なによ。あたしはしょっちゅう見に来てたわよ。この野球、チーム編成は変わるけど個人記録は累積してるみたいなのよ。首位打者とかホームラン王とか最多勝とか、タイトルもあって本格的みたい」

「く、詳しいんだな」

「まあね。リサーチの為に何度か見に来てたのよ。言ってるじゃない。情報収集よん」

「て……、もしかして、今回だけじゃないのか鈴童が参加してるのって!？」

「たまーつに顔出すらしいのよ。調査によるとね。発見したのはたまたまだけど。あの子達に聞いたらそう言ってた。密かな楽しみみたいよ。人には言えない趣味って奴ね」

「如何わしい言い方をするな」

ぽん、と背中を叩かれる。

理紗が横目で俺を見上げていた。何故か挑むみたいな視線である。

「これしかないでしょ。ほら、行きなさい」

「……強請るネタか？」

「ばか。純粋な勝負方法よ」

ああ。

なるほどそういうことか。

あの時のバッティングセンターは、つまりここに繋がるわけだ。だとしたら理紗は予め何もかもを予期していたと言うことなのだろうか。俺が先走って鈴童に一度負けてしまうことも。こうして鈴童が失踪して小学生野球に興ずることも。――違う。想定なんてしていなかったはずだ。

あらゆる可能性に視野を広げて、そして対策を練っておく。

理紗がしたのはそういうことだ。

何が出てきても対応できるよう、最悪の事態も最善の事態も加味して理詰めにする。

式娘の真骨頂とも言える、そんな特性を発揮したのだ。

「おい、あんたたち」

大きく頭上で手を振って、小学生達の衆目を一身に集める。土手を駆け下りていく理紗は俺の手を握って、滑り降りるように走り出した。小学生達は皆こちらに注目している。勝利の高揚を湛えて、敗戦した側も清々しい笑顔で理紗に手を振り返す。全員が全員はしゃいでいるが、こいつ、前にここに来て何をしたんだろう。本人は調査だと申告しているが。

「おい、あのねーちゃん」「伝説のホームランバッターだぜ」「誰それ?」「あ、そうか、おまえいなかったよな」「ボール四球もなくしたんだぜ」「四打席連続ホームラン」「どこまで飛んだかわかんねえ」「人呼んで『しましまスラッガー』」「なんで『しましま?』全員が声を揃える。「パンツ」

……………

なるほどな。スカートでバット振ったんだ。

「俺はへその方が好きだったかな」「走ってるときに胸揺れてたよな」「脚綺麗だなー」

このガキども。

しかし素直な小学生達である。……いいことなのだろうか。

理紗は大歓迎の騒ぎが作り出す輪の中に入って、なにやら交渉をしているようだった。その交渉は直ぐに通る。見事にバットとボールとグローブを拝借した理紗は得意気に俺へと笑顔を向けて——この場でただ一人、苦々しく表情を歪めた鈴童に言った。

「選ばせて上げる。バッターとピッチャーどっちがいい?」

「……なに、それ」

「勝負よ。あんたが負けたら、もう一回、次はあたしと勝負してもらうから。言っただでしょ?」

「貴女まだ……そんなこと言って」

理紗が鈴童に勝負を持ちかける。あの日、旧音楽室以来に聞く二人の会話は前回よりも何段階も熱を冷まして行われた。今度は理紗

が優勢で、鈴童はもう、逃げ出したいと言っているみたいな口調ですらある。

こんな場面を目撃されて戸惑っているというのもあるだろうけれど。

鈴童は黙っていた。

もしかしたらこのまま宣戦布告を黙殺して帰ってしまうかもしれない。この時俺は、本気でそんなことを思った。しかしその予感は今度ばかりはその嫌な予感も見事にすかんしてくれる。鈴童はゆっくりとバットのグリップを握って打席に向った。

ボックスに入って睨まれる。勝負する相手が誰であるかは、どうやら俺よりもよくわかってるらしい。

俺も遅ればせながら理紗からグローブとボールを投げ渡され、準備する。擦れ違い様、肩に手を置いて理紗がアドバイスを寄越してきた。いや、それはアドバイスなんて殊勝なもんなんかじゃない。

「勝ちなさいよ。仏の顔は三度までだけど、あたしは二回目から本気で怒るから」

「はいはい。了解しましたよ」

ほとんど、脅しみたいなもんだ。

「シズ姉頑張れー!」「わけわかんねえ兄ちゃんに負けんなー」「おれ、キャッチャーやるよ」「あ、ずるい、おれもキャッチャーやりてえ!」「おれも、おれもパンツみたい!」一人欲望を全面に出してる奴がいる。「もう、みんなうるさい!」

す、と鈴童がバットの先端を俺に向けた。

「……これで、ほんとに終わりだからね」

迷いだらけの瞳でそう言われる。

俺は、ボールの感触を確かめながら言い返した。

「違うよ。ここからが始まりだ」

始まるんだ。

俺が勝って、それで、何もかも――。

「おい。だれか守備つけよ」「やだよ」「あんなのの後ろつき

たくないし」「リサ姉の守備なら喜んで」「おれも」「おれもおれも」「おれ審判やるから」「うお！ その手があったか！」

……。

三振取るしか、勝ち目はないわけだ。

というか、ピッチャーやるんじやバッティングセンター行った意味ないだろ。

プレート代わりに描かれた線が消えかかっている。そんなお粗末なマウンドは周囲と高さも変わらない。何度も踏み鳴らされている分、周辺に比べれば随分と凹凸が激しい。

一球目を投じるのにフォームが安定しなかった。

野球についての予備知識がないという訳ではないが、プレイに関しては素人だ。投球フォームが初めから固まっているはずなんてない。ウィンドアップには及ばない中途半端な腕の動きは、グラブを額の付近まで持ち上げるに留まる。一步引いた左足を畳み、膝を腹に付けるように持ち上げる。僅かに引いた上体を前方に体重移動しながら脚を伸ばし、流動する力に腕を撓らせて振り下ろす。

足先から腕へ、白球を打ち出す指先までに至る力の連動を組み上げる。

しかしそうして鈴童へ投じたその一球は三塁線へ痛烈な当たりとして、投球の倍ほどの速度で土手に弾け飛んだ。強烈なライナーが軟らかい土手を抉り取って転々とする。

小さく上がった歓声が静寂へと変わる。呆然としたのは俺だけじゃない。この場にいる全員がおそらく、その当たりに息を呑んだだろう。けれど、静まった河原をすぐさま熱気を帯びた声が包み込んだ。それは、先刻の一球が対決の開幕を告げたことを意味する。

盛り上がる周囲とは違い、マウンド上で俺はそのテンションに付いていけなかった。

幾らなんでもデタラメだろ。相手が女子だからって、少し甘く見すぎていた。相手は鈴童だ。並みの相手じゃない。そもそも並みの相手なら、こんなことになってなどいないのだから。

今のファールも僥倖と呼んでいいものだ。

バットを握り直して、腕を伸ばしてからまた肘を畳んで吐息の後、一度離れた戦場に帰還する。鈴童は明らかに本気だ。本気で打つ気である。対して俺は、今の今までこの対決の意味を理解していなかった。だから本気を尽くしていたかといえば、明確に否だったのだ。その熱量の違いが僅かな誤差を生み、そして俺にとって幸運なことに打球は左へ逸れた。

今の一球は、本来ならこの対決の幕を引く一打に繋がっていたはずなのだ。

「冗談じゃないぞ……こん畜生」

ごちて、脚を振り上げる。

逃げ場がない。ならもう打者に向って投球するしかないのだ。

今度の一球は制球が定まらずに大きく外れた。無論、そんな球に手を出す鈴童ではない。外角の敬遠球染みた荒れ球は簡単に見送られる。カウントはワンエンドワン。しかし今のボールには意味がある。本気で投げると言うのがどういうことか、本気でぶつかっているのがどういふことなのかを確かめるという意味が。

三球目、まだ定まらないボールはワンバウンドしてキャッチャーに届いた。自分の異変に気付いたのはその時だ。ああそうか、これが迷いか。打たれる恐怖とはまた違う。この対決の結末をまだ、自分で選びかねているんだ。

ふざけるな。

まだ深層で、迷ってやがるのか。

四球目もボールとなり、呆気なく、テイクワンベースの危機に追い込まれる。事前に決定していたわけではないが、こうなれば順当に俺の負けだろう。もう次はない。さっさと決断しろ。

ふと視界の端に仁王立ちした幼馴染みを発見する。

一文字に唇を結んだ理紗は、けれど物言わずただ見守っていた。信じて——いるかはわからないが、何も言わずに静かに佇み腕を組んで観戦していた。

それだけで十分だ。

次の一球、ようやくストライクゾーンへ向ったそれもコースが際どい。もしかすれば見送られるかもしれないと思った矢先、飛び出したバットがボールを切り打球はファールとなつてバックに飛んだ。今のボールに手を出すメリットなど鈴童にはない。

つまりそれは、鈴童もまた中途半端な結末は望んでいないということだろう。好都合だ。

それからさらに三球ファールが続く。どれもこれも荒れ球でそれが幸いする。打球は全て後ろにしか飛ばない。或いは鈴童も同じように、迷っているのかもしれない。意味のないファールの連続がそれを思わせた。

しかし俺も人のことは言つてられないのだ。全力で腕を振つても真ん中に投げ込むくらいの気持ちがない。見送られれば即負けが決まる。そんな状況だ。どちらが先に答えを出すか、そういう勝負に変わりつつある。

「――ッ」

声は舌打ちしたみたいに聞こえた。鈴童の声が、喧騒の中で際立ったのは何故だろう。普段なら聞き逃していたはずの小さな音の波が今はやけに敏感に感じ取れた。

鈴童のそれは、まだ決着を付けられない自分への憤りか。

続け様のファールが火を吐く。チップの音が冷寒を焦がす。嘆きのようなその音が世界を隔てていく。ここは、この寒空の下は別世界。今、二人だけの為にある小さな箱庭だ。

ファールの度に互いの心中が露見する。声なんて出していないのに、今なら通じ合う。互いの吐く息が、鼓動が、共鳴し合つて波紋を作る――その波紋が境界になり、世界を生み出す。

――何一つ勝てない癖に。

――要らない、一人でいい。

かつて、鈴童に言われた言葉を思い出した。

何一つ敵わないと言われて、それで納得していた自分がいる。け

れど今は否定したい。敵わないことなんてない。例えばこの諦めの悪さもそうだ。互いに意地を張り合って、ぶつけ合えば、ここで諦めなければ必ず――。

そうして終わりのない繰り返しを理解する。

この意地の張り合いはこうして続いていく。どちらも折れないのなら、終わるはずなんてないだろう。だからこそ先に引いてしまうことは出来ない。覚えているからだ。それが、本音なのかはわからない。でもただ一つだけ、これまでのどんな言葉より鈴童の本音に迫ったと思える言葉がまだ残留しているから。

割れんばかりの歓声も今は遠い。ここに響き渡るのは鉄の音と二人の鼓動だけ。

聴こえてくる旋律はいつかの誰かの歌声を呼び覚ます。二人だけの世界。あるいは俺が、彼女の箱庭に踏み入っているのだろうか。

胸の内に抱え込んだ想いの数々を、こうして聞いているのだろうか。

――そう、思った途端に。

突然、世界が色褪せた。

周囲の喧騒も何もかもがまるで意識に障らない。視覚は向かい合う一人だけを捉え、聴覚は、幻聴にも似たメロディラインだけを聴き続けている。

喉が炎天に晒されて蒸発していくみたいだ。呼吸はその度に肺を引き裂く。寒気がした。どれほどの覚悟の上に、彼女は孤独であることを望んだのか。それを自分が侵してしまっていていいなんて、それは――

視界に映るのは一人だけ。

ずっと遠くの別世界に佇む、悲しい目をした一人の少女。

――こんなわたしのことを。

その少女の声を聞く。

それだけで、揺れていた決意が固まってくれた。

急激に醒めていく夢とは対照的に、鼓動はどんどん加速して熱を生み続ける。

決めたんだ。それが、たとえ間違っていたとしても——今は前に進むと。彼女に一度だけでいいから、この世界を見てもらうのだと。それはきつと、幸福なのだと笑った誰かがいたのだから——

投げ出す白球は汗や泥で滑るけれど、それを抑えて弾き出した。繰り返し返した全力稼動に指先は痺れて感覚がない。

チップの音で言葉を交わす。今はそれが二人を繋いでいた。

“わたしは一人でいい”

“だけど、それは”

投げ出す白球が悲鳴を上げた。鉄の音は遠く消える。

“悲しいことだってわかってる”

“だったらやめればいい。そんな、強がりなんて捨ててしまえばいい”

“捨てられないよ。怖いもん。だってそれは”

続け様のファールは際限なく続いた。

“それは、わたしが信じ続けてきたわたし自身だから”

打球が、一球目のファールよりさらに際どい軌道で弾ける。

“だからわたしは一人でいい”

ライナーからフライへ。着実に、当たりは弾道を上げていく。

正確に洗練されていくタイミングとミートポイントは、決着の足音を思わせた。

“今までどおり、一人でいい”

“それがいい”

“わたしは——一人でいたいッ!”

懇願する叫びと共に白球は伸び上がった。けれどライン際に落ちてくる。

お互いに肩で息をしていた。一度の投球ごとに腕が萎れるのがわかる。彼女も同じように、スイングの度にヘッドを地面に降ろしている。握力がどれくらい残っているのかもわからないくらいに、感覚が死んでいる。それでも構わない。ここで引くなんて、出来るはずがない。

彼女が本心から叫んでくれるのなら。

こちらもそれに答えないと、全部嘘になる――

「……それでも、おまえは」

気付けば口に出していた。

脚を上げる。手の中にあるボールを握り締める。

「――あんなに、楽しそうにしてただろ……！」

思い出すのは彼女の歌声。ついさっき目にした少女の笑顔。

誰かといえることが楽しいって、知ってるんだろ。

誰かといっしょにいたいって、そう思うんだろ。

どれだけ固く閉ざしてもその中に幽閉した本心は隠しきれない。

だから彼女は笑っていたのだ。強がりじゃなく本心から。それを知ってしまったから負けられない。その虚勢が、意地が彼女を苦しめると言うことを知っている。かつて同じ様にそうした誰かがあまりにも悲しかったと今は思えるから。

酷く自分の好きなヒトにその少女は似ていた。

だからその姿が綺麗に見えたのだと思う。

偽らず笑った笑顔。

隠し切れず、張り続けることが出来なかった意地を押しつけて。

ただ一度だけ雪のように呟いた少女を思い出す。

その姿で胸を焦がし、穿って、彼女の面影が消えないように目を閉じた。

記憶に新しい彼女の言葉がまだここに残っている。

それを思い出して、最後の一球に臨んだ。

――こんなわたしのことを。

瞬間的に連動した全身が脱力する。

果てに、まだ見えぬ結末がある。

振り下ろす鉄の意志が、飛翔する白球を打ち抜きに迫り――

——嘘でも好きだなんて言ってくれて。ありがとう。

——終わりのない繰り返しは、呆気なく、そして予期せず終わりを告げた。

空を切る音は虚しく、苛烈なチップの音には遠く及ばない。けれどそれはどこか誰かの安堵にも似ていて、今までのどんな金属音よりも人間らしかった。最後の最後だけ、狂いなくど真ん中に突き刺さったボールが彼女を空振りさせた。

今までの荒れ球から急に真ん中を射抜かれたことに戸惑ったのかもしれない。

しかしどうあっても幕はここに下りた。誰かが望んでいたのかは知らない。けれど、確かにここに。

鈴童はしばらくバットを振り抜いた体勢のまま硬直して、それで、

「あーあ……終わっちゃったか」

いっそ清々しいくらいの声で、そんな風に呟き膝からがくりと崩れた。

25 / e n d c i r c u i t (後書き)

前半戦…… といつか残りも約3万文字となり、しかし作者と物語のテンションが燃え尽きてしまったので、一度休憩に入ります。

次回更新は年内中に！

…… 年内での完結に尽力します。

26 / これから始まる

/

プロローグ。

という名の、これまで分の後日談である。長編番組のコマーシャル前に入る「ここまでの放送は」的な意味のあれであり、そういった意味でこれは後日談であり序章なのだ。全てが終わって、そして全てが始まったその日の話をしよう。あの河原での一件後、酷い筋肉痛に顔を歪めながら向ったいつもの朝錬を終えて、疲労のピークを授業中に超えた俺の記憶は一気に放課後まで跳躍する。

いつもと同じ光景に異色のそれは当たり前みたいに溶け込んでいた。

俺と、理紗と、鈴童の三人がそこに集まる。

鈴童は自分のベースを持って、それをアンプに繋ぎ、チューニングの最中である。理紗はなにやらノートを広げて忙しくペンを走らせている。どうやら新曲の製作中らしい。

これは普段とは違う光景だが、約束された光景でもある。

鈴童との勝負に、ともあれ俺は勝ったのだ。

だから約束通りもう一度勝負をしなければならない。自分で取り付けた約束を、鈴童が破る訳なんてなかった。ごく当然みたいにベイスを背にして、自分が認めない、引き払えと言い渡した旧音楽室に姿を現したのだ。理紗も俺も何も言わない。不自然ではあったが、違和感は微塵もなかったからだ。まるで初めから、この様子がここにあることが定められていたみたいに。

やっと形にしたスリーピースがここに揃って、音を紡ぐ。

その瞬間がすぐ目の前に迫っていた。

「さて、と。始めますか」

ぱたん、とノートを閉じた理紗が宣言する。

静かに、誰も否定せずに準備する。鈴童は依然として、ここに入ってからまだ一言も口にしない。

聞くまでもなくこの勝負において理紗は全力を出してくるだろう。前回と同じ様に、いや、あの昼休みよりも一層本気に拍車を掛けてくる。勝負となるだけでこいつのモチベーションは爆発的に増加するだろうからな。

始まりの合図はドラムから。

スティックを鳴らして鼓動を刻む。

雷鳴染みたシンバルの音でスタートを告げる。

走り出した音は誰も歯止めを利かせることが出来なかった。俺は二人について行くのに必死だし、二人は二人でより自分が前に出ることに必死なのだ。他人を気にする余裕などない。全力で併走しながら息を切らし、二人は遠く遠く駆け抜けていく。

一步、二歩、と引き離されていく自分がいた。

歌詞が後半に到達した時点で限界が見えてくる。過酷なレースに膝を折りそうになっていた、その時だった。世界を満たしていた圧倒的なメロディが突如として厚みを失う。刹那の間に切り替わる景色は大人しく、制動距離を滑る車窓のように緩やかに速度を落としていった。

何があつたのかは考えるまでもない。

鈴童が手を止めたのだ。

ぴたり、とピックを持ったまま立ち尽くし、どうして止まってしまったのか自分でもわからないとばかりに表情は驚愕に満ちている。だがその表情を確認できたのはわずかな間だけだ。鈴童はベースを支えにするように、それでもするすると萎れて最後には膝までついてしまう。

「……なんだ」

震える声が潤んでいた。

幸せそうに泣きながら笑っているその声は自嘲染みて聞こえた。

「こんなに、簡単なことだったんだ……」

やっと見つけた、クラスで自分だけが答えのわからない謎々の回答を得たみたいに、それを大切にして噛み締める。今はただ、それだけで、そう言っているようにベースギターをきつく抱きしめて顔を腕に埋めていた。

これが後日談。

鈴童が俺達に屈した決定的瞬間である。

これにより、事実上全ての問題は取り払われたことになる。メンバーも揃ったし、抑止力になる生徒会も排除した。そしてこの旧音楽室も手に入れたし——創設祭の出演も確定的になった。そのことを鈴童はしかしまだ不思議に思うようで、

「それとこれとは話が別でしょ。オーディションは終わったんだし。部でない以上、これ以上の活動は出来ないわよ」

堅物は健在だということを顕著にそんな言葉で示してくれた。

ふふん、と鼻を鳴らしたのは理紗である。よくぞ訊いてくれました、とでも言いたげだ。俺にそうなるよう会話の誘導を指示したのはどこのどいつだよ。おまえだよおまえ。そのドヤ顔。

「生徒会執行部は、一つの部活動扱いつてのは知ってるわよね？」

「……それは、まあ。でもそれとこれとは——」

「生徒会の前舞台。知らないわけじゃないでしょ？ 毎年有志の舞台発表前に生徒会で行う、前座みたいなものよ。これに今回はバンドを組み込む。それだけの話で全部解決よ」

「あ……」

失念していたわけだ。

実際、俺と理紗が生徒会に入った最大の理由はそれなのだ。鈴童の獲得ももちろんあるが。

幸いにも鈴童はその思惑に気付くことが最後までなかった。目論み大成功で理紗は大満足している。

「でも、その書類の提出期限」

「出したわよ。とつくに、あたしが全部プランニングしておいた」
この式に残された最大の問題点、ネックだった書類上の処理もまた幸運なことに解決していた。

良くも悪くも鈴童が一日でも生徒会室を空けてしまったのは俺が原因なのだ。なので本来ならもつとスマートな方法で書類を調達するべきだったのだが、今回は半ば強行手段みたいになってしまった。それも百パーセント運である。こればかりはどうしようもない。幸いなことはこの件について実行委員がそれほど深く絡んでこなかったことだろう。

書類には生徒会承認の判も必要にされなかったし、持って行つたのが俺と理紗にも関わらずあつさり審査を通つてしまうのだから。あの会長のやることだから、と苦笑いしていた実行委員の顔を思い出す。鈴童の絶対性がいい風に作用した結果だ。

要するに俺達は初めからオーディションを受けるつもりなどなかった。鈴童の勘違いはそこで、そもそも見ている方向が違うのだからそれが上手い目晦ましになっていたとも言える。鈴童が万全のコンディションだったならどうなっていたかは知らないが。

「……でもよく思いついたわね、そんな方法」

鈴童が怪訝そうに言う。

ベースを弄りながらなので、俺か理紗のどちらに言ったのかは定かでない。

ここは俺の口から説明しておこう。

「偶然見つけたんだよ、図書室で。生徒会の活動記録……とかそんなの」

遡ることそれはそれなりに前の話である。

確か理紗がオリジナルでバンドをするとか言い出したときだったと思う。本来の目的はスコアの読み方についての読み物を探しに行つたのだが、そのついでに俺も理紗が言うところの情報収集とやらを行つておいたのだ。創設祭のことを知ったのはその時である。

この式の核となる部分については実はまったくの偶然によって見

出され、以上のことを理紗に話してみたところ今度の式が組み上げられたのだ。表立って動いたのは今回も俺だけだったわけですが。しかし式を立てたのは理紗で、あいつがいなかったら今頃こんな結末にはなっていなかっただろう。

俺一人なら。

とつくに、心が折れていた。

「いいじゃない。結果よければ全てよしなんだから。支払った代償も、失われたものも、結局手に入れたものの価値には敵わないわよ。歓迎するわよ、えっと、静歌。これからよろしくねっ」

弾むような声で言って手を出す。

鈴童はその様子にぽかんと口を開けて僅かな間硬直していた。会う度に口論していたような二人だ。鈴童の反応が当然である。しかしそれでも、この場合は理紗の反応が的確でなくても適当と言えた。これから三人でバンドを組むわけだ。これが終わりじゃない。ここから始まりなのだと、改めて気を引き締めなければならない。

だったらほら、いがみ合ってる場合じゃないだろ。

鈴童は少し迷ったような、困ったような顔をして理紗の手を握る。

「よし、それじゃあ今日から気合入れて練習してくわよっ。ほら二人とも準備して！」

27 / キミにわからないキミの気持ち

/ 5

三人揃ってスリーピースいざ始動、という少年漫画みたいな勢いで突っ走る理紗であるが実質、我々は大義名分上生徒会執行部なのである。なのであくまでバンド活動の優先順位は生徒会業務よりも下位に扱われる。それも創設祭の余興みたいなものだ。練習に割ける時間は本番が近づくにつれて少なくなっていくた。

もちろん約一名ほどそれに文句を垂れる人物がいたが、こればかりはどうしようもない。本人も渋々ながら納得していた。その姿が少しだけ意外にも思えたのだが、高校二年生ともなればさすがに中学生みたいなことはいわないわけだ。安心した。

そんなこんなで上手い具合にバンドと生徒会の両立を、これがまた妙に綺麗に回っていたある日のことだ。音もなく前触れもなく、それはやってきた。いや、音は聴こえていたのだ。この場合はむしろそれが問題だったわけで。

原因は理紗のこんな一言である。

「ちよつと、さつきからドラム遅れてない？」

放課後の練習中の話だった。

生徒会の業務もあるが放課後を練習に使えることになった短縮授業後の時間に理紗が呟く。それはいつもと同じような駄目出しで、普段どおりの何気ない光景だったのだが。口調はどこか重苦しさを感じさせるものであり、それだけがこの場に異質な空気を発生させた。

長い放課後だ。久し振りに長時間の練習が出来るとあって張り切りまくった式娘は、これでもかとかとばかりに飛ばし放題の演奏を二時

間近くぶつ通しやがったりしていた。そりゃあ、俺も自分で遅れていたことには気付いている。しかしそれを他人の口から指摘されるのと、自分で感じるというのは大きな違いがあるらしく。

「そうか？ 悪い、次から気をつける」

なんとなく気付いていないふりなんかをしてみたりした。

「気をつけて改善できるならいいけど。ん、もう時間もある訳じゃないんだから。早くこのペースに慣れてよね。本番はもっと上げてくわよ」

「それも、まあ、善処する」

「善処って何よ。努力する、の間違いじゃないの」

「……おまえな」

「なによ」

「なんもねえよ」

「あつそ」

なんでこいつ、こんな機嫌悪いんだ。

明らかにいつもより荒れてる。口調もどこか刺々しいし、目付きも辛辣さが混じっていた。しかしそれはまあ、個人の事情というものがあるのかもしれない。理紗のこういう態度にいちいち腹を立てたりしてはきりがないので、俺が大人しく引いておかないといけないのだ。

それが十年以上もいっしょにいた幼馴染みとの付き合い方だと理解していた。

なのにどうして、今日に限って反論しなくなったりしたのだろう。演奏が遅れていたのは事実だし、もっと付いていけるようにならないといけないともわかっていているのに。なぜか普段なら適当に流せていたはずの発言に喰いついてしまった。なによりも自分自身で驚きだ。そのせいもあって、一度中断された練習は不穏な空気を漂わせて凍結状態に入ってしまった。

咳払いの音がする。

現職生徒会長、鈴童静歌である。

「ちょっと休も。なんだかんだでぶっ続けだし」

この雰囲気を見兼ねての発言だとは簡単に見破れた。

しかもこいつ、一瞬こっちに目配せなんかもくれている。俺の体力が落ちてきてることもお見通しというわけだ。理紗がわかるのだから、鈴童にわからないはずがない。こいつは場の空気を洗浄するという意味でも、真実俺を休ませる為の意味でも先の発言をしたということだろう。

そのような意図は果たして理紗に伝わっていたのか。

式少女は悪辣な視線を今度は横目にして鈴童へと向けた。

「そんなんで間に合うと思ってるの？ 生徒会の仕事だつて増える一方なのに」

「でもこの状態じゃ練習したつて意味がないでしょ」

「ふうん。まあ、あんたみたいなのは別にそうやって、やりたい時に練習してればいいけどね」

槍みたいな視線の切っ先がこちらを向く。

「みんながそうしてられるわけじゃないの。時間がいくらあっても足りない奴だつているんだから」

俺のことを言っているのだろうか。

当たっているのだがそれは少し癪に障る言われ様だ。

なんだつてこんな八つ当たりみたいな抗議の的にされにやならん。「だいたい、あんただつて何よ。さつきからペース落としてるでしょ。ばれないとでも思ったの？」

再び鈴童へと批難の眼差しが向けられる。

理紗のその発言には俺の方が驚いた。鈴童のペースが落ちていたなんてことは、俺には全く感じられなかったからだ。そもそもこの程度の演奏についていけない鈴童ではないはずだろう。疲労にしたつて、ヴォーカルもやりながらライブまでやったこいつならこのくらいは――

理紗の言い様が鈴童が故意にペースを乱そうとしていると言いた気だということに、不意に思い至る。そして鈴童もまた、その指摘

に対して反論しない。唇を軽く噛むようにして押し黙っていた。

「あのね、余裕ぶつてて間に合う状態じゃないのよ。時間もないし実力もない。だったら限られた時間を粹一杯に使わないといけないのは当然でしょ。なにが休憩よ」

「……あのさ、なんでそんなに焦ってるのか知らないけど、言い過ぎじゃないの？」

「言い過ぎって何が？ 全部事実じゃない。誇張なんてしてないわよ」

「だから、それにしたって全体のモチベーションとか——統率役を気取ってるなら弁えなさい、って言うてんのよ」

「なにそれ、ご大層な言い分じゃないのよ生徒会長」

あ。

これはマズイ。

交わす視線が火花を散らしている描写がまさに似つかわしい。同じ様な光景を俺は以前にも見ている。そして肌で感じるこの空気もまたそうだ。どろりと纏わり付いてきて、吸い込むと喉に絡む泥みtainな空気が気持ち悪い。

二人を透明な膜が覆っていて、下手に触れてしまうと絶妙な均衡を保って中に停滞しているものが爆発しかねない。これはそういう状況だ。悪いことに今回は俺が仲介に入ることも出来ない。なぜならこの最悪の状況を作ってしまったのは俺なのだから。

「だったら好きにすればいいじゃない。結局あんた、また一人で全部済ませるつもりなんだ」

「ッ！ ……それは貴女でしょ。式だか何だか知らないけど、それで何もかも上手く回るなんて思わないでよ。思い上がってるんじゃないの。現実には数学とは違うのよ。貴女が記号にしか見てないモノは全部、ちゃんと意思も主義も主張も持つてる人間なのよ！」

「お互い様でしょ。むしろ、あたしはあんたみたいな他人を見下した性格のが気に喰わない——」

先を遮るようにして、シンバルを両手で思いっきり鳴らしてやつ

た。

びりびりと震撼する冷え切った大気を感じる。窓がかたかた揺れていた。場違いなほどに馬鹿でかい音は決して演奏になど使わないもう、ただただ醜いだけの雑音で、しかし沸騰しかけた二人の注意をこちらに向けさせることにはそれで十分だった。

理紗の静電気を帯びた液体窒素みたいな睥睨と、鈴童の棘の生えた氷柱みたいな視線を浴びる。

しまった、口論を止めたのはいいがこの後のことを何一つ考えていない。

行き当たりばつたりのその場凌ぎで、なんだか余計に現状を悪化させてしまいそうなのですが。

「どうしたのよ急に。言いたいことあるんだったら、はっきり言いなさい」

喧嘩を売るような口調である。

理紗のこんな言葉を自分に向けられたのは、思えば随分と久し振りに気がする。

これまでに何度も耳にしてきた口調と見てきた表情はけれど、どれも横顔でいつだって別の誰かに向いていたのだ。だから、というわけではないがこれは僅かに自分が怯んでしまった言い訳だ。背筋が震えたかと思った。隙間風に撫でられたように肩まで弾んでしまいそうな寒気を抑える。

しかもどうだ、理紗だけじゃない。

鈴童もまた同じ様に氷点下の眼光を俺へと放っているではないか。おいおい、おまえの反感まで買ったつもりはないぞ。

「そうね。貴方の意見を聞かせてみてよ。どっちが正しいと思うの？」

いつかの、対立モードの鈴童に問われる。

どっちが正しいって、なんだよ。なんの選挙だよこれ。

三人いる。それはつまり、二つの意思が拮抗することがないということを意味する。文殊の知恵も全員が同じ方向を向かなければ、

同じ物を張り通さなければ成立しない。この場合、つまり余った俺がどちらかに加担して一方を正当化しないといけないわけだ。

て、かなりプレッシャーだぞこれ。

なんて言ってられるほど易しい状況でもない。

多数決とか、どっちの味方だとかそんな問題じゃないだろこれは。どっちを選んだって確実に亀裂を生み出しちまう。最悪の役回りじゃないかよ今の俺さ。

「ッ」

舌打ちが聞こえる。

それは痺れを切らした理紗の出した音で、それが含む意味合い的には、先程のシンバルなんかよりも数倍巨大な波紋を作って室内に響いていた。身も凍る、そんな戦慄を纏った旋律だ。洒落にならねえ。

「あんたがそうやってはつきりしないから——」

往年のハードロックのように、下げたギターを壊しかねない勢いだった。

中国拳法を思わせる迫力で足を踏み出して、そこで言葉も怒声も停止する。

「……なんだか、もうわかんない。なんであたし、苛立ってるんだろ」

ぽかんと口を開けたまま俺もまた動きを止めてしまった。

なんでっっておまえ、それは俺が訊きたいくらいである。公言して苛立ってるとか言える神経も謎ならば、そもそもなんでそこまでささくれ立つ必要があるのかも同様に不明なのだ。この場にいる三人が全く同じ疑問を浮かべていただろう。

ちらりと確認したところ、鈴童も先刻までの敵意を忘れて啞然としている。

ぐしゃぐしゃと髪を掻きながら喉を鳴らす。理紗自身もつとも混乱しているご様子だが、この雰囲気はどうしてくれるんだろう。ある意味で悪化したとも取れる現状だ。

助けを求めていたのか無意識に鈴童を見てしまう。

しかし万能の代名詞たる生徒会長はお手上げと言った風に首を傾げるばかりだ。もはやかの天才にも理解不能な状況らしい。俺にどうにかしろと。買い被って貰っちゃあ困るのだが。

「十分休めたよ。……とりあえず、練習再開しようぜ」

俺に出来るのはこんな風にして。

普段の理紗の言葉を借りることくらいしか出来ないというのに。蛇足として落ちを付けるならこの後の練習風景だろう。暴走気味に突っ走る理紗を抑える者はおらず、鈴童はむしろそれを追い抜こうとする勢いだ。結局、俺は指摘される以前にもまして二人についていけなくなつたのである。やれやれ。

*

ではその後理紗との仲が険悪になつたかといえば実はそうでもない。

けろりとしている訳ではないが、それは先の疑問からのようで気味さだとかその類の感情は一切ないように見える。なにやら首を捻りながら煮え切らない表情をして時折唸りつつ、理紗は俺の隣を歩いていた。これはこれで、なんか小刻みに震動する仏像が真横をスライドしているみたいで不気味だ。それから擦れ違う生徒達の反応も痛い。

ちなみに今は体育館への移動途中で、生徒会長である鈴童は一足先に準備へ出張っていた。全員でいっしょに行けばよかったのだろうが、鈴童の方が練習中の空気に耐え切れなかったようだ。逃げるように去っていく後姿を思い出す。そうだな。素人にはきついよな、あのモードの理紗は。

創設祭当日までの残りを五日とした今日のこと。更に三日後には

リハーサルの予定も組まれている。今日はその準備というわけだ。準備といっても音響機器や照明機器の不備をチェックするなり、舞台だとか劇に使う大道具の出し入れ試験設置だとか、その程度のことである。本格的な舞台作り、体育館の改造染みた装飾は前日に行われる予定だとか。

相変わらず喉を鳴らし続けている理紗がふと気になった。

「おい理紗、おまえもうちょっと黙ってられないのかよ」

さっきから周囲の反応が寒々しくなってきたことに気付いていないらしい。

俺は理紗の後頭部を見ていた。

理由は簡単で、こいつが窓の外を眺めながら歩いていたらだ。窓を時々曇らせて、大きな瞳はガラスに映った俺の目へと向いた。鏡越しに会話してるみたいで気持ち悪い。

「黙ってるわよ。あたし、独り言でも言ってた？」

「自覚ねえのかよ」

それはいいとして。

「そろそろ落ち着いたか？」

「落ち着いたって、なにが？」

なにと問われても、それはさっきのことしか言い様がないのだが。

直接的な表現も憚られるのでどのようにして伝えようかと僅かに思案などしてみる。

結局上手い言い様が見付からなかったので、ここはお茶を濁しておくことにした。

「いや、別に」

見たところこの様子だともう大丈夫だろう。鈴童と顔を合わせてもこいつは何でもない風に言葉を交わすと思う。鈴童の側がそうもいかないだろうとは予想できるが。本人に自覚がないのならそこそ俺が気にすることではない。わだかまりは残るかもしれないが、それでも変に拗らせるよりはいいはずだ。

何せ理紗の心情である。

一晚寝れば元通りだろうよ。

「あのさ」

だというのにこいつは、俺が終わらせたつもりでいる話題を更に引き伸ばすつもりらしい。

「なんであたし、さつきあんないらついていたのかしら」

「知らん。俺に訊くなよ」

それは同じやり取りをしただろう。

おまえにわからないおまえの心境が、俺にわかるはずがない。以上。それだけだ。

「なんていうかさ、あんだと静歌が仲良くしてたら腹立ってきたっていうかさ」

「それこそ意味がわからん」

別に仲良くしてたつもりはない。

鈴童は気を遣ってくれてたらしきところがあるが。

その気使いが癪に障ったのなら、こいつが自分で言ってたことが正しいのだろう。実際のところ誰がこのバンド活動に最も熱意を注いでいるかといえば間違いなく理紗だ。だから残り時間が短くなってきた今、こいつがぴりぴりするのもわかる。ちよつとした甘えが気に喰わなかったとか、そんなところじゃないのか。

「そうなのかな。……ふうん。違う気もするけど」

ちらり、とこちらを見た理紗は無理矢理作ったみたいに笑って舌を出し、

「あんたがそう言うんだったら、そうなんでしょうね」

自分に言い聞かせるみたいに言った。

おいおい。

何を買って被ってやがるのかは知らないが、俺の言うことなんて当てにしないで貰いたい。

俺が知ってる理紗のことなんて、本当に、ほんの僅かな一部分でしかないのだ。俺にはおまえの言う式とかそんなのは理解できない。

とはいえそれでも、まあ、信じて貰える内はそれに肖っていよう。
いつかこいつも遠くなるのだから。

……。

あれ。なんだ。

なんで俺、こんな感傷に浸ったみたいなのモノローグなんてしてるんだ。

体育館にやってくる。

と、半ば準備は終わってしまったらしい。

三十分くらいの差で遅れた俺たちを向かえた鈴童に当たり前のごとくそれを伝えられる。

ていうかこの手際は……。どうやら鉄の生徒会長は衰えていないようだ。すっかり変な二人組みとつるむようになって鈍ったかと思っていたのだが。ところで、その変な二人組みとは俺たちのことだろうか。そうだな。自分で言っていて悲しくなる。

相変わらずの手腕を僭越ながら称賛してやると、どう見ても謙遜とは思えない態度で鈴童はそれを否定する。本気でこれが当たり前だと思っているのだから、そこにこそ鈴童静歌を化物たらしめているものがあるのだろう。

さすがは天下無双の天才生徒会長様だ。

「そんなじゃないわよ。別にわたしは」

これが当たり前だっただけ、と答える。

「どこにでもいる、有象無双よ」

「それって、物凄い存在感だよな」

間違ったのか。そんなわけないよな、鈴童だぜ。

四字熟語程度を間違えるようでは、例のことであっても本気で体調を心配してしまう。冗談なら止めてくれよ。自分のキャラを理解して欲しいものである。軽口程度にその旨を伝えてみると、しかし鈴童はぶくうと頬を膨らませて目を濁らせた。

「なによ、わたしだって冗談くらい言うのに」

「……」

真の美は共有してしまうと風化する。なのでこれは俺の記憶の中にだけ留めておくことにする。一つだけ言えることがあるとするならば、鈴童静歌を以ってその表情は反則技だった、ということだけだ。

そういえば成り行き上俺は鈴童に告白してしまったような過去を持つが、そのことについて鈴童自身はどう思っているのだろう。本気にしては、いないよな。あの後色々あったし、いちいち気にしてられる程の余裕もなかった。出来れば鈴童には過労熱と一緒にそれに関する記憶も排出して欲しい。

こんなわたしのこと、嘘でも好きだなんて言ってくれて、ありがとう。

本気にしてたら、そんなことは言わないか。

「どうかした？　ぼーっとして」

「なんでも。で、仕事は全部片付いたんだよな」

切り替えよう、と自分に言い聞かせる。

済んだことを気にするよりも今は先のことだけを案じるべきだ。

「大方の仕事は。後は片づけがちよつと残ってるくらいね」

冬なのにシャツを捲くった腕が眩しい。腰に手を当てる姿は一仕事終えた後の匠みたいだ。

こいつも仕事に達成感とかを感じるようになったなら、それは進歩なのかなとも思う。

残っている仕事は、なるほど鈴童の言った通りらしい。舞台道具とは関係のなさそうなダンボールの数々や脚立に何に使ったのやら立て掛けの梯子まで散乱している。これらを所定の位置、つまるところの用務倉庫とかそんなところに返してくればいいわけだ。これに関しては万能の鈴童でも一人では手間と時間が掛かる。肉体面では普通の女子なのだから、力仕事に向かないのは当然だ。

どうやらここの辺は俺の出番と見て間違いない。理紗は準備の完了を聞いて、なにやらステージ上でイメトレでもしているのか寝て

いるのか瞑想しているのか知らないが仁王立ちしていらつしやるし。遅れてきた手前、実行委員にこれ以上任せきるのも悪い気がする。

……しかしさすがにこの量は、一人ではきつい。男子とはいえ俺は別に体を鍛えているわけでもないのだ。肉体自慢なんてする気はないぜ。

「？ 私も手伝うに決まってるじゃない。一人でこれ、片付けるつもりだったの？」

「手伝うって……いいのかよ。もう十分働いただろおまえは」

「これくらいのことです十分なんて思っ
てないけど。実行委員にも協力して貰ったし、私が来たの
だつてついさっきよ」

それはまあそうかもしれないが。ここはやはり、

「よ……っと。ねえほら、そっち持つてよ」

聞いちゃいないよな。

折り畳んだ脚立の端を持ち上げて反対側を支えるようにと促してくる。どうやら見栄さえも張らせて貰えないようだ。ありがたいのだが少しはかつこつけさせてく
れてもいいだろ。それと、おまえも手伝え式女。壇上で楽器の設置場所を確認しているのか、一人床に指を指したりエアパフォー
マンスしている理紗に心の中で悪態を吐いた。

「……あのさ、前から気になつてたんだけど」

荷物を抱えての往来が三往復目に達した時に鈴童が呟く。今は二人で別々にダンボールを運んでいる最中だった。ちなみにこれらの搬入先は体育館から百メートルばかり離れたプレハブであり、昔は特別教室として使っていたらしいが今はただの物置として機能していた。このダンボールなんかはその物置の中でも元から倉庫代わりにされていた個室に運び入れる。

体育館から渡り廊下へ出、段差を踏み越えた時に鈴童は先の呟きを漏らした。

「あなたと彼女、どういう関係なの？」
えっと。

彼女っていうと現在ステージで勝手にギターを鳴らして注意されてるあの謎の人類のことか。他にいないよな。

改めて訊かれて気が付いたが、確かに鈴童は俺と理紗との間にある諸設定を知らない。特別仲のいい奴や中学が同じだった連中は知ってるだろうが、他の周囲から見れば俺たちの関係は不明だろう。

理紗に気のあるらしき男子から、そういうえは何度も同じ質問をされていたことを思い出した。そして俺はその度に同じ返答を行うのだ。「別に、ただの幼馴染みだよ」

又の名を腐れ縁という。家が近くてガキの頃からしょっちゅう遊んでたら、それはつまりそういうあれなんだろう。指事語の多い説明だ。国語のテストだったら傍線引かれまくりだな。

「幼馴染みってそんなに仲のいいものなの？」

「仲のいい、ねえ」

これでも四年くらい前は殺し殺される程の険悪な関係だったのだ。といっても誰も信じまい。俺も忘れたい。あれは黒歴史過ぎる。殺し合う仲まではいかなくても、悪くすればあれはそんなものよりずっと酷い。生殺し合う、みたいなもんだ。

「嘘だ、絶対嘘」

「ほんとだつての。当時のあいつにだけは死神のノートは渡したくないね」

などなど会話を挟みつつ、開けっ放しのプレハブに靴を脱いで上がる。物でこった返す室内はお世辞にも綺麗とは言えない。しかも荷物を抱えてでは二人で並び歩くことも困難なくらいだ。足の踏み場もかろうじてしか存在しない、そんな場所を縦に並んで進む。鈴童に先を行かせたのは間違いだった。これだと倉庫には鈴童が入ることになる。

「あ、大丈夫よ。全然平気だから」

本人がそういうなら、というところもあるけれど。気が乗らないのも本心だ。次は俺が先行しようそうしよう。

最初に運んだ脚立に鈴童が登る。外があれだけ散らかってるのに

ここだけは妙に整頓されている。ダンボールの位置まで指定されているから筋金入りだ。適当に置いて帰ればいいものを、そこは鈴童である。ばつちり指示通りの位置に重たい箱を収めていた。

「ねえ、そっちの箱貸して」

「はいよ」

と、持ち上げて、これが棚の最上段を所定の位置とすることに気付く。

「……無理すんなよ。その辺に置いておけば後で俺がするから」

「無理じゃないわよ、これくらい」

「いや、そういう意味じゃなくてさ。脚立の上で背伸びとかしたら危ないだろ」

「ん……それもそうか。じゃあ支えておいて」

どうも見当違いに捉えていらつしやるようだ。こいつは自分の召している物がどのような形態であるかを正しく理解していないらしい。とはいえ、「ほら早くして」とか急かされるものだから俺は黙ってそれに従った。下を見ながら羊でも数えているとしよう。誰も不幸にならないように。

「まだ、怒ってるかな」

「え、いや、百一匹」

「なにそれ、ダルメシアン？」

「……っ！ いや、別に俺は黒斑とか見てねえよ！」

「はい……？」

「……不可抗力だ」

「……あのさ。よく考えなかった私も悪いからお咎めはなしだけど、ちよつと真剣に話聞いてよ」

「……悪い」

世の中はラブコメみたいにはいかないらしい。

何の話だったっけ。

「……別に。けろつとしてやがったよ。ときたまテンションのおかしい時つてのがあるんだよ、あいつ。だから気にしない方がいいぞ」

「そう……なんだ。だったら、よかった」

しばし沈黙を挟む。

「つつか、何かありがとな。気使ってくれてたみたいでさ」

「別に、そういうんじゃないけど」

ダンボールを棚の角に付けて、押し上げるその途中の動作で一度停止した。

「また、前みたいなのを繰り返すのが嫌だったから」

ぼつり、とそんなことを言って時間を止めてしまふ。鳥の声さえ聞こえない冬の夕刻は、今までの労働で作り出した熱を一気に冷ましていった。残ったのは吐く息も虚しいだけの静か過ぎる停滞した空気と、硝子細工みたいに傷付き易い繊細な沈黙だけ。こういうのは勘弁して欲しい。鈴童は鈴童で重く捉えていたんだ、さっきのことを。

俺程度で下手に励ましたりフオローを入れたりしても無駄だろう。実際に明日練習に顔を出せば、今日のことがどれだけ些細かを自分で悟るはずだ。だから俺に出きるのはもっと別のことだと思う。例えば。

「よく見たら牛柄なんだな、おまえの——」

視界が暗転して顔面の中心、特に鼻孔に強烈な痛みを覚える。意識が残っているのが奇跡のようだ。何が起こったのかは想像するよりも先に直感で悟った。実に単純明快である。鈴童の蹴りがクリーンヒットしたのだ。

「黒の水玉！」

しかも余計な説明を付与させて。

俺は衝撃に対して素直に尻餅をつく。足場は人一人分しかない。俺は部屋の方へ、倉庫の外へと投げ出される形になる。それはつまり、どういうことか。痛みさえ引いていく寒気で理解した。

「——え？」

口は災いの元とはよく言ったものだ。毎回毎回、鈴童への言動は本当に気を付けなければならぬらしい。なんでこうも俺が奇をて

らった発言をした後には不運が連結するのだろう。冷めていて冴えていた思考でそんなことを自虐的に考えていた。

物理の問題だ。ベクトルとかそんな感じの、力の作用の問題。仮定より俺を蹴り飛ばしたのは誰だ。鈴童静歌だ。では鈴童が俺に運動を加えた際、彼女自身にはどのような運動が加えられたか。そして彼女は今現在どのような足場の上にいるのか。片足を上げて蹴りを入れたのだ。不安定な脚立の上で、そして片足立ちで——道化でもなければともに衝撃を押し殺せるはずがない。

鈴童の体は俺とは逆の方向に、壁側、窓ガラスの張った壁側に傾斜していきそして——

そこからのことはあまり覚えていない。気が付くと鈴童を抱えていて、落下してしまったダンボールの中身が散乱していた。硝子片は見られない。鈴童の外見にも何ら傷は見当たらない。背中が痛む……どうやらぎりぎりで間に合っただけらしい。上手く最悪の事態を回避することができたようだ。

「ご、ごめんなさい、わたし……っ」

「いや、大丈夫だって」

俺ももう少し考えて発言するべきだったのだ。

床についた手を上げて鈴童を押し返そうとする。密着されてると色々と問題だ。ちよつと離れてくれ。相当大きな音を立てただろうから誰も来ないとは限らないのだ。こんな場面を誰かに見られたらと考えると——

どたばたやかましく足音を鳴らして。

理紗が飛び込んできた。

「静歌いるッ！　ちよつと会長権力であの実行委員黙らせてくれな
い——……って、なにしてんの、あんたたち？」

うわ。

最悪じゃねえか。世の中はラブコメみたいじゃないと、先の言葉は撤回せざるを得まい。とんだ喜劇だ。なんて場面に登場しやがる。誰の書いた戯曲だよ、誰が立てた式だよぶざけやがって。

「いや、待った理紗、これは並々ならぬ事情があつてだな——」
鈴童を押し退けるようにその肩に手を置いて力を入れた時、違和感を感じる。いつもと違う。右の手首の感覚がおかしい。麻痺してるみたいだ。痺れて、なにがなんだか、

「……ッ——！」

わかつたときには遅かつた。齒の隙間から漏れ出た苦悶を聞いたのは鈴童だけだろう。その表情が一瞬、青ざめたように見えた。そしてそれを確認した途端に——手首の違和感は軋みを上げる崩壊のイメージを脳に叩き付け、痺れは激痛に変わった。

29 / 怪我の功名（前書き）

/

例えば夕暮れの教室で

春のまだ肌寒い風に歌声を乗せた

夏の空は透き通って

きつとずっと世界の果てまで続いているんだね

そんな風に廻っていた季節

一人だったわたしはもう一人じゃなかったよ

泣かないでいたいよ 大好きだから

ここにいて いつもみたいに歌ってよ

もうきつと君は忘れているだろうけど

二人歌った約束の歌を

—— 木漏れ日の下で呟いた言葉、今も覚えてる

ありがとう

同じ場所にいるよって、言ってくれた君が——

29 / 怪我の功名

/ 1

あるいはどちらが不運だったかを想像することで現状が少しましに感じられた。ほら、鈴童が窓ガラスに突っ込んで全身傷だらけになるのと、俺の手首が片方捻挫するのでは被害の及ぼす影響の重大さが異なるだろ。だからどちらかといえばこれは幸いな結果だったわけだ。

あの瞬間に果たしてそんな思考が潜在していたのかは不明なままにして、しかしようようにして映像的な記憶だけははっきりとしてきた。背中をぶつけて一瞬記憶が飛んでいたらしい。簡単な話だ、鈴童の体が倒れてくる前に壁側に回り込み受け止めた、とそれだけのこと。だがいかんせん体勢の不利と狭い空間が悪く作用したのだ。鈴童の体をキャッチしたはいいが勢いを殺し切れず倒れ込み、変な角度で手をついてしまったようだった。

あらら。

どじったな。

……とか言ってる場合なのだろうか。頭の中がクリアになったのはいいこととして、どうしよう。なにをかって。決まってるだろ。冷え切った目でこちらを見下ろすこの式女をだよ。

「なんだ、仲良く片付けでもしてるかと思ったら。ごめんね空気読めなくて」

昼ドラみたいなのやめて。

「な、なにやってるのよアンタたち！ ここここ、ここは、学校なのよ！」

誰だよおまえ。

立場的には鈴童の台詞だろ。

「もう、そういうことするならあたしも呼んでよ」

おまえ手伝いもしねえでギター振り回してたろ。

「ねえ」

「なんだよ」

「汗出てるわよ」

指摘されて気付いた。右手で額を拭——おうとして咄嗟に左でそれをする。確かに。一仕事して爽やかに搔いたのではないだろう汗が滲んでいる。壁に凭れているからわかるが背中も同様だ。

「息も荒いみたいだけど……ひとつ言わせて貰っていい？」

「なんだよ」

「気持ち悪い」

どストレートに言いやがった！

精神面に推定ヒットポイントの七割分くらいのダメージを受ける。肉体面ではちなみにじわりじわりと痛みが染み渡ってきていて笑えない。毒の沼地にいるみたいだ。

「……まあ、いいけど」

なにがいいのだろう。

理紗はむすつとしてそう言うと言を返してしまった。

「好きにすれば。あたしには関係ないんだから」

「いや待てよ理紗」

なんだこいつ。

様子が可笑しいだろ明らかに。

「おまえ……なんか怒ってないか？」

訊いてしまった刹那、入口に散乱したスリッパの一つを叩き付けられた。ペシーンとか、めちゃくちゃいい音が響く。これで潰される黒い連中の気持ちが少しだけわかった気がした。俺はスプレー派だけだ。

「怒ってない……、知らない！」

何故か言い残して、怒涛の勢いと天を衝く怒髪を張り上げてプレ

ハブを倒壊させかねない激しさで戸を閉める。それでも直、ふん、と鼻を鳴らしたのが聞き取れたのは誰が凄いのだろうね。

さてと。

そろそろ強がるのもやめていい頃か。

右の手首を左手で触れる。

目玉が飛び出すかと思うくらいの痛みが神経を引き裂いた。

「ッ——て……え」

声にびくりと鈴童が反応する。

「やっぱり、手首——ちよつと見せてッ」

呆然としていただけの鈴童に急に魂が舞い戻ったみたいに思えた。患部を避けて右手を強奪される。直接触れていないのに勢いよく揺らすものだからそれだけで痛い。ていうかよく見たら痣みたいになつてないか。

「大変じゃないこれ、早く保健室行かないと！」

言われなくてもそうするさ。

綱引きみたいに鈴童が腕を引く。それでもカブは抜けません、みたいな光景だ。俺は自分が怪我をしたという自覚を持ちながらそれでもこの状況をどうしても客観的にしか見ることが出来ない。これからどうするか。それは怪我云々ではなくもう五日後に迫った創設祭の、どっかの式少女が提案したバンドへの不安や懸案だった。

さてどうするか。

別にどうにでもなるだろう。

俺がいなくてもベースとギターで出来るように曲をアレンジすれば。

*

保健室の先生（今回はそれに扮装した鈴童先生ではない。本物だ）

の診断結果を発表しよう。

おおよその予想が付いていた通り捻挫だそうな。全治は早くて一週間。つまり七日間だ。

それを聞いてどこかで安心して自分がいることに気付く。さつきは自分がいなくてもとか考えていたくせに、少しでも希望が見えるとこれだ。どうも俺という人間は状況に流され易い性格をしているらしい。一応紹介状を貰って近くの診療所に向かい診察を受け、今は手首に湿布だとか包帯だとかを巻いた状態だった。

外はすっかりと日が落ちて暗い。

そんな帰り道を一人で歩いていると、隣に並んでくる足音があった。

理紗——ではなくて鈴童だ。

保健室までは同行してくれた鈴童だが、まだ体育館の片付けも途中ででありそれ以降は行動を別にしていた。ちなみに鈴童の名誉と情の保障の為に付け加えると、鈴童が残りの仕事を片付けに体育館へ戻ったのは俺がその理由で半ば無理矢理追い返したからである。あまり騒いで大事にするのも嫌だし。特にこんなことが、今のあいつの耳に入った場合を考えるとぞつとする。

保健室に行つてこの場所を聞いたのか、しかしちょうどいいタイミングで鈴童も現れたものだ。

「——まあ、だから……取り合えずどうにかなりそうだ」

「どうにかつて？」

「創設祭だよ。他に何があるんだよ」

ぱたりと鈴童が立ち止まる。驚き半分の顔で見上げてくる視線は非難とそれから意味がわからないとでも言っているようだ。

「バカなこと……本気じゃないでしょ？　だつて後五日しかないのに、そんなのでライヴなんてしたら確実に——」

「大丈夫、迷惑はかけねえから。とりあえず当面の問題は練習がでないことと三日後のリハーサルだ」

「だから違つて！　誤魔化さないでよ」

誤魔化してるつもりはないけれど、鈴童は相当ご立腹な様子なのでその威勢に黙らされてしまう。

「怪我してるのにライブなんて、そんなの確実にドラマーとしての生命を潰すことになるじゃない。……ううん。別にそれでいい、って貴方は言うかもしれない。だけど違うじゃない。ドラムだけじゃなくても、自分の体のことでしょ。なんで、もっと真剣に考えられないの。可笑しいじゃない、そんなの」

鈴童の言う通り、俺は別にこの先ドラムが叩けなくなっても構わない。そう思ってるのは事実だ。どうせもうバンドなんてやる機会はない……まあ、ないだろう。ただの捻挫を甘く見ているわけではないが、後遺症云々もそこまで気にしちゃいない。実際鈴童が大袈裟なところもある。この怪我に負い目を感じているからだろう。ありがたいが、でも素直には聞き入れられなかった。

一つだけ不安なことが残る。

手がどうなるかとかそんなことより、ライブが成功するかどうかについてだ。今でさえ二人についていけない自分が手負いになっていては余計に話にならない。俺が足を引っ張って台無しにするのはさすがに嫌だ。だから懸念はそれだけだ。そこにどんな苦痛があるか、どれくらい過酷なのかは今わからないので棚上げにしておいて、むしろそういう観点からメンタル面がもつかが不安なのだ。

そう言うとき鈴童は遂に呆れから真正銘のバ力を見る目に眼差しを変容させた。もうこの怪我がどんな風にして出来たかも今は覚えていないんじゃないだろうか。それくらいに心底呆れた顔をしている。

「意味が、わからない。なんでそこまでこだわるのか、わたしにはわからない」

「おまえにわからないことが俺にわかるかよ」
どんな式なら導き出せるんだろうこの感情は。いつから俺がこんな熱血に生まれ変わったのかもついでに求めて欲しい。それこそ叶わないな。俺の隣には現在例の式娘が不在している。

「とにかくさ、わからないなりに今はバカやってることにするよ俺は。答えなんてその後でいい」

「かつこいい……つもりなの？」

あ、つつこまれた。

客観的になつたら相当恥ずかしいなおい。鈴童の冷めた口調だと外気の寒さも相俟つて余計に。穴があつたら落ちていきたい。

「……はあ、止めても無駄なんでしょうね。私ときもそうだったみたいに」

ため息の後居直るように凜として、鈴童が前に出る。こちらの進行を遮って立ち塞がる姿は自棄になっっているみたいに見えた。なによりも、自分がどうしてこんなことをしているのかわからない、といった風である。

「練習方法、ひとつだけ案があるんだけど」

30 / イメージの秘策

/ 2

朝練をサボってしまったことに罪悪感こそなくても焦りだけは生まれていた。

そんな今朝八時二十五分のことである。

最近ではいろいろあつてこの時間に登校することもなかったのが妙に慣れない感じた。本来ならば生徒会の業務もあるのもっと早く到着しておくべきだったのだがそれさえ忘れていた。たまにはこういう日があつてもいいだろう。いいのかな。

灰色の曇り空が割れ目を作る。十二月の空に晴れ目が見え始めるのを不意に見上げた。

ふわり、と。

視界を横切るように飛び去って行った影に気付いたのはその時だ。咄嗟に振り返ってその影を目で追う。風に乗って悠々と飛来するそれはスタンダードな形をした紙飛行機だった。他の生徒は気付いている者もいればそうでない様子の者もいる。しかし立ち止まって眺めているのは俺だけだ。さぞ他の生徒にしてみれば邪魔なことだろう。

時間はまだ少しだけ、本当に少しだけが残っている。しかしそんなことは頭になく、気付けば俺はその紙飛行機を追いかけていた。飛行機が校門横の木に引っ掛かって落ちてくる。これがなければもっと遠くまで飛んで行ったかもしれない。

拾い上げて見ると案の定、紙面には文字と線と音符の羅列が踊っていた。

なるほど。なんだこりゃ。

悟ったようなそうでないような、確信を一つと疑問を一つ手に入

れて俺は屋上へと顔を向ける。
予鈴が鳴ったのは丁度そのときで、同時に目に入ってきた時計の針は既に八時半を回っていた。

＊

教室では理紗が頼杖について窓の外に広がる下界を見下ろしていた。

表情は髪で隠れて窺うことが出来ない。ショートホームルームが終わると俺は空席になっていた理紗の隣に腰を下ろした。反応してこちらを振り向く。他に誰がいるってんだよ、と先につっこもうと思っほどこいつの吐く言葉は予想が付く。

「なんだあんたか」
ほらやつぱり。

辛辣な目付きで一瞥されておまけにため息も貰った。なぜか物憂げなご様子である。

「なんで朝練来なかったのよ」
「悪い、寝坊した」

さて、ここからが問題だ。
理紗に何と切り出そう。

もちろん手首を捻挫したことを素直に伝えることも出来るが、それは上手い方法ではない。懸案事項を増やすことに意味はないはずだ。こいつなら上手いこと自分の式を弄って対処するのかもしれないが、それが必ずしも有益な結果になるとは思えない。

平気でギターとベースだけでやろう、なんて言い出しかねないかな。

そうなつては俺の苦勞も水の泡になる。……いや、それだけか。
取り合えず今はいいか、そんなこと。

問題はここからのだ。

こんな状態だと当然練習にも参加できやしない。しかし昨日の今日だ。突然正当な理由もなく練習に出ない、なんて言えるはずもなかった。だってこいつ、正当な理由があったとしてもそんなこと認めないだろうしな。

ならばどうするか。

考えろ、それを考える為に寝坊するほど遅くまでいろいろ考えてきたんだろうが。

何も思いつかなかったけど……。

「はあ」

理紗が大きなため息を吐いて沈黙を終わらせる。

依然として俺を見ないまま窓に語りかける。思えばその横顔をまともに見たのはこれが最初だ。

「あんた、やる気あんの？」

「なんのことだよ」

「バンド」

「……」

見透かされたみたいなのを言われる。

「引いてはあたしの彼氏作りも」

「どうだろうな。おまえにはどう見えるんだ？」

「やる気なし。これっぽっちも」

ちよつと酷くないか。

「練習してても何か機械的っていうか、熱意を感じないのよね」

「おまえの主観だろ」

「あたしの主観が全てでしょ」

久し振りに出た、唯我独尊発言！

「だかね——」

故意に言葉を切って理紗が振り向く。

窓は開いていないのに柔らかな髪は風にそよぐように流れていた。大きな黒い瞳が二つ、こちらをじつと観察するみたいに見据える。

遠目に様子を窺う猫みたいだ。近くににいるのに遠くを見ているみたいな眼差しがそれを思わせた。

そうして少しだけ間を置いて理紗が言う。普段ならこんな風にためを作ることのない式少女が空白を置いたのは、もしかしたら迷いがあつたからかもしれない。果たしてそれは俺の懸案を払拭する救いの言葉に等しかった。

なの、だけど。

「——今日から練習、自由参加にするから」

どこか気持ちが悪い。気分がよくない。

だってそうだろ。

本番まで後四日しかなくて、リハーサルまでは二日しかないんだぜ。

なのにこいつがこんなことを言うなんて、どう考えても可笑しいだろ。

しかし気の利いた切り返しは思いつかなかった。どうあっても最終的にはこの形に持っていかなければならなかったのだから、これが最善だったはずだ。言い聞かせるようにそれにあやかり、後は始業の鐘に従って席に戻った。

なんなんだこんちくしょう。

何かが気に喰わない。何かが。

*

とはいえ、本気で本番まで一切練習しないつもりだって毛頭なかった。

今日から当日まで療養して怪我の状態を回復したとしても、技術が追いつかなければ意味がない。本来なら俺は他の二人よりも三倍は練習しないといけない身なのだ。……いやこれは理紗の言い様な

のだが。事実なのだから仕方ない。そんな風に自分でも受け入れているからじつとしていられるはずなんてなかったのだ。

そうはいつても、手首の捻挫も事実だし根性だけでどうこうなる話でもない。ドラムがどれだけの負担を患部に与えるかは自分でもわかっている。練習で容態を悪化させたのではそれも問題だ。

ならばどうすればいいのか。

手首に負担を掛けずに練習するしかない。

そんな魔法みたいな方法があるはずがない——のだが。

「鈴童、マジでそんな方法で練習するのか？」

「他に方法がないんだから仕方ないでしょ。なにもしないよりもましよ」

アンプにベースを繋ぐ。鈴童はささつ、とチューニングを終わらせると自分の準備はそれで終わりだと言うように俺に目配せを送ってくる。いつぞやの対決シーンを思い出さないでもない。今回は敵対ではなく共同しているわけだが。

場所はいつもの旧音楽室ではなかった。従ってここには理紗がない。俺と鈴童の二人だけである。これを秘密特訓と呼ばずしてなんという。少年漫画みたいな熱い展開を期待してもいいだろう。：しかし実際に見てみると甚だしく地味な光景になるのだろうけれど。

俺はスティックを握って軽く腕を振った。強く振れば多少痛むがそれでも気にならない程度だ。

息を深く吸い込んで、

「わかったよ……」

こうなりや自棄だ。

スティック同士を重ね合わせる。負担の少ない始まりの合図は音を鳴らして——ここだけは音を出して——鈴童の演奏が走り出した。相変わらずの絶大な演奏力は一旦弾ければ手の付けようがない。だが今は以前とは違う。何度も言うが今は対決ではなくただのセッションだ。鈴童の演奏はこちらの進む道への導となり、そして踏み外

した音の修正を行う。

それを頼りにして——俺は自分の奏でる音を幻聴した。

ドラムは叩かない。一切それに触れずただただ動きだけを再現する。空を切るスティックの数メートル先にドラムセットを置いたこの配置こそが鈴童の出した提案だ。手首の安静と練習による経験値の獲得が必要ならば、どちらも叶えるにはこれしかない。一人だけでセッションを架空に生み出す鈴童の並外れた実力がなければ本来成り立つはずもない練習方法だった。それに当然のことながら、この方法で自分がイメージする、させられる演奏と現実とでは誤差が生じるだろう。いくら鈴童のリードが常軌を逸していてもそれは当たり前だ。

けれどもなにもしないよりは断然いい。今は藁にもすがらないといけない状態だ。後本番までは四日、リハーサルまでは二日しか残っていない。絶対にどうにかしないと。

一曲目を終えたところで鈴童が一度演奏を切った。

「どう、一応イメージくらいはできた？」

「十分過ぎるくらいにな。これなら何とかなるかもしれない」

「そっか」

本心から安堵して喜んでいる顔をして鈴童が笑った。

「よかった。じゃあ次に移りましょう」

次の曲は、と曲目を思い返しているようだ。

鈴童は指先で弦を弄りながら目だけを軽く上方へ向ける。

ライブで演奏する曲目は全部で四曲。そして現在完成しているのが五曲。リハーサルは一曲目に完成して歌詞も付いた「Siren」と決まっている。残りの三曲は他の四曲の内から選曲されるので一曲は丸々練習する必要がなくなるわけだ。

だからといってどこかに山を張って練習することもないと思うが、というかこの時期に至ってまだそれが決定していない時点である問題だ。

そこでふと今朝のことを思い出す。それはあの紙飛行機で、もっ

たとえば飛行機を解体して浮かび上がったあのスコアだった。どうやらギターのものようだが、それを眺めただけで旋律が思い浮かぶ俺ではない。

しかし鈴童ならば、と出来心が口を動かし手を動かした。

鞆の中から引つ張り出した紙面を鈴童に見せてみる。

「これ、彼女が？」

「ああ、多分」

「なんだか変な折り目がついているみたいだけど」

「飛行機だったんだよ、それ」

理紗の昔からの習性で、奴は破綻した式（と本人は言っている）を紙面に落として飛ばすのだ。今日も多分屋上辺りから飛ばしたのだろう。場所は選ばなかったと記憶しているが、角度とか方角的には思い当たる場所がそこしかない。教室の窓から飛ばさなかったのはなんでだろう。

鈴童は譜面に視線を落としながらベースを弄っている。

初めて鈴童の演奏を聴いたときは、あの時は本当に五分もしない内にスコアを組み上げてしまった鈴童だったがこれには苦勞するらしい。聴いたこともないギターの旋律を譜面だけでベースに変換するのだ。どれほどの至難かは俺にもわかる。

だがそこはさすがに鈴童だ。

一通り目を通した後には既にメロディを口ずさみ始めていた。聴き取り辛く、本人は指の寂しさを紛らわせている程度の意識なのだろうがベースの音も聴こえ始める。

そんな状況が十分ほど続いた気がする。

熱心に暗号を解読しているみたいな鈴童が思い出したみたいに顔を上げた。

「て、そうじゃない。そうじゃなくて練習でしょ」

「ごもつとも。」

これにかまけてサボろうと思っていたわけではないのだが、鈴童はどうやらそのように勘違いしてしまったらしい。教師から説教さ

れる気分だ。俺は初めて行動から鈴童とその姉の血縁関係を感じ取った。妹の方が教師向きだと思う。

知リたかったことは一つだけだった。

あの譜面が今まで演奏したことのある曲なのかどうかという、それだけが知リたかったのだ。鈴童の反応を見る限りではどうやら完全に新曲らしいことがわかったのでそれで十分である。むしろ待ち惚けをくらっていた気分だ。言わないけど。

まだ曲のレパートリーを増やすつもりなのか。

「でも、一つだけ気になるかな」

「なにが」

「このスコア、前半から後半にかけてだいぶ雰囲気が違うのよ。徐々に変化してるんじゃないかって、ずいぶん急に。簡単な言い方をする、スリーピース用のスコアからソロのスコアに変わって行ってるみたいな。初めはバンドスコアの体だけど、後半はほとんど弾き語りみたいな感じなのよ」

「言ってることはわかるんだが、意味がわからん」

「書いてる内に気分が変わったとか、そんなのかな。一応、これで完成してるみたいだけど」

だったら、これは落書きみたいなものだったということだろう。

理紗自身も没にした曲は何曲かあると言っていた。これもその内の一つとみて問題ないと思う。どっちにしろあいつの手を離れた時点で、紙飛行機という形になった時点でこれは用済みだ。俺には何の関係もない。

「さて、もういいでしょ。手は大丈夫？」

慣らすように手首を捻り、まわす。

さっきの演奏後に比べれば違和感もない。少し話している間に回復したみたいだ。これくらいのインターバルがあるならライブも乗り切れる気がするが、そうもいかないんだよな。四曲をほとんど間隔なしでやり切らないといけない。そうなればどこまでもつかはまだ不明だ。

「大丈夫だよ」

「それじゃあ再開しましょ。えつと次は――」

その後は完成した順番に練習を繰り返した。

一曲ごとのインターバルはおよそ十分。五曲のシークエンスを三回廻して今日の練習を終えた。手首の状態は二順目の後半から軽く痺れが出始め、三順目には二曲目から軽い痛みを伴うことがわかった。これで実際には本来の負担の半分もないというのだ。さすがに焦る。

残り三日でどこまで回復するのはわからない。

そもそもリハーサルの一曲さえまともに演奏出来るかわからないのだ。

どうしたものか。

どうにもなりやしないのだが。

それでも。

「まあ……どうにかするしかないんだよな」

帰り道、星に手を翳して呟いた。

これがロープレとかだったら月の光で急速に傷が治ったりするものなんだろうけど。世界はラブコメでもなければファンタジーでもないということは知っている。なんだっていいさ。最悪、ホラーにだけならなければどうにでも。

しかしよくよく考えてみれば序盤から『式』とか連呼してやがる女がいる時点で、ジャンルはSFになってしまうのではないだろうか。

31 / リハーサル前日の約束（嘘）

/ 3

ライブの曲目が発表されたのは翌日になってからだった。

四つの曲名が記されたルーズリーフを放課後になって手渡される。手渡されると言うよりも押し付けられると言った方が的確な様子だが。午後最後の授業が終わるなり椅子を引っ繰り返す勢いで立ち上がった理紗は、そのままずんずんこちらにやってきて令状を叩き付けるドラマの刑事みたいにそれを披露した。

この紋所が目に入らぬか、とても言い出しそうな姿である。

回覧板でも受け取る気分でルーズリーフを摘み上げた俺はそれを半分に折って鞆に仕舞った。

「今日も練習来ないわけ？」

「悪いな。リハーサルは明日だし、こっちもこっちで忙しいんだよ。ていうかおまえも生徒会なんだから手伝えよ。」

「別に心配してるわけじゃないけど、それで本番大丈夫なのあんた」「どうにかするさ」

「やる気、あんの？」

「それなりには」

短い受け答えの間も理紗は静かにぴりぴりとした空気を振り撒いていた。目が温厚じゃない。威嚇するみたいに尖ってる。だがいつもなら不満を溜め込むことのないこいつがこんな風に押し黙っているのは何だろう。それが不気味で目が合わせられなかった。

理紗は組んだ腕の上で指を世話しなく動かしている。爪先も連動してかつ音を立てていた。

何か言おうとして呑み込んでからたつぷりと五秒の経過を待って、

そして口を開く。

「あんたさ、何か冷めちゃったわよね」

「そうか？」

うん、と首を縦に振って言う。批難されてる気分だ。

俺自身はまるでモチベーションに変化を感じていないのだが、理紗からしたらそう見えるのだろうか。だとしたら勘違いだと言っておこう。言わせて貰いたい。

「静歌が入るまでの方が俄然やる気だった」

確かに鈴童が入る前と入った後では俺も熱量に違いがあるとわかる。

しかしそれは鈴童をバンドに引き入れるという過程が煮詰まり、それに対するテンションが上がっていただけで、バンドに対してのそれは今も変わらない。鈴童が加わった今となってはその熱意が消えてしまっても当然じゃないのか。

そんなことを言ったのが悪かったのか、無表情なのに理紗の様相は更に陰しくなる。

「バンド自体じゃなくて、必死になってたのは静歌とバンドをすることだったの？」

なんて、こればかりははっきりと苛立ちを窺える口調で訊かれる。ちよつと待て、何がそんなに気に入らないというのだ。鈴童をバンドに加えることは、自分の式にも必要なことだと言っていたはずだろ。事実、鈴童の存在がなければ今の状況はない。当然、活路を開く為には鈴童を引き入れなければ何も始まらなかったのだ。なら、それに対して必死になるのは当たり前じゃないのか。それを責められる意味が解らない。

舌打ちしたような音が聞こえた。

けれどそれは空耳だろう。

ため息みたいな音が聞こえた。

だけどそれも聞き違いだ。

理紗はいつものように髪を翻し、足音を高らかに憤然と鼻を鳴ら

した。

「あんたがどこで誰と何をしてても知らないけど、ライブだけは成功させるわよ」

スライド式の扉を蹴飛ばして開けかねない歩き方だが、理紗は存外に大人しく扉を半分ほど横に流し、

「ちゃんと協力してよね、あたしの彼氏作りに」

感情の感じられない声がそう言った。

そしてそれは、空耳でも聞き間違いでもなく、いつまでも反響して頭の中に蟠る。

ぴしゃり、と戸が閉まる。

教室に残されてしまった俺は拳を作って側頭部を小突きながら考える。なんだろうもやもやとして気分が晴れない。どうにも調子が狂っていけない。ああ、もう。そういえば忘れていた。これがそもそも理紗の彼氏を作る為の活動——式なのだと。

思い出すと途端にそれがリピートされた。思い出さないようにしていたのか知らず忘れていたのかは、もうわからないが、なんだろう、思い出したくなかったということだけは確かにわかる。

霧がかかった思考の中で思う。

鏡がないから確かめられないが、今の自分の表情はおそらく、さつきまで見ていた理紗の表情によく似ているだろう。なんとなく、そんなことを考えて変なところに行き着きかけた思考を誤魔化していた。何をしているんだろうね、俺は。

*

ではお待ちかね。

皆の衆発表しよう、これが我々の記念すべきライブプログラムである。

……締まりねえな。

『Siren』

『Last season』

『青い鳥』

『窓の向こうの空の果て』

という曲目に決定されたい。

五曲中から選曲されるのだから、こんなものが発表されたところでそんな驚きもしないのだが。とはいえ練習メニューが若干でも絞られたのは確かだ。それに順番や曲目がはっきりすることでペース配分も考えられる。どうすれば最後まで走りきれるか。

万全の状態ならそんなことも考えなくて済むのかもしれない。

万全じゃないから、なんとか乗り切る方法を発案しなければなら
ないのだ。

「……意外っていえば、意外だよな」

「そう？ わたしはだいたいこんな感じだと思ってたけど」
けるりとした顔で鈴童がルーズリーフを返却してくる。

俺だつて少しくらいは予想していたりもした。頭に『Siren』
が来ることと、二曲目が『Last season』までは予想通
りだ。だが違っていたのは三曲目が『青い鳥』だったことだ。アッ
プテンポの二曲を続けた後に更に同じタイプの曲を続けるのはどう
なのだろう。

確かに『青い鳥』はバラードとして扱える曲かもしれない。しか
しあからさまなそれとは言えず、四曲中最速のテンポで演奏される
『Siren』に引きを取らない疾走感の曲調である。二曲目、あ
るいは四曲目に本来なら持つて来られるべきだろう。

アップテンポ二つの後に曲調の柔らかな『窓の向こうの空の果て』
を持つてくるものとばかり、考えていた。そうなればこちらも少
しくらいは負担を軽減出来て助かると思っていたのだが。

「曲のメッセージ性を考えたら、必然的にこうなるのよ。でも確か
にきつい順番でもあるわよね。わたしから変更の案でも出してみよ

うか？」

「それは止めといた方がいいだろ」

「どうして……？」

何故かって、そりゃあ。

……何故だろう。というよりも何て言えばいいのだろうか。そうすることが理紗を下手に刺激しかねないというのはわかってはいるのだが、それを鈴童に言ってしまうことが何となく憚られた。とにかく。

「これで何とかしよう。青い鳥まで乗り切れば、後は何とかなるんだ」

「わたしはそこで燃え尽きるんじゃないのか、って思ってるけど」
全曲中最後に完成したのが『青い鳥』だ。だから練習した回数も他より少なければ、実際の難易度も最大の曲である。そんなものが疲労の溜まった後半で、しかもあの二曲の後となるとそれは――…
…考えるのも嫌になるな。

難しい難しいと言っていても仕方がないことだ。

少しでもまともにやれるように練習するしかない。それくらいしか今は出来ないんだから。

「とりあえず、これで一回練習してみよっか。実際にやってみないとわからないんだし」

確かにその通りだ。

一度演奏してみたら、あれ、意外となんでもないじゃん、ということも有り得る。その逆もまた然りではあるが。それならそれで対策を考えよう。断る理由もなく頷く。俺の準備はいつでも万全だ。椅子を後ろに引けばいいだけだからな。

そして準備の必要な鈴童は、ベースをアンプに繋ぐと不可解な間を作って止まってしまった。

どうしたのかと訊くより先に、おずおずと顔をこちらに向けた鈴童から逆に問われる。

「歌、あつた方がいいかな？」

というと、つまり。

「だから、わたしが歌った方が実践っぽくて練習になるって言うてるのよ」

あれ、疑問から断定に変わってるぞ。

「いやまあ……だったら、頼む」

正直、こっちは歌詞を気にしている余裕もないので好きにしてくれるといい。

気が散るとかいうことはないし、その方が本番に近い感じになるのは確かだ。歌詞に合わせたこちらのテンションというものもあるし。聴いている余裕がなくても耳には入る。無意識的にも演奏は変化してくるはずだ。ならそれにも慣れておかないと、か。

だったら、と立ち上がった鈴童が息を吸い込む。スイッチはそれだけで切り替えられたのか、緩んでいた空気が冷たく張り詰めた。沈黙に体温が引いていく感じた。ここからは自分達の音で熱を作り出さねばならない。

スティックを合わせて始まりの音を鳴らす。

鈴童の歌声は平生のクールな彼女のイメージと違っていた。録音を一度聴いているので驚きこそしなかったが、生で聴いてみるとそのギャップはより大きい。無邪気というか、なんというのかわからないが、歌声に体温を感じるとでもいうのだろうか。

理紗の声に重ねられているときには気付けない、それが鈴童の作り出す歌声だった。

遠くの空へ駆け抜けて——その道標になる歌だけを胸に響かせてふと思いつく。そういえば俺は今実際にはドラムを叩いていない意識すると幻聴は遠くへ離れていくが、無意識の間にそれを聴いてしまっていた。この練習の意味であるそれが、却って不安だ。本当に自分がこんな風に音を出しているのか。こんな風に、鈴童の音についていけているのか。考え出すときりがない。

普段通りの練習風景に歌声が加わっただけでここまで違う。漠然としてただ腕を振るのではなくもっと別の意味が見つかった。出来

るかじゃない、そうしないとならない。そんな不安やプレッシャーをはね除ける為の練習なのだ。

インターバルを挟んだ昨日と同じ練習の後に、今日はライブと同じ休憩なしの一巡を加えた。

腕に蓄積する疲労は確実に増えていたし、手首への負担もそれなりに大きくなる。だがこれくらいなら大丈夫だ。……いや、大丈夫なのか。だってこれは実際にドラムを叩いていない。本番ではこの倍以上の衝撃に耐えないといけないのだ。

「——っ」

頭に浮かんだ弱音を吐息といつしよに逃がす。

ネガティブな未来予想はなしだ。現実にとそれと直面すればその時はその時でしかない。そんなまだ不確定な未来に今を潰されていては世話ないだろう。だから今の俺に出来るのはこんなことでしかないけれど、腕を止めないことなんだ。

青い鳥の旋律が駆け巡る。

童話を題材にした、それなのにスピーディーなガールズロックは全曲中最大のテンションだ。

近くににいるから気付けない、結局探していた幸せの青い鳥は直ぐ傍にいたのだという、見落としがちな手の届く幸福を暗示する物語それを模った歌詞だった。

ふと思う、理紗は何を考えて歌詞を作っているのだろうか。

あいつのことだから意味はないのかもしれない。……きっとそうか。頭の中が四次元ポケットみたいに混沌とした奴なのだ。外側から覗こうとすればこっちが混乱しちまう。

綺麗な色した青い羽。

赤い色の空に飛び立った。

——君がいない日々を映した、あの空——

「あ、づ——ッ」

音に浚われかけていた意識を引き戻したのは皮肉なことに手首の痛みだった。

青い鳥の後半、最後の疾駆を完走できず、咄嗟に走った痛みにもスティックを落とす。

そうは問屋が卸さない。その店主を殴ってやりたい気分だ。こんなところで、後、一節だろ。

異変に気付いた鈴童が演奏を止めて近寄ってきた。落としてしまったスティックを拾い上げ、手首を押さえる俺へ何か声を掛けようとしている。言わんこっちゃない。というべきか、それともスパルタに、練習の再開を指示するのか。どんな態度を取るべきかわかっていないような顔だ。

「すまん、気、抜いてた」

「……ペース配分を考えると、とは言わないけど、少し飛ばし過ぎだったのかな。そうだったら、逆に助かるんだけど。今日ももう三順目だし、そういう意味でのこの結果だっていうなら、まだ救いはあるかな」

「おまえそれ、本気で言ってるのか？」

「さあね。でもわたしは医者じゃないから、肉体的な治療は出来ないわよ。貴方がなんて言えば楽になるのかもわからないし——だからわたしはわたしとして、客観的に言えることだけを言ってるまよ」

だから、とその先の言葉に繋げる。

何を言ってくるのか、それが中途半端な励ましの言葉だとした俺はどのように返せばいいだろう。

しかしそんな言葉は必要なかった。鈴童が俺に言ったのは、「順当に、流す程度なら一曲ぐらいどうにかなと思うから、明日はそうして」

気休めでもなかったのだから。

酷く冷たい現実を見据えた、感情のないテンプレートに載せた、あるいは鈴童の懇願だったのかもしれない。いい？ と迫ってくる鈴童に曖昧な返事を返すと機嫌を損ねてしまったようだ。目を細めて頬が膨らむ。冗談めいているが本当に怒ってるみたいだ。

「約束してください。そうしないと、本番で泣くことになります」
小指を出してくる鈴童は、彼女の姉の面影があった。
はあ、そういう戦略ですか。
仕方がなく小指を絡める。
でも悪いな、鈴童——俺はけっこう嘔吐きなんだよ。

32 / 青い夢の先

/

かくしてリハーサルの日とその瞬間がやってきた。

舞台の上に控えるスリーピース（正式なバンド名は決まっていなかったりする）の各々はそれぞれに最終調整を行っていた。本番のプログラムと同じ順番で行われるリハーサルにおいて、トップバッターは生徒会つまり俺たちである。

なので我々は審査員である実行委員の視線に晒されながら、幕の上がつた壇上で待機していた。

三人の配置はこれまた判で押したみたいなテンプレだ。

ドラムを中央後方に配置し、ギターを正面から向ってやや左よりの中央、ベースは右端といった具合。三人を頂点にして三角形を描けば少し歪な形になる。実行委員がいそいそと準備を進めている間に、そろそろ三十分ほどが経過しようとしていた。

どうにも、こういう状況を見ると鈴童の存在がどれだけ大きかったのかを考えてしまう。タイムテーブル一つまともに回せていない現状に、鈴童の不在が一因として存在しているのは目に見えているからな。そうして遅れること半時、ようやく全ての準備が整ったらしい。実行委員が折りたたみ椅子に腰掛け、オッケーサインをこちらに送った。

理紗が一度ステージを振り返る。アイコンタクトというほどたいしたものはない。

ただ、始まりの合図を任される俺に自分はいつでもいい、ということを示しただけだろう。

次の発言はあくまでそのついでのようなものだと思う。

「手、それ何よ」

「ああ、これな……」

オリジナルティーシャツなんて洒落たものは用意していない。衣装は普通に制服で、照明の当たる舞台の上ではブレザーを脱いだ上にカッターシャツの袖を捲くっている状態だった。必然、患部である手首が露出する。その部位に俺はリストバンドを装着していたのだ。

「気合入れようと思って、かつこつけてみた」

「ふうん」

無論、テーピングとか包帯だとかあれやこれやを隠す為に他ならないのだが。

「あつそ。あんま似合ってないわよ、そういうの」

「うるせえよ」

嫌味だけ言つて理紗はそれ以上何も言わなかった。

本当に何気ない、最後の会話があつさり終わる。

演奏が始まればそれぞれは孤独な旅に出る。誰も助けられない。誰も救ってくれない。同じ場所にいて同じ物を作り上げていても、決して、誰も誰かの代わりは出来ないのだ。だから、信じられるのは自分だけ。自分の技量と熱量だけだ。

鈴童と視線を交わす。それが最後だった。

確認するまでもなく全員が準備万端。

よし。それじゃあ、行くか――

頭上で木で出来た二対の腕を交差させる。

三拍子で呼吸を合わせ、深海のような沈黙に火花を散らした。

そしてそれが始まりの合図。

シンバルの音は駆け出すときを待つ馬の嘶きで、

加速する十六ビートは蹄鉄が大地を打ち鳴らす響きだった。

手首の状態がどのようなものなのかは正直自分でもわからない。

試しに指でぐつ、と押してみた。普通に痛かった。夢じゃない。

……そんな検証をしていたのではないが。朝目覚めて最初にしたこととはそんなことで、ぼんやりと、他人事みたいにそれと向き合う。驚くほど自分は落ち着いていた。不安がなければ、けれど自信もない。

あるいは怪我なんかよりもっと、いっしょに演奏する二人の存在がプレッシャーだったかもしれない。なにせ脚を引つ張っているのはいつも俺だからな。はい。ネガティブ終わり。

さらりと思いを切り替えて登校し、漫然と短縮授業をこなす。テストが終わったのになんで授業があるんだよ、とか思ってる間に放課後になるのだからやっぱり休みでいいだろう。今日に限ってはもっとこの時間が長くてもよかったように思えた。

「大丈夫なんでしょうね」

「なにがだよ」

手首のことがばれてるんじゃないかと一瞬不安になる。

放課後の教室、生徒会でありながらも一応は出演者とみなされる俺たちも今日ばかりは準備の免除が言い渡されている。鈴童は無視して体育館に向ってしまっただが。俺も手伝うと言っただが、怪我のこともあり拒否された。無意味に悲しい。

行く当てもないので旧音楽室に足を運んだのだが、後から理紗は俺を見つけるなりそのように訊いてきた。

「練習、してないんですよ。ついてこれるの？」

「ああ、その話な」

俺はドラムセットを移動させながら空返事で答える。

「心配いらねえよ。俺だって何もしてなかったわけじゃない」

「どういう意味よ」

「聞いて驚け、俺は今日の為に秘密の特訓を積んできたんだよ」

「それ、秘密にする必要あるの？」

「ごもっとも。」

身内同士で秘密の特訓なんて、こんな事情がなければなんの意味

もない。

「いいけど。それでちゃんとやってくれるなら、あたしは文句ないわよ」

手伝うから、と頼んでもいないのに殊勝なことを言ってくる。

スネアドラムを抱えた理紗が、

「あんた、何考えてるかわかんない」

おまえにだけは言われたくねえよ。

「わかんないけど、最後には絶対裏切らない」

不意に、その視線が俺の手首に向けた気がした。そして。

「信じてるから、裏切らないで。最後まで、ついてきてよね」

そんなことを言ってくるなんて、間違っても俺の知ってる式少女じゃない。

もしかしたら本当にこいつは全部知っているのだろうか。その上で、こんなやり切れない顔をして呟くのだろうか。考え過ぎだ。こいつに怪我のことが知れてるなら黙っていないはずだ。

いつもと違う雰囲気だった。

けれど笑えるほどこいつが普段どおりに見せようと努めているから、

「任せとけ。やるときゃやるどころ見せてやるよ」

俺もそんな風に軽口で返したのだった。

理不尽な痛みで右手が遅れた。

バスドラムの音が一つ欠ける。

気を抜いた一瞬の隙を衝かれたらしい。まだ気になるほどの痛みということはないが、意識していなかった分の驚きみたいなものが大きかった。小さな取りこぼしでミスといえばそうだが声を荒げて責められるほどのものではない。だから理紗は全くの無関心でその先を続けていくが、鈴童は僅かにこちらへ流し目を送っていた。

しかし彼女の視線は心配だとかそんな優しいものではない。

——なにをやってるのよ。

と、批難されている気分だ。

演奏のことではなく、そもそも俺の行動を根本から批難している。

——流すだけでいいって、言ったのに。

言いたいことは手に取るようにわかるさ。まるで乱れない演奏に乗せた感情が続けて促してくる。

もういいから、ペースを落とせ。と。

確かに鈴童が正しい。このままのペースでいけば明後日の本番に影響を及ぼすかもしれない。ここは所詮リハーサルだ。適当にやってこなしておけばいい。鈴童の演奏でそれを誘導してくれば、上手く理紗も誤魔化せるかもしれないし。

曲ももう終盤だ。最後の二三節くらい手を抜いても構わないだろう。

落ち着いた心でそう思う。理性的に考えて正統な判断だ。こんなものは本番の前哨戦でもなんでもないので、得られる自己満足なんて無視してさっさと次に備えよう。

一層高く——

——シンバルを鳴らした。

折れ掛けた心をその音と意識的に生み出した痛みで鼓舞する。

「——！？」

鈴童は信じられない、と目を見開いている。明らかにこちらに視線を送っていた。理紗にばれんだろ、こっち見てる場合かよ。俺はいえ、それを横目に映すくらいの余裕しかないというのに。

精神は鈴童の考えを受け入れていた。

それでも体はまだ止まらないと叫んでいる。

雨上がりの空を駆け抜ける。

遠い夢の果てに歌よ響け。

後二三節、だからこそ手は抜けないんだろ。

最後まで、裏切らないって言ったんだろ。

昔からそうだ。そろそろ自分でも自覚してる。俺はどうしようもないくらいバカなお人好しなのだ。この幼馴染み限定で。だから一

度約束してしまったのなら、それは破ることが出来ない。それが鈴童や理紗とは別の、俺が張り続けているくならない意地だ。

＊

祝勝会と称された集まりがその後旧音楽室で開かれたが、一体俺たちが何に勝利したのかは不明なままである。つまり気分の問題なのだろう。なにせこれを企画したのがあの式少女なのだ。ネーミングセンスに口出しとか、時間の無駄も甚だしい。

リハーサルでの演奏が予想以上に上出来だったのだろうか、理紗はそれなりに機嫌を直していた。本当に俺が秘密の特訓を積んできたのだとこれで信用してしまい、賛美の言葉を頂いてしまった。あんま嬉しくねえ。

「やるときはやるのね、あんたも。あたしが喝入れてやった甲斐があったってもんよ」

自販機で大量に買ってきた缶ジュースをあおりながら上機嫌にはしゃいでいる。

舞台が高校だということを考慮してフォローを入れておこう。決してアルコール飲料はない。が、理紗の様子は正しく酔っ払いのそれであり、俺の肩をばんばん叩いた後は、片付けを終えてやってきた鈴童に空中ラリアットをかますなどやりたい放題だ。どんだけ浮かれてんだよ。

本番前だというのに記念撮影を強制してくる理紗に逆らえず、俺たちは黒板の前に並ばされた。

三人しかいないのだ。携帯の自動シャッター機能を設定したりアングルとかピントとかを合わせるのに必死な理紗に気付かれないように、鈴童が小声で話しかけてくる。

「怪我は、どんな感じなの？」

「取り合えず、冷やしてテーピングしてる」

フラッシュが瞬く。

試し撮りというわけではなく、謝って撮影ボタンに触れてしまっただけらしい。

場違いなほど明るいかしやりという音と、ごめんごめん、という謝罪の意思ゼロな理紗の声を聞く。無論鈴童も俺も完全に無視を決め込んでいた。この場にあつて三人のテンションは完全に不等号で横並びである。

「痛みは、今はない。三十分くらいで治まったよ」

「そう……本番は、最後まで行けそうなの？」

「さあな。でもリハーサルで感覚はわかったから、ペース配分すれば大丈夫じゃないか」

「ねえ」

「なんだよ」

「怖くない？」

「どうだろうな」

何が怖いものか。痛みはあっても恐怖はない。

鈴童の意図しているところがわからない俺はそんな風に曖昧な返事をして、鈴童は、

「まいつか。貴方ならなんとかするって、わたしも知ってるし」

背中に紅葉を焼き付けるほどの張り手をお見舞いしてきた。

「何とか、なつてたのかよ」

今日だって途中で躓いた。あれは完璧な演奏じゃなかった。それをどうにかしたと言ってくれるのは彼女なりの気遣いなのだろうか。「何とかしたじゃない。だって、わたしがここにいるんだから」

言っている意味がよくわからない。ますます頭上を旋回する星が増えた俺を鈴童はくすくす笑っていた。

なんだってんだ。

「おっけーっ。じゃあ撮るわよ！ ほら、ちゃんと変顔準備して！」

俺を指差して言っているが、俺への指令なのか？

「当たり前じゃない。ほら、もう時間ないわよ！」

そう言って、

「きゃッ」

「うおッ」

三人の真ん中に立った理紗が肩に腕を回し、ぐつ、と体を引き寄せる。

数秒後、フラッシュと拍子抜けなシャッターの音が響いた。言うまでもなく変顔なんて作っている暇はない。三人の内二人は意表を衝かれて驚きの様相だが、約一名ほど満面に笑みを浮かべている女がいた。それが誰かなと言うまでもないだろう。

一つだけ、この辺りで落とし所として付け加えておく。

そんな記念撮影だったが、あれだけ念入りにセッティングしたにも関わらず三人の姿は半分ほどフレームの外に出てしまっていた。たとき。そりゃそうだ。誰かがいきなり後ろから飛びつくものだから、こうなって当然だろ。

*

この辺りで本日の成果を振り返ってみよう。

俗に言うフィードバックである。全て自己評価だが。

感覚については思っていたよりも洗練されていた感じた。序盤こそ遅れかけたものの、どうにかついていけないまでではなかった。鈴童のリードの効果もあったのだろう。イメージ上での練習は自分の音が聴こえず、そして実際にスティックがドラムを叩く感触が感じられない。この二つの点が最大の難点だ。

音の感触と、衝撃の感覚。

こればかりはどうしても養うことが出来なかった。

とはいえ結果は最後まで置いてけ堀を喰らう事はなかったのだ。

こればかりは評価してもいいと思う。それにそれら二つについては本番前に一度体感している。それが幸いだ。ぶっつけよりも何倍もましだろう。兎にも角にもこの点においては想像以上に上出来だ。マイナスの結果も有り得る中でなら、プラスの結果は評価に値する。問題はむしろ。

やはりというか、ネックだとばかり思っていた手首の怪我だ。これに関しては練習でどうこうなるものではない。時間の経過で治すしかないのだ。それでもぼんやり療養している暇もない。テーピングで固めているので痛覚だけならどうにか腕の力でカバーできる。問題は握力と、それから痛みでそもそも腕が機能しなくなる可能性だ。

今日も一瞬遅れたのは突然走った痛みを意識が裂かれ、予定していた動作に移れなかった。

もしもこれが、この結果がスティックの落下などに繋がってしまったらと考えればぞっとしない。ワテンポ遅れるだけならまだ追いつける。だがそればかり、そのただ一つが演奏を全て崩壊させることになる。まさか、ここまでテーピングなんてする訳にはいかない。

根性でどうにか出来るなら助かるのだが。
さて。

フィードバック終了。

過去を振り返るのはここまでだ。

後ろ向きではなく前向きに思考を切り替えよう。

終わった物語を語るのはおしまいにして、ここからは先の物語を語ろうと思う。

33 / 月下の弾き語り

/ 4

「あなたたち、最近また学校に忍び込んでるでしょ」

我が校では各教科ごとの準備室というものが設けられている。あくまで教科ごとなので、基本的には一年から三年まで同じ教科を担当する教師たちは相部屋ということになる。主にプリントだとか教材を置いておくだけの倉庫みたいになっているのが常らしい。

が、俺が今呼び出しを受けていた数学準備室は違っていた。恐ろしいほどに整理整頓されている。人が生活できそうなくらいだ。前述の通り通常ならば準備室とはこんな小奇麗な場所ではない。もっと殺伐としている。

ちなみに何故俺がそんなことを知っているかといえば、一年の頃の担任に呼ばれて何度か訪れたことがあるからだ。ノート返却とか、そんなの手伝いみたいな。

話を戻すと、そんな感じで散らかり放題の準備室には教師たちも寄り付かず、折角このような部屋を設けてもらっていても大抵は職員室に入り浸るらしい。これも前担任からの入れ知恵だ。なので、現在室内には俺と俺を呼び出した鈴童先生の二人だけだった。

部屋が妙に綺麗なのは彼女の妹が整理した結果なのだろう。

ところで気になるのはそんな部屋の様子ではなく、鈴童先生のお言葉だ。

「どういうことですか？」

「惚けないの。知ってるんだから。そりゃあ、練習時間が足りないのは察するけどね」

「いや、ちょっと待ってください」

そりゃあ、前科のある身でこんな否定をしたところで信用してもらえないかもしれないけれど。

しかし今回は真正銘の濡れ衣だ。下校時間後には鈴童とその知り合いのライヴハウスで例の練習をして、それだけなのだ。わざわざ怪我までしているのに学校に忍び込むような真似はしない。さつさと寝て翌日に備えるさ。

鈴童先生もそれらの事情を知らないわけではない。

怪我のこともライヴハウスのことも知っている。

存外疑いが晴れるのは早かった。先生は苦味の利いた顔をして頭の上にクエスチョンマークを点滅させている。人差し指を唇に当てなにより困った顔だ。捜査に行き詰った駆け出し刑事……というには少しあれか。少年探偵団美少女探偵だ。

「確かにね……うん。そっか」

「勘違いですよ、先生」

「んー……でもなあ……」

まだ腑に落ちない様子だ。

「ギターの音、聴こえるんだよね。空耳なのかな……だったらそれはそれで怖いんだけど」

いつかの噂の再来か。

それはけれど前回流れていたものと微妙に異なっていた。そもそも噂として吹聴されているわけでもない。鈴童先生が個人的に感じている違和感みたいなものだ。だから本人が口にしていないだけなのかもしれないが——そこにはドラムの音が含まれていない。

ちよつと待て、まさかな。

結論から先に言おう。

それから約十二時間後、半日後に時系列はジャンプする。

俺の想像した光景は見事なまでに現実として形になったのである。一人で夜の校舎に忍び込んだのは初めてだった。いつもは理紗といっしょだったからな。情けなくも一人だと結構心細くて気味が悪い。特に旧校舎に入り、どこからともなくギターの演奏が聴こえて

きた瞬間なんて鳥肌が止まらなかった。演奏しているのが誰かを知っていても、それでも。

抜き足差し足で旧音楽室に近づく。

いつか鈴童がそうしたように、扉の前で屈みこんで扉に耳を当てた。

ふむ。確かにこの中からだ。俺は音だけでギターの種類を判別できるほど達者な音楽家の聴覚を持ち合わせているわけではない。この中で誰が演奏しているのかを音だけで判断することは出来ない。音だけでは、だ。状況を考えてみる。こんな場所で、こんな時間にギターを弾いてる奴がいるとしたらそれは一人だけしかないじゃないか。ねえか。

耳を澄ます。

だがここで俺はある違和感に気付く。

聴こえてくる演奏に覚えがない。理紗が練習のために忍び込んでギターを弾いているなら、それは聴き馴染んだメロディーになるはずなのだが。今までに聴いたことのない旋律が若干の恐怖を煽った。これはあれだ、世に言う学校の怪談みたいな感じだ。

誰もいない音楽室からバツハとかベートーベンとかの演奏が聴こえてくる感じの――

ふと気が付いた。

まったく聴いたことがないわけではない。

何故か初めて聴くはずの曲なのに耳に覚えがあるような気がしないでもない。何となく次の音が読めるというか、知らぬ間にリズムが頭の中で刻まれていたりだとか、そんな感じの。まるで別の媒体を介して耳にしたことがあるような感覚だ。

例えばそう。

これが、ギターでない別の音で演奏されているのを聴いたことがあるような……

「誰よ、そこにいるの」

ぴたりと音が止まり、鋭い声がドアの向こうから飛んでくる。

「誰かって訊いてるの。答えなさい——よッ」
立ち上がる暇もない。

暴力的にスライドさせられた扉の動きに引つ張られ、体が冷たい廊下に転がされる。

ギターを提げた理紗が怒り眼でこちらを見下ろしていた。が、その目は直ぐに柔らかく丸くなる。尖った眼光を引つ込めると次は驚きにその目を見開いた。やれやれ。こっそり練習している姿を観察しようと思っていたのに。

「よ、理紗」

こうなってしまうては仕方ない。

盗聴の件はなんでもなかったみたい片手を挙げて暢気に挨拶してみたりした。

「なんで、あんた、えっ、ちよつと、なにしてんのよこんな時間に！」

お互い様だろ。

「てつきり怪しい奴だと思って身構えちゃったじゃない！」

おまえ自分の立場わかってんのかよ。

俺だったからいいものの、もしこれが見回りに来た教師とか警備会社の人間だったらどうなってたか知らんぞ。少なくとも明日のライヴは確実に中止だろうな。それなのにこの尊大な態度は何だろう。まるで俺が罪人みたいじゃないか。

常識で考える。

俺たちは二人とも不法侵入の現行犯だ。

「何してんだ、今更夜中に忍び込まなくてもいいだろ」

「別にいいじゃない。あんたに迷惑かけてないんだから」

法律とか校則とか破ってんだよ。

「懐かしくなったのよ。なんとなく、こんな風に練習してた時もあったなつて」

照れ臭そうに、あるいは照れ隠しに唇を尖らせてぷいとそっぽを向く。

楽器は既に体育館に運び込んだ後だ。当日に移動させることも出来るが、それでは生徒会の仕事などが差し支えて厄介だという鈴童の予想から今日中に終わらせていた。本当のところ、少しでも明日はライヴ意外で手首に負担を掛けさせたくないといったところだと思ふ。

空っぽの部屋の中を月明かりだけが照らしている。

雲のない夜だった。だから、灯りはそれだけなのに部屋の中が明るい。

静かで、冬なのに暖かい気がした。

「なあ理紗、今の曲ってさ」

びくり、と肩が跳ねると、音の速さで振り返る。

理紗の髪が螺旋を描くのが僅かに視界に映り、そして横転した。腹部に激痛を感じるところから察するにどうやら蹴りでも入れられたらしい。実に鮮やかな回し蹴りじゃないか。と、客観的になつていないと声を出してしまいそうなくらい痛かった。

「うるさい！ 何も訊くな！ 何も聴くなあ！」

なんで頬が赤いのだろう。

問いかける第二撃目が、今度は踵落としが見舞われる。落雷染みた一撃をどうにか回避する。こいつ、口封じに俺を殺す気ではないだろうか。どの攻撃からも躊躇いと加減が感じられないぞ。

「あれはね、没にした曲なのよ。没！ 出来るのも遅かったし、今更練習しても間に合わないから切り捨てたの！ なによ、悪い？

文句あるんだつたらいつたらどうなのよ」

「別に文句なんてねえよ」

それに没になったということも知っている。

何せ俺は――鞆の中を探してみる。中身を弄っていないだけに、それは簡単に見付かった――あの紙飛行機を見つけたのだから。取り出したそれを理紗に突きつけるように見せると、それはどうしようもないトドメになったらしい。

肩が萎れて深いため息を吐く。

観念したみたいに弱々しく広げた紙面を掴み取り、理紗が言った。

「なんであんたが持つてるのよ」

「拾った」

「はあ……。なんなのよ。こんなことだったら丸めて捨てればよかった」

その方がエコだしね、などと口にはしている。

どっちにしてもゴミになるならエコではないだろ。屋上から飛ばして誰かがゴミ箱に入れるのか、それとも直接自分でゴミ箱に入れるのかという違いでしかない。

「……いいわ、わかった」

何がわかったのだろう。

教室の後ろの方に固められた椅子や机の群れの中から一つ椅子を持ってきて、窓の方を向くようにして設置する。腕を組んで振り返った理紗は復活した眼光を俺へと向けて、窓ガラスでも割るみたい腕を振った。

「座って。特別に聴かせたげるから」

ほら早く、と促されるまま俺はそれに従い腰を下ろす。

これから何が始まるうとしているのだろう。いや、実際それはわかってるのだ。理紗にしては珍しい。自分が見切りを付けた式にまだ未練でもあるのだろうか。こんな風に一人で弾いていたり、誰かに聴かせようとしたりするなんて。

「言っとくけど、これはその、昨日のご褒美なんだからね。あんたが、思ったよりよくやったから」

「そうかい」

「なによ、その顔」

「いや、なんか、ありがとよ」

「ふん。お礼なんて要らないわよ。だけど感謝だけはしなさい」
どっちなんだろう。

ふう、という吐息の後、理紗は静かにギターを持ち上げた。まるで初めて人前でその楽器を演奏するみたいに、自分を落着かせよ

うとしている風な足取りが窓辺に向かう。差し込む月明かりが雲に隠れて影だけが動いて見える。その少しだけの空白は、がたがたと風に鳴る窓の軋みで埋められた。風が雲を流す。舞台の幕が上がるのに似た、月光の再来。

――月を背負った姿が綺麗だった。

見慣れた黒髪がいつそう神々しく見え、金色に照らされる横顔は不思議とそこにいるのが誰かを忘れさせる。うっかり彼女の演奏よりもそちらに気を取られ、これから始まる旋律の行方を見逃してしまいそうだった。

穏やかなメロディが続く。青い夜空と白く透明に融ける金色の月光がそのままラインを描いている。ギターソロのバードだ。鈴童がベースで弾いてみせたそれとはやはり違う。ギターの為に書かれたスコアをその専門家が演奏しているのだから、違いがあつて当然だろう。

一人で作り出す、夕凧の海を渡る波のようなメロディが風に消えてしまいそうなくらい儚かった。

「例えば夕暮れの教室で――きつとずっと世界の果てまで続いているんだね」

なんてこった。

もう歌詞までついてたのか。俺が拾った紙飛行機には歌詞なんてついていなかったぞ。興が乗ったのだろう。こんな大人しい曲はイメージに合わない。俺の知ってる理紗のイメージには。だからここにいるのは別の誰かなのだろう。あいつがこんな、静謐で綺麗なはずがないのだ。

――そんな風に廻っていた季節”

――泣かないでいたいよ。大好きだから”

――もうきつと君は忘れているだろうけど”

――二人歌った約束の歌を”

「木漏れ日の下で呟いた言葉、今も覚えてる」

終盤になってほとんど弾き語りみたいになった演奏の中、歌っているというより独白でもしているみたいだ。それでもまだ途切れていないメロディと歌声が紡ぐ言葉はやはり、歌なのだろうと思った。ずっと見ていると吸い込まれそうな黒い瞳に見入られて、

「ありがとう。同じ場所にいるよって、言ってくれた君が――」

最後の言葉を、聞き逃した。

否、言葉ではない。そもそもその先の歌詞が存在していなかったのだ。続いていくのは閉じていくギターの旋律で、理紗は指だけを動かして口は閉じたままだ。月の夜がわずかに翳る。月光が雲に遮られ、あたりが不意に暗転した。

始まりと同じように。

雲が光を閉ざして幕を下ろす。澄んだ音は青い夜空の様に美しい。月の、空に一人ぼっちの姿が目の前に佇む少女と重なって見えた。演奏の幕に喝采はない。またいつもの冷たい静寂が戻ってきただけだ。俺はといえば、そんなことさえ忘れて演奏に聴き入り、あるはずもないアンコールに期待してしまいそうな心境で黙り込んでいた。こんなこと、間違っても口に出してはならない。もう一度、歌ってほしいなんて。

「で、何か感想はないの？」

「感想って……んなこと言われても」

綺麗な歌だった、と、それしか言えない。

もちろん口になど出来やしないのだが。褒めてやっては付け上がりやがるのだ。だからこいつの鼻を伸ばすような言動は憤まないといけないのだと、何年も前から俺は知っている。知っていてわざわざそうするほど馬鹿なことないだろ。

と、言ってもだ。

「ああ――俺の、大好きな音だった」

今夜ばかりは俺も馬鹿になろう。

素直になつて、そんなことを口に出してしまう。激しい後悔はまだやつてこない。きつと明日の朝に目が覚めてから一気に押し寄せてくるとか、そんなのだろう。けれどそれはもつと後のことだ。今の俺には関係ない。顔が蒸発しそうな思いに耐えなくてはならないのは、明日の俺なのだ。

言い訳みたいに言い聞かせる。

不思議な夜だと我ながら思う。よくもまあ、こんな風にこの式少女を賞賛できたものだ。

こんなに素直にこの幼馴染みを愛しいと思いやがったもんだよ。理性はこれ以上先を考えるなど叫んでいる。この先に踏み込めば、何か、きつと後でいろいろと困る。が、知ったことではないと押しのけようとする何かが今は強かった。

例えば鈴童のことだつてそうだ。

こいつがバンドをやりたいなんて言ったから、俺は何をどうしても鈴童を引き入れようとした。その先にどんな結果があるとしても夕暮れの河原で投げ込んだ何十球かの白球は、果たして誰の為だったのか。何の為に——そうだ、手首を怪我してまでまだこんなことを続けている意味も、同じじゃないのか。

一つだけはつきりしたことがあった。

鈴童は言った。

手の怪我を理紗に話すべきだと。

それを否定したのは何故か、それがわからなかった——でも今ならわかる。

俺は嫌だったのだ。こんなところで一人リタイアするのが。俺が使い物にならないとわかれば、当然理紗は何かしらの対策を取るだろう。それがドラムを排除したベースとギターだけのバンドだとか、そもそもこのバンド自体なかったことにするのはわからない。けれどその不確かな未来に俺がここにいる保障はない。それが、不安だった。

無理矢理にでも今を突き通そうとした。

そういうことだよ。わかったか俺。

「よろしいっ」

こいつは、この式娘は、どれくらいの覚悟で俺がそう言ったのかをわかっていない。

だからあつさりこんなことが言えるのだ。

朝焼けみたいに晴れやかないつもの笑顔で、さっきまでの、夜の空に浮かんだ月を連想させる静謐さなど微塵も残さず。どうしたらこんなにも簡単に意識を切り替えられるのだろう。少しこつを教えたい欲しいものだ。昨日までの気まずい雰囲気なんて露ほども残っていないじゃないか。

理紗は、そしてまた平生の通り、ぴょんと跳ねるみたいに駆け寄ってきて拳を突き出すのだ。

「あたしの式——明日のライブ、絶対成功させるわよ！」

満面に無邪気な笑顔を貼り付けた幼馴染みの小さな拳に、俺も同じように拳を重ねた。

明日が、本番だ——

34 / 約束の歌

/ 5

祭りは始まる前が一番楽しいというが、果たして本当にそうなのだろうか。

むしろ始まる前の独特の緊張感は精神を病ませるダウンナー系のドラック染みている気がする。

などという独白で緊張を誤魔化していた。自分が案外上がり性だということを知った気分だ。昨日までの俺は膝が笑うという言葉の意味を正しく理解していなかったらしい。俺は体育館の舞台袖で密かに振動する体を抱えていた。

鈴童はさすがの風格である。もともと生徒会長をやっていることもあり、人の前で何かをするのは慣れているのだろう。それにこいつはライブの経験もある。学校の出し物程度ではびくともしない精神を獲得していて不思議はない。

余裕で弦を弄っている姿に肖りたいものだ。

理紗は理紗で、緊張とは別の次元に生きているような生命体だ。そもそもそんな感情を持ち合わせているのかこいつは。考えるだけ無駄である。図太さでは日本でも指折りだろうからな。少しでも俺にその成分を分けてくれ。

血が冷たくなる感じがする。喉の奥が震えていた。心臓は普段よりゆっくりと脈を打っている。そんな風に錯覚するのは時間の流れもまた、同じように緩やかに感じられるからだだろうか。この、ライブの始まる前の数秒が途轍もなく長い悠久みたいだ。

それは、さすがに言い過ぎか。

実行委員の呼ぶ声がして、理紗が立ち上がった。

「よつし、じゃあ行きましょ。最高のライブにしてやるんだからねッ」

突き上げた右腕には、誰かのものによく似た黒いリストバンドが窺えた。

単純だよな、こいつも。

幕が上がった舞台にゆつくりと歩み出る。体育館つてこんなに広がったつけ、というのが最初の感想だ。我々の注目度は俺の予想を遥かに超えていたらしい。そんなに高さも距離もないところから見ているというのに集まった生徒たちが点のように犇いて見える。

しかしそれもそうか。

よく考えれば、こちらの面子は天下無双の生徒会長と式奇人の二枚看板だ。おまけにどちらも美少女ときている。知名度抜群の鈴童だけで話題になっておかしくないのだ。付属効果で理紗に衆目が集まっても不思議はない。

こんこん、とギターを小突く音。

ざわめいていた場内が、その一音だけで静まった。

別に音が全員に届いたとか、そんなことではないだろう。ただ、それだけの動作で空気を変えたのだ。参ったな。この場でまだ役に入り込めていないのは、どうやら俺だけらしい。

ここから先、三人を繋ぐ言葉はない。あるのはただ、紡ぎ出すメロディラインだけだ。

そこから交わされる意思もあるだろう。だが、確かなものは何一つない。自分を信じられなくなればそこで脱落だ。そう——この手首の怪我が悪化しても誰も助けてくれないし同情もくれやしない。自分でこうすると決めたのだから。

たとえどれだけの苦痛でも、そうすると、その先にあるものはそれと引き換えにしても手に入れたいものだと思うから。

理紗が振り返る。リハーサルと三人の立ち位置は変わっていない。中央から残った二人、俺と鈴童にアイコンタクトを図ってくる。大丈夫かと、準備はいいかと。果たして、苦笑した俺の返答を理紗は

どう捉えたのか。長い髪を翻して、そしてここに集まった人の群れへと向かった。

彼女の背中を見据えて。

頭の上に持ち上げたスティックで始まりを刻む。

走り出せ。

——さあ、行こう。

「目覚ましの音で目を覚ます——生憎の雨が欠伸を溜息に換えた」

物凄く前向きで、自分を擁護するように考えるなら、さっきまでの震えは俗に言う武者震いだったのかもしれない。だってそうだ。さっきまでの緊張感が今はむしろ心地がいい。押さえ込んでいた感情を爆発させて、叫びに変えて、音に変えて走らせる。この瞬間が待ち切れなかったのだ。

心音は早く。

体と心を置き去りにして先走る。

遠くへ影を残して消えていく。遠く遠くずっと先まで。爆音に似た歓声に包まれて、それでもまだこの感情の高ぶりは収まらなかった。喉が焼き切れるくらいに叫びたい。それでもまだ足りないだろう。血はどんどん熱を帯びていく。全身を駆け巡って運動の促進を続ける。

遠くの空へ駆け抜けて、

青く青く果てない色の夢に声よ届け、

キミの歩む道、

その道標になる歌だけを胸に響かせて。

自分の心が折れかけていたいくつかの昼休みに初めて聴いた歌詞が後押しする。ペース配分なんて考えていられそうにない。この瞬間の歡喜の為に、今日までの練習があつたのだろう。そう思うと堪らない。

いやいや落ち着け。

まだ一曲目だろ。少しばかりはしゃぎ過ぎだ。こう、全体のバラ

ンスを考えないと。

無心になつて振り続けていた腕をわずかにその勢いに歯止めを利かせる。まだまだ序盤だ。下積みはもつと静かでない。そう言つても、会場のボルテージは今をして既に最高潮のようなのだが。無理もない。一曲目にこんな曲を持ってきた誰かが悪いのだ。

激しい疾駆が風を巻くように過ぎ去る。

早くも歓声の爆発を生み出した、入りは上出来といえるだろう。

そして息を吐く間だけを挟んで二曲目に移る。

さつきよりも抑え目のテンポとボリウムだが、何分やはり余韻が残留している。盛り上がりは留まることを知らない。天井知らずとはこのことだ。体育館の外までこの音が届いているんじゃないか。いつかほら、覚えてる？

放課後のトラック。

泥だらけになつて繋いだバトン。

理紗の歌声とそれに呼応するような演奏の振幅を肌で感じた。三人の内一番後ろで、そして中央に位置する俺の居場所からは体育館の中が一望できた。突き上げる拳も、誰かがメロディに乗せて叫ぶ声も敏感に感じ取れる。

雨の日も。

君がいない日も。

普段より感性が尖っている。

むしろそれは、この場にあるあらゆる音を拾つてきて耳が痛いくらいだ。混沌として渦巻いていく。それに飲み込まれないように自分の音を見失わないようにとひたすら腕を動かした。なんだろう。

それでも、逃走している気分ではなかった。

泣きたくないよ。だから笑うよ。

ほらまた擦り剥いた膝を見て笑顔を零して。

そんな日々も終わりなんだねって。

やっぱり君は笑うから――

気付けば熱い息を吐き出す自分がいた。二曲目を終えてまた少し

間隔が開く。楽器はすべて鳴り止んでいるはずなのに。頭の中に流れていく旋律のイメージが消えてくれない。また些細な音が聴こえた。衣擦れの音や、風が天井を擦る音、それだけじゃない。漣みたいな人の囁きその声が、ひどく、鋭敏に感じ取れる。

ほんのわずかな音がうるさい。鼓膜が掻き毟られる。聴覚がびりびりと痺れて痛い。

なのにどうしてか、それが心地いい。この場で音に飲まれてしまいそうな自分があるのに、その途方もない渦に溺れてしまいそうな自分があるのに恐怖はない。そんなものよりも今は、もっと――。

ギターが稲妻の疾駆で吹き荒れる。

あれこれ考えている内に三曲目『青い鳥』が始まっていた。忘れていたわけではない。しかし確かに失念していたのだろう。今日演奏する四曲の中で『青い鳥』だけがギターから始まる。他とは逆の順序で、ギターのソロから入り、それに一瞬遅れてベースが重なるのだ。ドラムは一番最後にスタートする。

気を抜いていた所為で下手をすれば入り損ねるところだった。

――真つ青な羽を広げて歌声を上げる”

歌声が、遠い。

聴覚があまりに膨大な量の刺激にどうかしてしまったのだろうか。理紗の声がここじゃないどこから聴こえてくるみたいに感じられる。なのに依然として、狂ったみたいに歓声は止まない。まるで、世界を満たしている音の全てがここに集まっているみたいだ。

その、中で。

――“ここにいるよと叫んでいた”

輝いて見えた旋律があった。

――“届けと歌って声を枯らす”

――“それはまるで誰かの慟哭のようで”

どくん、と心臓が脈を打つ。流れ出す血潮とそこに停滞する熱を感じる。また一層高く跳ね上がる心臓。そして揺れる世界。鼓動が共鳴していた。一体何に？ 決まっている。この世界の全てに。

ギターの走る音と奏でるメロディラインが、虹のように色として見えた。

ベースの追走する音と生み出す旋律の輪郭が、空のように広がっていた。

その中で、負けじと声を張り上げる、止まることなく稼働し続ける四肢にエールを送るようなドラムの音を聴いた。自分で叩いている。自分で張り上げている。なのになんで、こんなにも遠いのだろう。どくん、と鳴ったのは果たして誰の心臓か。この拍動は心音が、それともドラムなのか。

顔を上げて見渡す。

さざめく人の波と押し寄せる音はまるで夜空にさんざめく星だ。圧倒的なこの光景の全貌を、思えば初めて演奏中に見た気がする。そうしてようやく悟った。

——嗚呼そうか、と理解する。晴れやかな気持ちには雲一つないこれが、ここにあるこの景色こそが目指していたものだ。

三つの欠片で作り出す、一つの巨大な世界。ギター、ベース、ドラム——それだけじゃない。ここにある全てがピースだ。誰かの息遣いも、心音も、衣擦れの音も、全てが相俟って一つになって絵を描いている。だから今は、はつきりとわかる。鋭敏な神経は、もう、自分が絵の一部になっていたことを表していたのだと。

——「イヤだってこのままじゃ」

——「ずっと二人でいるだけじゃ」

既に体には意識が通っていないかった。そもそもここに、今この場所に誰かの独立した意思などない。旋律が描くメロディラインを、その上をひたすらに走り続けていく。遠くまで、もっと遠くまでと。終わりなんて今は見ていない。目の前の一本の道をどこまでも。行く先は夢の果てか。

それともその先か——。

——「不安だから、だからもうどこにもいかないでって」

——「ここにいるから、いるからね」

幸せの青い鳥は傍にいて、飛び立つ瞬間を待っている。だけど誰も気付いてくれない。だから、やっと飛び立った幸せを人は実感できないのだと、そんな教訓がある。自分の幸せに気付けることが、ただそれだけのことが本当の幸福なのだと。

例えばこの光景だ。

この、何百人もの人が一つの何かを作り上げているこの瞬間に気付けたことだけで俺にとっては幸福だったのだろう。それは本当に些細でちっぽけかもしれない。だが永遠に色褪せることのない宝物になるはずだ。

天まで届くと、大袈裟に振り上げた右腕とスティックを力の限り振り下ろしシンバルを鳴らす。

雷鳴のような嘶きが歓声を割って空に消え去り――

「あ――ッが……………ッ！」

忘れていた激痛が、牙を向いて神経を陵辱した。

リハーサルの時とは比較にならない。痛覚を司る神経が束なら、それを一本ずつ引き裂かれているようだ。悲鳴を上げようにもそこではない。そんな余裕すらない。神経は痛みを感じることに精一杯で他のことを許してくれなかった。

体はまだ動いている。だから、激痛に耐えれば演奏だけは崩さず続けられる。

「か……………ッはあ……………」

喉が焼ける。肺が擦り切れる。

手首だけじゃなかった体の至るところが痛みを軋んでいる。

もうとつくに限界だったんだ。ドーピング染みた意識の昂揚がこれまで痛みを忘れさせていた。だがもうそれも限界にきていたらしい。動きを強制終了させる、既に警告の域を超えた痛覚の悲鳴が容赦なく意識を引き裂く。

これまで自分のいた場所が離れて行った。

もうさっきまでの音のラインには乗ることが出来ない。今から追いつくことなんて出来ないのだから、膝を曲げてリタイアすればいい。

い。二人には悪いが限界なのだから仕方ないだろう。体はもう動いてくれそうになかった。手を伸ばせばそれだけで走る痛みが邪魔をした。

おしまいだ。これで、何もかも。

—— “失くした後でわかる、君の大きさを”

「……………んな」

弱々しく消えていくドラムの音に呟いた。

その言葉で自らを鼓舞する。

—— “綺麗な色した青い羽、赤い色の空に飛び立った”

痛みに負けそうになっていた意識を、沸騰しかけていた熱意を言葉で押さえつける。

「……………ふざけんな、この」

痺れて感覚もなくなってきたのに、痛みだけが際限なくリアルだ。

だがそんなことは知らない。

叶えてやると約束した。

俺自身もまた、この式の結末が見てみたい。

立ち止まりたくなかったのは、ただ一度輝いていたその——

—— “君がいない日々を映した、誰かの涙を溜めたあの空”

「……………終われるわけねえだろ、こんちくしょう——！」

—— 大切な少女の笑顔がまだ、残留していたから。

きつと声にはなっていなかっただろう。聴こえていたのは俺だけだ。それぐらいに吐き出す息は弱々しく、なのに内側から体の節々を痛み漬けにしていた。痛みを生む為に擦り切れて、満足に体の外へと出て行かない。今、自分がともに呼吸できているかもわからないくらいだ。

でも構わない。

もう一度、あの場所にいけるならそんなことは些細な問題だ。

足を止めることは絶対にしない——ここを走りきって最後に笑えるまで、絶対に立ち止まらない。

痛みは戒めだ。意識が飛ぶくらいに激しいものもあった。だがその度に決意で繋ぎ止め、感覚だけで腕を奮った。猛り狂う。こんなところでは終われないのだ。最後まで、この二人について行きたい。付いていくと、約束した。

—— “いつかずつと傍にあつて”

ギターの疾走が風になる。

ベースの追走が空を生む。

ドラムの心音が世界を動かす。

星を廻せ、立ち止まるな、息さえ惜しんで走り続ける。

—— “近くにあつたから気付かなかった”

ラストスパートで残る全てを叩き込む。そうでもしないともう、ついていけそうになかった。今度引き離されればそれで終わりだ。留まることを知らない音の波。旋律が色を点滅させて駆け巡る。集束して爆発する、終焉に向う最後の一節。

—— “大切なものは、もうずつとずつとここにあつたから”

シンバルの連続で途切れそうな意識を引き戻し、痛みの中で顔を上げた。

燦然と輝いて見えたのは、有象無象の広がった巨大な景色なんかではなく。

見慣れた小さな、その、彼女の後姿だった。

音が彗星のように尾を引いて消えていく。世界を満たしていた無数の色が薄れ、星の瞬きみたいな細かい音が途切れないまま続いた。それは最後に一度再び燃え上がる、最後の灯火への導だった。

—— “君は、鳴いた”

青い鳥が飛び立つように、三つの音が溶け合って螺旋を描く。

音の名残は蹈躡を踏んでいるみたいだ。振り絞った力でドラムを叩く。最後の一打を終え、そして後は幕を引くギターとベースのメロディを聴いた。

ようやく呼吸が出来た、ずいぶん久し振りの気がする。

思わず笑ってしまいそうだ。全身が脱力して、肩が頂垂れている。

ここを乗り切ればなんとかなる。『窓の向こうの空の果て』はそこまでドラムの負担が大きい曲ではない。クールダウンだ。熱に焼かれた関節を落ち着けるための制動距離と思えばいい。

最後だ。

俺がシンバルを鳴らせば最後のメロディが始まる。

ほら早くしろ。煮詰まった会場は最後の一曲を待っている。おまえが始めないと、何も始まらないだろ。だから早く、腕を振って、音を、鳴らせ――

――限界だとは、気付いていた。

けれど俺は、刹那に気を抜き生まれた笑みのまま硬直してしまう。痛みが邪魔をするだとか、そんなもんじゃない。微動だにしないとはこのことだ。肩から下の部位が動かせなかった。感覚はある。痛覚はつきりと。なのに感覚神経だけが研ぎ澄まされ、運動神経は、まるで機能していない。

嘘だろ、おい。

後一曲でいいんだよ。だから動けよ。動いてくれよ。

そもそも、始めることさえ出来ないだろ……ッ。

不審に気付いて鈴童がこちらを振り向く。不安が的中した、とその目が言っていた。責めるような視線ではなく何故か泣きそうになっている。ふざけんなよ、泣きたいのは俺の方だ。鈴童は俺の異変に気付いてもまだ何もしようとしない。

何とかしろ。今ならまだ間に合うだろ。

何事もなかったみたいに演奏を再開するんだよ。こんなところでとまんなよ――！

けれど、どんな言葉で自分を罵倒しても、罵っても、鼓舞してもそれでも、腕はわずかな痙攣を起こすだけでしか応えてくれなかった。完全なゲームオーバーだ。燃料切れなんてものじゃない。腕が腕として機能する為の回路が壊れている。

鈴童が目を閉じた。ベースに添えた手が弛緩したように見える。

よくやった。

誰が言ったのだろう。

誰も言っていない。

でも、確かに聴こえた。

それが、終わりの合図。

途中で折れ掛けた時には感じなかった悔しさが急に湧き上がってくる。

駄目だった。最後まで、走りきれなかった。

鈴童が理紗に体を向ける。何と声を掛けるのか。これ以上のライヴ続行は不可能だと、その理由を説明するのだろうか。やめろ、と止めたい。やめてくれ、と懇願したいけれど——でも、それでももう限界なのだ。どうしようもないくらいに、どうしようもない。そつと、目を閉じて、

「——木漏れ日の下で呟いた言葉、今も覚えてる」

理紗の、声を聴く。

場内がざわめいた。メロディがないのだ。

それは弾き語りでさえない。ただの呟きのようなだった。

驚愕は等しく全員のものだ。当事者である理紗だけが冷静で、困惑する全員を取り残してその脚をゆつくりと動かし始める。最後の旅へ踏み出した一步は、これまでの疾駆からは想像も出来ないくらいに静かな歩みだった。

「ありがとう。同じ場所にいるよって、言ってくれた君が——」

これまで振り向くことのなかった彼女が、ここで、初めて振り返る。

体ごとこちらを向いて、感情を隠した、温かい、隠し切れない幸福な笑顔を滲ませて、

「――大好きでした」

聴くことのなかった、歌詞の続き。

或いは今付け加えられたのかもしれない。旋律に乗らない彼女の声は静かに余韻さえ残さず透明に変わる。くすり、と口元が小さく笑った。いつも見せる、自信に満ちた不敵な微笑だ。そして理紗は、それだけを残してまた衆目を仰いだ。

ギターの演奏が始まる。

予定していた曲目ではない。これは昨日、俺が旧音楽室で聴いた歌だ。紙飛行機になって空を割った、彼女が見切りを付けた式だ。それが、今、こんな風にこんな場所で。

戸惑いにざわめいた体育館の中も、直ぐに演奏に呑み込まれた。ギターの弾き語りが静かに続いていく。そして初めは取り残されていた鈴童も遅れてベースのフォローとコーラスを重ね始めた。

なんだ。

あいつ、本当は全部知ってたんじゃないか。

全部俺の想像かもしれないけれど、それでもそう、思わずを得ない。

知っていたから、こんな場合の為に新たに一曲を書いていたのではないか。それを俺に見つけさせれば、鈴童がその譜面を見れば、こうして演奏に参加することも出来る。全部あいつが知っている情報を組み合わせれば可能な範囲の仮定だ。

けれど今は、そんなことはどうでもよかった。

自分でもわからない。どうして、こんなにも悔しいのか。二人の演奏に参加したいと思う。思ってしまう。それが出来ない自分がどうしても悔しい。だから、涙が止まらなかった。心に響く歌詞と、二人の演奏が続いていく。堪えきれずドラムに寄りかかった。

構わないだろう。

今、衆目は前で演奏している二人に向いている。なら、誰もこっちには気付かないはずだ。

今はまだ、大丈夫。演奏が終わるまでに、流せる涙は流しておこう。

泣かないでいたいよ。大好きだから。

ここにいて。いつもみたいに歌ってよ。

もうきつと君は忘れているだろうけど。

——二人歌った約束の歌を。

これが、散々奮闘してその末に得た、式の導き出した結末だった。

/ Epilogue

/ Epilogue

ライブ後の話を少しだけしよう。

結局体育館イベントの前座として用意されていた生徒会の前舞台は、その後のどの有志よりも喝采と注目を浴びる結果となった。会場のボルテージをネコソギ刈り取って行った上に、その時点で最高潮に達した盛り上がりはオーバーヒートとなり……ライブ後の体育館がどのような状態だったかは慎んで割愛しようと思う。

生徒会役員三名によるバンドは翌日から生徒間の今もつとも旬な話題として語られることになった。音源のダビング依頼が殺到するなど、もはや時の人だ。噂では密かにファンクラブも発足しているらしい。稀に俺の下駄箱に悪戯されていたりするのだが、それも連中の仕業なのだろうか。ならばあくまでもスリーピースのファンという訳ではなく、あの二人のファンということだ。当然と言えば当然だ。

生徒会としての仕事も継続中である。これに関しては仕方ないことだろう。鈴童は用が済んだら除名するものと思っっていたらしいが、そういう訳にもいかない。そもそもそういう約束だ。それを破る気にはなれなかった。

今日も今日とて、微弱ながら生徒会の雑務を担当している。鈴童の力になれているとはどうもまだ思えない。新種のお茶酌みマシーンみたいなものだ。

バンドは解散宣言もされていなければ、今後の活動継続も明言されていない。未発表の曲は残っているが、それもこのまま歴史の闇に消えるだろうと思う。こうしてまた理紗の式が幾つか未解答のま

ま消えて行つたのだ。

冬休みの直前に生徒会室でこんな会話が展開された。

「手首は大丈夫なの？」

まあ、とりあえず、授業がほとんど自習状態だったのが救いだ。

「それって駄目じゃない」

ライヴ直後は本当に一生使い物にならないんじゃないかと思つたくらいの手首は、しかし今では日常生活に何の支障もない。完治するまでの期間が本来よりも長引いたと言うだけだ。風邪をこじらせたとても思つておけばいい。

「ふうん」

鈴童は悪戯な笑みと邪悪な微笑がブレンドされた笑顔を浮かべて、目を細めるように俺を見た。悪女の顔だ。なんか凄く悪い顔に見える。何を考えてやがるんだこいつは。

どん、と机の上に山盛りの書類が置かれる。

えっと、これはなんですか鈴童さん？

「ノルマ。簡単な書類だから適当に片付けておいて。まさかこのまま雑用だけして、生徒会所属の内申だけ貰おうっていうつもりなのかしら？」

「いや、待てよ。別にそういう考えは……」

おろおろとする俺の姿が余程滑稽だったのだろう、鈴童は様々な不純物が混ざった笑顔から雲が晴れた後の空みたいだ。

ふざけんなよ、人をからかいやがつて。

とはいえ、確かに成績だけで大学が安定している訳ではない俺にしてみれば、その生徒会所属の経歴は非常にありがたいものでもある。ここは素直に鈴童の言葉を受け入れておこう。たとえ片腕になどなれなくても、それでも。

頭を掻いて書類の山を崩して行く。

今はこんなことでも、人間、本気になれば何だって出来るはずだ。いつか、鈴童の半身になれるくらいの仕事量をカバーしてやろう。当面の目的はそれだった。

「本当に、辞めないんだね」

「なにがだよ」

「もうライブは終わったんだし、目的は達成したでしょ？　なのに生徒会に残る意味が、貴方にはないと思うんだけど」

「それとこれとは話が別だろ」

何があっても傍にいと、白球に乗せた思いと誓いは、今をして永遠なのだ。

誰も信じられないと言った、箱庭の中の少女が、この世界でも笑っていられるように。

俺に出来るのは、それぐらいなのだから。

「へえ、そっか」

少しだけおどけるように、幼い目元が綻ぶ。

「彼女はどこまで知ってたのかな。貴方のこと」

「さあな」

俺だって知りたい。

一つだけ確かなことがあるとすれば、真実をあいつ自身に尋ねれば何と解答するかだけだ。

「羨ましいな。そんな風にお互いを信頼できる相手がいて」

羨望の眼差しが儂い。窓の向こうにある、その青い空の果てを望遠していた。

鈴童のそんな横顔があまりにも綺麗に見えたから、不意に、悪戯を試してみたくなる。

「心配いらねえよ」

俺は言った。

「おまえを含めてのスリーピースだろ」

夕暮れの帰り道で理紗は今回の採点を行っていた。

「0点」

「……はい？」

式を組むなら、当然それを解くことになる。最初の式から最後の式まで、その一連をテストに見立てて最終的に採点を行うのだ。これまでの最低点は確か、それでも二桁だった気がするのだが。少なくとも欠点ではない。これは流石に過去最低点だ。

「して、その心は？」

フィードバックは大切だ。

中学の数学担当教師が言っていた、採点や点数ではなくその訂正が大事なのだと。ちなみに俺はそいつが大嫌いだったので、数学だけはテストのやり直しをしなかつたりする。余談だけど。その結果もあってか、模試だと俺の数学の成績は平均偏差値を大きく下げる役割を果たしている。

驚くほど自己採点の低い式少女に確かめてみると、理紗は盛大なため息を朱色に落とした。

「あのねえ、あんたバカなの？ 式つてのは答えを出す為の道程なの。あんたさ、そもそもこの式が何の為の式か覚えてないわけ？」

「何の為のつて、そりゃあ……」

「彼氏、出来てないじゃない」

「あ」

ああ、なるほど。

そういえばそういう目的でバンドをしよう、なんてことになったんだっただな。

ファンクラブも発足したし、それに鈴童には言い寄ってくる男が急激に増えたらしい。理紗は明言していないが、俺が客観的に見たところ声を掛ける男は確かに増えているように思える。そういう意味では全然成功したんじゃないのか。それとも品揃えに不満があるともいえるのか。俺には、なかなかの男前が集まっていたように思えるが。

きつ、と横目に睨まれる。

背筋がマイナス百度で凍りついた。冬だからさみい。

「はあ。説明しなきゃならないほど、あんたがバカだとはねえ」

「面目ない」

「ほんとに思ってるの？」

思っていない。

殴られた。鳩尾にエルボーがヒットする。

クリティカルヒット、付属効果で麻痺状態になった。呼吸困難だ。
「あのね、あたしは誰でも彼でも男ならいい、ってわけじゃないの。
そんじよそこらのイケメンなんて、その気になれば掃いて捨てるほど集められるじゃない」

世の中の恋する女の子に土下座して回れ自過剰女。

脛を踵で刈られる。

弁慶が泣いた。

「違うでしょ。あたしは、あたしの式が導き出すたった一人が欲しかったのよ。その為に曲も歌詞も書いて歌って踊ったんじゃないの。
なのに何？ これだとその一人が見付からないでしょ。もう、バンドは目立ち過ぎだって、最初に気付くべきだったわ」

脊椎に手刀を落とされた。

ちよつと待て、今のは八つ当たりだろ。

「まあ実際、誰があたしの式の答えだったのかわからなかったのは、残念ね」

そのたった一人の為に、ここまでしてきたのに。と理紗は言う。

一人の為に。

作詞作曲、ダンスは……なかった。一連のあれこれをやってきたのだ。

同じ場所にいるよって、言ってくれた君が――

結論をしてそれは式だったのか、彼女の想いだったのか、俺にはわからない。あの日、あの場所は既に異常だったのだ。どんな現実だって意味を持たない。ならば気にする必要もないだろう。結局の

ところそんな風に変更したのも、理紗の気紛れだったのかもしれないし。全部俺や鈴童が考えすぎていただけだってこともある。そう考えると、むしろそうとしか思えなかった。

ちよ、待てよ。だったら今日までの奮闘は――

「うん。無駄ね。骨折り損よ」

だよな。

そんなことを言うときの理紗は本当に楽しそうだ。

赤い空。流れて行く雲はどこまで行くのだろう。いつか空の果てに辿り着くことがあって、消えて行くのだろうかと考えていた子供の頃。そんな、遠い過去を思い出す。すると無邪気な理紗の笑顔が羨ましかった。

夢と引き換えに知識を手に入れて、現実を受け入れることで褪めて行く。世界はいつか色を失くして悲しくなるのだろうけれど、こいつだけはきつと、そうならないだろう。だから、こいつといるのは楽しいのだと思う。失うこともあるけれど、今はそれで構わないと思えるから。

「何よその顔。変なことでも思い出した？」

不意に、思ってしまった。

けれど口に出したりはしない。

もしかしたらおまえの描いた式の答えは直ぐ近くにあるのかもしない、と冗談でも言えそうになかった。幸せの青い鳥は近くにいる。果たして、幼馴染みは青い鳥になれるのだろうか。だったとして、その鳥は幸せを運んでくれるのだろうか。

なに。

わからないなら今はそれでいい。

いつかこいつが、それさえ解き明かす式を組んでくれるような日が来ると、そう思う。俺はどうせそれまでこの腐れ縁を切れずにいるだろう。どれだけ無意味に思えても、捨てる気にはなれない、これはそんな縁なのだ。

ふと、沈んで行く夕陽を見ながら問い掛ける。

「なあ理紗、おまえさ、本当は全部わかってたんじゃないのか？」
それが何を指して全部なのかは、あえて曖昧にしてみる。

この式がどのような結果に至るのか。鈴童が抱えていた箱庭。俺が手首を怪我していたこと。俺が、こんな謎哲学大好きの式少女を——なんだっていい。どう捉えるかは理紗次第だ。解釈は任せようと思う。俺が欲しいのは結局、こいつの答えだけなのだ。生徒会室で予想したその返答が正しいのかどうかと、少し気になったただの話だ。

風が止まる夕風の時刻。世界は朱色でもうじき青い夜空に白い月が昇る。

硝子で出来た世界を錯覚させる透明な夜——雲はない、きっと明日は晴れるだろう。

果たして、その中で、

「当然でしょ。こんな式、とつくに解いちゃってたんだからっ」
期待を裏切らず、笑った哲学少女がいた。

/ t h e r e b e t h r e e p i e c e
/ e n d

/ Epilogue (後書き)

ご愛読ありがとうございました。
公募のこともあり、ご感想や批評、
評価が頂けるなら非常に励み
になります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8390o/>

スリーピース

2010年12月31日19時10分発行